
桂木さんと女子校

彩雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桂木さんと女子校

【Nコード】

N01391

【作者名】

彩雅

【あらすじ】

平和な学園生活を目指して『宝華学園』に期間限定の転入をした『桂木真』。果たして真の望む平和は得られるのか？前作『桂木さんの日常』の続編になります。

転校前（前書き）

『桂木さんの日常』の続編です。あいかわらず駄文ですがよろしく
お願いします。

転校前

『日曜日の13時に生徒会室に来てください。』

これが担任であり姉のゆうちゃんが伝え忘れていて電車内でメールで伝えて来た事だ。

時間的に考えても駅から直接行かなければならないのは確実だ。

教師として絶対にやる気がないのは確実だ。

…ホントは荷物整理してから事務手続きしに行きたかったんだけどな…。

ってそもそも制服のある学校に私服で入っていいんか？制服衣類と一緒に梱包して送っちゃったぞ。…うーん……。まあいいか。学園生活開始前から遅刻はシャレにならないだろうしな。

さてさて…地図を片手に宝華学園には着いたけど…事務室はどこだ？

まわりを見ても案内板は無しか。って事は誰かに聞かなきゃだよな…。日曜の昼時に誰かいるかが問題だな…。

やっぱ日曜だから誰も歩いて無いしな。さて、どうしたものかな…。

「おーい。」

こうなりゃ勘で探すっきゃないか？時間に間に合えばいいんだけど。

「聞こえてる〜?」

とりあえずは校舎に入ってからだな。どう考えても外に事務室があるとは思えないし。

「無視しないで〜!」

ぬおっ!なんだ!いきなり叫ばれたぞ!キョロキョロと探すと後ろに人が一人…。

「あ、やっと気付いてもらえた。」

…なんでこの人は金属バットを振り上げてるのか気にはなるところだ。

「えっと桂木さんですか?」

俺の名前を知ってるって事は宝華の人か?多分そうだな。これでストーリーとか言ったらビビるけど。

「はい、そうですけど…。あなたは?」

一応それらしい言葉使いをしないと。スッゲー面倒だけど…

「あ、失礼しました。私は宝華学園生徒会の甲野【こうの】と言います。桂木さんをお迎えにあがりました。」

生徒会の人か。つまり生徒会の人金属バットを常備してるという事か。奥が深いな。

「ご親切にありがとうございます。」

「いえ、では生徒会室にご案内しますので着いて来て下さい。」

俺を先導する様に歩く甲野さん。金属バットをカラカライわせながら引きずってんのが若干気になるけど俺は後ろに着いて行った。

そしてある事に驚いた。

涼しいんですけど！校舎に冷房とか入ってるし！ヤバいつて！

「質問していいですか？」

「はい、なんでしょう。」

甲野さんは足を止めて俺の方を向いた。

「校舎に冷房があるんですか？」

「ええ。当然じゃないですか。」

イヤイヤイヤイヤ！当然じゃないから！精々教室までだから！

驚く俺を気にせず甲野さんは再び歩き出した。お嬢様学校ってのは冗談じゃないらしいな。そもそも廊下に絨毯がひいてある段階でおかしいとは思ってたけど…

暫く歩くと甲野さんの足が止まった。金属バットを傘立てに置いてまた俺の方を見た。

「ここが生徒会室です。では入りましょう。」

甲野さんに続いて俺は生徒会室に入った。そこで俺は再び驚かされた。

「いいから通せ！」

「無理。」

なんていうか闘ってた。一人の武器はデッキブラシ。もう一人は箒。そんな中に入って来た俺。

「無理じゃない！必要経費だったのよ！」

「ならデザートは必要無いはず。」

デッキブラシと箒を打ち合いながら舌戦を繰り広げる二人。中にいる人は……達観した目で見てるな。つまりいつもの事なんだな……。

「二人とも止めてください。」

甲野さんが止めるも二人の動きは激しさをますだけだった。

「そんな器が小さいから胸も小さいのよ！」

あ、箒の方の動きが止まった。しかも室内の人が退避しだした。みんな扉の方に……。

「桜……あなたは私を怒らせたわ。」

箒を持っていた人が顔を上げた。ギラリと両目を輝かせてデッキブラシを持っている人を睨んだ。

って怖いって！ヤバいオーラ発してるから。

「やばっ…。」

デッキブラシの人が一步下がる。どうやら箒の人にとって胸の話は禁句らしい。確かに大きく無いな。多分、舞といい勝負なんじゃないかな？

「ああ…。こうなった幸さんを止められるの会長だけなのに…。」

甲野さんは室内に居た人達を見る。みんな首を横に振ってる。

「会長は職員室に…。」

誰かが小さな声でそう呟いた。甲野さんはため息をついて項垂れた。

「いいわ。あんたとは決着【ケリ】をつけたかったのよ。」

デッキブラシを持っていた人は柄を握りしめて構えた。やる気だぞ、おい！

「甲野さん…。止めたらいいのですか？」

俺は小さな声で隣にいる甲野さんに尋ねた。甲野さんは二人から目を離さず頷いた。

「多少手荒くなっても？」

甲野さんは再び頷いた。

俺はそれを見て一歩前に出た。鞆は下ろして足元に置いて右手に近くにあった書類だと思われる紙の束を手にとった。

「あ、桂木さん…。」

後ろから甲野さんの声が聞こえた。俺は開いてる左手をヒラヒラと軽く振って返した。

そんな事していると二人が動いた。

「殺す。」

「やってみろや！」

お互いが得物を振り上げた。俺はその二人の間に向かって右手に持ってた紙束を投げた。

紙はバラバラになりながら二人の間に舞った。

「あんだ、こりゃ！」

「くっ。」

二人の視界が紙でいっぱいになる。その紙の中に俺は飛び込んだ。

飛び込んだ勢いで回り右の肘を箒の人の側頭部に叩きこむ。

手応え抜群だ。俺は肘に感触を得たまま振り抜きそのまま体を回す。

そして左足を跳ね上げて逆回し蹴りの形で踵をデッキブラシの人の顎先に向ける。ブラシの人はブラシの柄で防いだきたがおかまいなしに振り抜く。バキッって音の後に人体に当たる感触が足に伝わる。そして慣性でクルッと一回転して俺は動きを止めた。

紙が舞散る中、箒の人は膝をカクンと落とし座る様に倒れる。一方デッキブラシの人は折れたブラシを持ったまま壁に当たり倒れた。

やり過ぎた…かな？

チラッと見るとみんな呆然としてる。

やり過ぎたっぽいな。ってよりやり過ぎたよ…。形的には代表なんだよな、俺。

『霞ヶ崎学園の代表生徒。転校前日に宝華学園生徒の2人に暴行。』

こりやなかなかスリリングな見出しだな。ハッハッハ…ハハハハハ…。ハア…。

パチ…パチ…パチ…。

なんだ？幻聴か？手を叩く音が聞こえる。しかもこれは余裕のある大人な拍手だな。

パチ…パチ…パチ。

また聞こえた。って事は幻聴じゃないのか？俺は音の発信源の方を見た。

そこには確かに手を叩いてる人がいた。この人は一体だれだ？

「あ、会長。戻られたのですか？」

会長！？うわっ！生徒会長の前で殴り倒してたのかよ。

…平和な学園生活は消えそうだな…。下手すると転校前に強制送還だな…

案内

「ご挨拶が遅くなりました。私が宝華学園の生徒会長を勤めさせて頂いている冬野 聖【とうの ひじり】と申します。」

ピンと背筋を伸ばして俺を見ながら挨拶をしている人、この人が生徒会長らしい。

手間のかかりそうな長い髪はサラサラしてる。切れ長の目で俺を、生徒会室全体を見ている。

「霞ヶ崎学園から参りました、桂木 真です。よろしくお願いします。」

なんか緊張すんな。変なプレッシャーを感じる。

「桂木さん、宝華学園の全生徒を代表してアナタを歓迎致します。ようこそ、宝華学園へ。」

ニツコリと俺に向かって微笑みかける冬野会長。

「まずは生徒会のメンバーを紹介します。そちらでデッキブラシを持って寝ているのは副会長の水無月 桜【みなづき さくら】さんです。」

俺が踵をぶちこんだのは副会長らしい…。これはヤバイよな〜。

後で謝っておこう。

「そしてそちらで箒を持っているのが一文字 幸【いちもんじゆき】さん。会計の職をお願いします。」

こっちの人は会計かよ。よし、謝ろう。目が覚めたらすぐに謝ろう。

「そして桂木さんを案内して来たのが甲野 棗【こうの なつめ】さんです。」

あ、ようやく普通になっている人の紹介だ。甲野さんはペコリと俺に頭を下げてきた。なんか感じのいい娘だな。

「そして次は……。あら？他の方々が居ませんね。」

そうなんですよ。皆さん気付いたらいないんですよ。

「他の方々でしたら面倒事と後々の処理を避けるように逃げましたよ。」

なるほど…って…。

面倒事ってのは俺の事なのかな、やっぱり。

ってか、それ以上に気になる事あるんだよね…

「あの…。」

「はい、なんででしょう？」

鉄壁の微笑みだな。不意打ち気味でも一分も崩れない。

「あの、そちらのお二人は大丈夫なんでしょうか？」

俺は椅子に寝かされている二人を見ながら会長さんに聞いてみた。

「そんなヤワではないので大丈夫ですよ。」

そりゃ生徒会室で暴れてる位だからヤワじゃないとおもうんだけど…

「いえ…自分の履き物が…。」

座った態勢で踵を鳴らすと『ガッガッ』と重い音が聞こえる。

「ブーツなんですよ…。」

甲野さんと会長の目がデッキブラシを離さない副会長さんを瞬時に捉えた。

そうなんですよ。ブラシで弱まったとはいえさ、いいのが顎にはいつちやっただですよ。

「大丈夫ですよ。副会長は頑丈ですし。」

「そうですね。かねてから『自分は頑丈だ』と言っていましたからね。」

『頑丈』って便利だな。二人ともその二文字で通そうとしてるし。

「では、二人は目を覚ましそうにないので私と甲野さんと桂木さんの案内を致しましょう。」

「そうですね。じゃあメモだけ置いていきましょう。」

甲野さんは近くにあった紙になにかサラサラと書いて机の上に置いた。

『そんな感じです。』

……………。

どんな感じだよ！こんなメモ見て何を理解しろってんだ！

「こんなメモでいいんですか？」

多分、当然の疑問だと思う。目が覚めてこんなメモみたらテンパること請け合いだ。

「予定は伝えてますから十分に伝わります。では、甲野さん、桂木さん、参りましょう。」

席を立ち扉に向かう会長。そんでその後ろに着く甲野さん。…いいのかなあ…。

結局俺にはどうしようもなく二人の後に続いて生徒会室を出た。

「桂木さん。どこか行きたい所ありますか？」

…ノープランだ。この会長はどうやら案内する順番を決めてなかったらしい。

「遠慮なさらずに行きたい所をおっしゃって下さい。」

遠慮しないでと言われてもな…。

「…じゃあ食堂へ。」

「はい。では食堂に参りましょう。」

そういつて歩き始める会長。その後ろを歩く甲野さん。俺は道もま
ったくわからないからその後ろをくつついていった。

…これが食堂なのか？これが食堂に足を踏み入れた俺が真っ先に思
い浮かべた言葉だ。

平然と足を進める会長と甲野さん。

その会長を見る他の人達。ここに居るって事は宝華の生徒なんだよ
な。やっぱ会長ともなると人気なんだろうな。あきらかに憧れ視線
だし。

そして、これが当然です。みたいな感じで居られる会長と甲野さん
もまた凄いな。…俺もなんか見られてる気がする。

『誰だ、こいつ？』

的な視線だな。ヤッベエ…視線がチクチク刺さる。

そして、これはどこのレストランだ！食堂なんてレベルじゃねえぞ！

「桂木さん。こちらどうぞ。」

会長と甲野さんはすでに座って俺を呼んでいる。

「あ、はい…。」

訳もわからず俺は会長達のいるテーブルに行く。…普通、食堂のテーブルは丸テーブルじゃない…。テーブルクロスもかかってない。

しかし驚くのはまだこれからだった。俺が椅子に座ったその瞬間だった。

「いらっしやいませ。」

……はあ？なんでウェイターがいるんだ？

「こちらメニューです。」

メニュー…ですか。なんなんだこりや…。

「私はダージリンを。」

「私も。」

二人共メニュー見てもないぞ…。すでに見る必要もないんですか…。

二人、いや、三人の目が俺を見てる様な気がする…。気のせいか…？

メニュー…メニュー…っと。

って…こ、これは！

メニューに並んでるのはA B C D…。え、英語で書かれてるぞ…。読めなくは無いか…。アイツ等じゃ無理だろうな…。

「おれ…、私はフレンチロースト。」

メニューを閉じてウェイターに渡す。

食堂のはずなのに変に疲れるぞ…。思わず俺とか言っちゃまったし…。堪えろ。可能な限り猫被るんだ。

「桂木さん。」

「は、はひっ？」

なんだ急に。俺って言ったの聞こえてたのか？

「桂木さんは紅茶は飲まれないのですか？」

はひ？なんでまたそんな質問を…。俺は訳もわからず視線を反らした。右を見ても女の子…左を見ても女の子…。当然、前を見ても女の子…。そして皆の手元にはカップ…。理解した。

「コーヒー飲む人居ないんですか？」

「居ないとまでは言いませんが学生では希少な事は確かです。」

なるほどな。確かに紅茶の種類多かったし。こんだけ種類が多いと自分の好みを探すのも一苦勞なんだろうな。

「そういえば桂木さん。この後のご予定は？」

予定？ 予定って言われてもなあ…

「荷物を整理する程度です。」

「そうですか。では門限の時刻までに帰ればよろしいですか？」

そうだな…。荷物ったってそんな多くないしな。飯食って少し片付けりゃ大丈夫かな。

「はい。それくらいだったら大丈夫です。」

門限は7時…だったよな。はあ…門限か…。面倒だな。

「では一息ついたら校内を回しましょう。」

一息ついた後俺は会長と甲野さんに連れられて校内を見て回った。

後ろに人がゾロゾロ着いて来てたけど…。会長さんてメツチャ人気あるんだな…。

んで人気者の会長というからって俺をジロジロ見ないでもらいたいもんだ。疲れるから…

初日【朝】

さて…今日からついに宝華学園の生徒としての生活が始まる訳なんだけど・・・

眠い！ひたすらに眠い！こんな眠い時は屋上で寝るに限るんだけど。屋上が出入り禁止じゃなければさ。

まあ教室で寝てればいいか。それくらいまでなら耐えられるだろう。

んじゃ職員室に行くかな。担任に挨拶しなきゃ行けないし。職員室は一階だったな。

コンコン…

「失礼します。」

こういう礼儀は大事だからな。第一印象は重要だから。

「本日から宝華学園に通う事になった霞ヶ崎学園の桂木 真です。」

「桂木さん？こっちですよ。」

こっち…？どこだ？…声のする方に行けばわかるか。

えっと…。おかしいな、声のしたほうに来たけどだれも居ない。

「ここですよ。」

ここ？まさか下か？視線を下げるとそこに人が居た。

「ちっちゃ…。」

「あう…。そういう事は本人を目の前にして言わないでよ。」

そんな頬を膨らませて拗ねなくても…。メツチャ小動物だな。

「それで小学生なアナタはどなたですか？」

「丁寧な言葉で毒を吐かないでよ。私はアナタの担任です。」

はあ？担任？この子は一体何を言ってんだ？

「それでプラカードを持った人はどちらから出てくるのですか？」

「ドッキリじゃない！ホントなの！」

いやいや、ドッキリだろ。どうせどこかにカメラとかあるんだろ？

「ほらほら、これあげますから落ち着いて下さい。」

ポケットから某ママの味の飴をだして目の前の小学生に手渡す。

「わーい。ありがとう。」

早速包みを剥がして飴を口に入れて幸せそうに微笑む。やっぱり子

供だなあ。

「ふぁふうらひいはん。ほうらいにおはひをもっへひひやらへよ。」

「飴を舐めるか話すかどちらかにして下さい。」

何を言ってるのか聞き取れん。なんとなく何を言ってるのかはわかるけど。

「コロコロ♪」

どうやら飴を舐める方に集中して話す方を止めたらしい。…なかなかのつわものだ。

この状況で俺はどうしたらいいんだ？この小動物的小学生が飴を舐め終わるのを待ってればいいのか？

他の教師は……あ、居た。

「すみません。霞ヶ崎学園から来ました桂木と言います。担任の先生はどちらにいますか？」

そう、わからなければ聞けばいいんだ。

「そちらの姫宮先生がそうですよ。」

近くに居た教師が指差したのは幸せそうに飴を舐める小学生。

「そんな冗談は止めてください。」

もうバレてますから。ドッキリにあわせなくてもいいんですって。

「冗談でもなんでも無く。」

……………。

「ホントですか？」

「遺憾ながら。」

お、おのれ文○省！一体何を考えてやがる！絶対に経歴詐称だろ！これが教師だと考えられるか！

「私はどうしたらいいでしょう？」

「姫宮先生の手を引いて教室に向かって下さい。桂木さんは2年C組です。」

おおぅ！クラスが前と変わらないとは…なんたる偶然！

とか考えてる内に話してた教師居なくなってるし！

しょうがない…あきらめるか。はぁ…転校初日だぜ？なんなんだこの苦労は…

俺は小動物的小学生に向き直る。…しかし、これを先生とは呼びにくいな。教師に見えないし。なんて呼んだらいいんだ？…小学生…ガキ…ロリ…幼女…プチ…チビ…。これらはマズイよな。となると姫宮だから…

…お姫…姫ちゃん…姫チビ…ロリ姫…チビっ子姫………試しに呼んで見るか。

「姫ちゃん。教室に行きますよ。」

俺が手を出すとその手をムギュッと握ってきた。手もちっちな。

まあいい。どうやら姫ちゃんです問題ないみたいだ。その姫ちゃんは俺をジーツと見てる。これは何か期待を含んだ目だな。俺は開いてる手をポケットに入れて飴を一つ出して手渡す。

姫ちゃんはまた即効で包みを剥がし飴を口に入れた。

俺は姫ちゃんの手を引いて2年C組の教室に向かった。場所は昨日一回りしたからなんとなく覚えてる。

しかし普通引率するがわの教師の手を引いて教室に向かう転校生って一体なんなんだろうか…

そして無事に教室までやって来た。それまでに俺は姫ちゃんに3個の飴を上げた。たかれたのか？

「さて桂木さん。ここが教室だよ。」

それはわかっています。自ら進んでここに来ましたから。

「そーいえば桂木さん。リボンタイは？」

「ポケットに入ってます。暑かったので外してました。」

そう言うとはっぺたをプクくっとな膨らませた。俺は思わず膨らんだほっぺたを潰したくなり実行した。

「ぶふふふ〜！」

大方の予想通り、姫ちゃんは口から空気をはきだした。

「タイはしないとダメ〜。しかもボタンも開けすぎ〜！うらやましい…じゃなくてけしからん谷間見えてるから〜！」

今確実に姫ちゃんの本音が溢れた。姫ちゃんは見た目確実に小学生だ。身長も…体型も…。

「わかりました。入る迄に着けます。」

「ホント〜に〜？」

「はい。」

嘘です。面倒だから着けません。そのまま入る気満々です。

「ちょっと着けるんだよう。私が呼ぶまでにだよ。」

そう言って姫ちゃんは教室のドアを開けて中に入ってしまった。

「みんな〜。ごっきげんよう〜！」

『ご機嫌よう。』

くはっ！まさかご機嫌ようの挨拶を本当にしているとは！これだけは信じたく無かった！ぜってえ言いたくねえ！

「今日はくろくろくの前で重大な発表があります。」

普通はここでざわつくんだけど教室内は静かだ。恐るべし。

「みんな知ってると思うけど、かしゆみが…かすみがしゃき…：かちゆみがちゃき…：。」

噛んだ。確実に三回噛んだ。

「ふえ…ヒック…。」

あ、泣きそうだ。小学生が噛んだ拳句泣きそうだ。

「姫宮先生頑張ってください！」

「先生ならきつと出来ます。」

「私達は先生を信じます！」

ぬお！なんだこの教室内の一体感は！なんだか凄いぞ。

「ヒック…：かすみが…さきがくえん…：から転校生が来ました。」

パチパチパチパチパチパチパチパチッ！

万雷の拍手が鳴り響いてる。姫ちゃんが言い切っただけなんだぞ？そんなに拍手が起きる事なのか？

「それじゃく入ってきてく。」

これで俺に入れと？あきらかに主役を姫ちゃんにもってかれたこの状況でか？…でもここにいつまでも居てもしょうがないしな…。

よし、最大級に猫被っていくぜ。第一印象をミスると終わるからな。ドアに手をかけて静かに開け中に入る。

「この度、霞ヶ崎学園から参りました桂木 真と申します。二ヶ月という間ですが皆さん、よろしくお願い致します。」

それでもって深々とお辞儀をしてニッコリスマイル！

自分でやってて寒気がするぜ。鳥肌が立ってきた気がする。

視線を浴びてるのがよくわかる。ってなんか痛い視線が…。こんな怨みを買うような記憶は…

チラッ

あったあ！見覚えのある人が俺を見てる！イヤ、睨んでる！

落ち着け俺。慌てるな。動揺を悟られるな。し、視線が痛え。矢の如く突き刺さる。

俺を睨んでいらっしやるのはデッキブラシの人。役職は生徒会副会長らしい。怨まれる覚えはあっても一度も話した事は無い。

話した事の無い人の怨みを買うなんてなかなか出来ないな…。喜ばしい事じゃないけど。

「それじゃ〜桂木さんの席は…：…あそこだよ！」

姬ちゃんはビシッと指差した。怨み視線の前の席を…。こりやあもうフラグが立ったとしか思えねえ。ストレスで胃がやられない事を願うか…。

普段の何倍だろう…？20倍位はおしとやかに指差された席に向かつてあるく。

へっへっへっ。近付くに連れて眼力が上がってきてるぜ。こりやあれだね。ビームだね。怪光線だ。人を殺せる視線だよ。

「よろしくお願い致します。」

三方の人にペコリとお辞儀して席に座る。…本当は二方向にしたかったけど流石にそれは無理だった。

窓際は有難いが…逃げられない。

俺の後ろからは後頭部めがけて視線が刺さりまくってる。なんなら出血しそうな勢いだぜ。

そんで隣の人は…：…。

お…お…おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおおとおお！

まず金髪！そしてサイドには！

キュイイイイン！

ドリルだ！ドリル！マジでドリルだよ！こんなの実在するんだな！
金髪でドリルヘアーの女！って事はだ！これは当然…。

「私は崎島　椿【さきしま　つばき】ですわ。よろしくね、桂木さん。」

出た〜〜〜〜！ですわ！すっげ〜〜〜〜！超レアだよ！マジで実在したよ！典型的なお嬢様！

この子のムービーを送ったらゆ〜ちゃんとか色んな意味で喜びそうだな。

「ほら、水無月さんも挨拶したらいかかなのですか？」

ドリルお嬢様。その人には触れないでいいです。お願い…触れないで…。

「水無月　桜。よろしく。」

あの…目が怖いっす…。マジで…。

「…よろしくお願いします。」

「桂木さん…放課後空いてる？」

ほ、放課後？空いてるか？空いてるな…。非常に残念な事に…。

「はい、空いてます。」

「そう、じゃあちょっとお顔を拝借していい？」

お顔を拝借…？ああ、ツラ貸せてことか…。こりゃ確実な呼び出しだな…。言葉は丁寧だけどそれだけに怖いぞ。

「二人でコソコソ何をお話なの？私も混ぜて下さいませ。」

ドリルお嬢様ナイス！いいタイミングで入ってきてくれた！

「話もいいけどもう授業はじまるな。」

あ、ホントだ。いつの間にやら姫ちゃんのかわりに知らない先生来てるよ。

「…残念ですけどしやうがありませんわ。次の休み時間にでも。」

「ええ。」

「ああ。」

二人は授業の準備を شدした。

ところで次の授業は一体なんなんだ？

昼休み

「起立、礼。」

終わった…。やっと終わった…。

流石にキツいな。そもそも授業で作法とかあってもな…。全然意味わかんねえぞ…。

さて、取りあえず昼だ！飯食って午後に備えるか…。

「桂木さん。」

ん？俺を呼ぶこの声は一体だれだ？机から視線を上げて上を見ると…
うわお…この方は俺の後ろの席なのにいつの間の前に回ったんだ？

「ちょっといい？」

「拒否権は…？」

「ない。」

バツサリ切られた。…せつない話だなあ。

「昼食をとらないと…。」

「いいから。」

この目はマズイな。断ったら殺るって読めるな。でも断らなくても結局殺られそうだけど。

「お付き合いします…。」

少しでも寿命を伸ばそう。本当に少しかもしれないけど…。

「じゃあ着いてこい。」

クルッと背を向けて歩きだす水無月さん…だっけ？今なら逃げられそうだけど…。逃げたら後が怖いな。着いて行くか…。

「桜様…！」

そして廊下に出て直ぐに囲まれてる。耳が痛くなるような声だ。

「桜様…！」

「お昼を一緒に！」

「いえ、私と！」

なんだこりゃ…。全く訳のわからん状況だ…。

「すまない。今日は予定があるんだ。また今度な。」

うお！笑った！初めて見た！

「きゃ…！」

そんなもって囲んでた人達が卒倒した！なんて破壊力だ！

そんな倒れた人達の横を抜ける様に歩いてく水無月…だったよな？俺もその後ろに着いて行く。

「人気なんですね。」

小さな声でそう尋ねた。大きな声だすとなんかヤバイ雰囲気だからな。

「役職着いてるからだ。別に興味ない。」

サラッとしていらっしゃる。見た感じ役職どころじゃ無いと思うけどな。嵐が居たら黙ってないだろうな。

それだけ言うとスタスタと歩いて行く水無月さん。すれ違う生徒から熱い視線浴びまくりです。そして俺にくる視線が辛いです…。

「ここだ。」

視線にさらされながら歩いて着いたのは…道場か…？

靴を脱いで続く様に入る俺。目の前には横開きの扉。こりや間違いなく道場だな。

「入ってこい。」

中をキョロキョロと見てると声がかかる。あ、もう扉の向こうに行ってるし…。

「失礼します。」

入り口で一礼してから中に入る。

「桂木さん。お待ちしました。」

はいはい、お待たせしました…って、おい！なんで他に人が居るんだ？

中に居たのは会長、会計の人、それと甲野さん。

まさか袋叩きにあうなんてオチか？

「どういった事でしょう…？」

考えられるのは袋叩きか…たこなぐりか…フルボッコ…。ってだいたい同じ意味だな。

「水無月さん。説明してないのですか？」

口を開いたのは会長。ちなみに会計の人からはものごっつい睨まれている。刺さります！刺さりまくります！

「してない。説明よろしく頼んだ。」

それだけ言うと個室に入って行った。更衣室か？

「桂木さん。突然来て頂いて申し訳ありません。」

「いえ…。」

視線を閉まったドアから会長に戻す。

「実は水無月さんが桂木さんと手合わせしたいと言われました。」

手合わせ…？お互いのお手々のしわとしわを合わせて…じゃないよな…。

「それは昨日の件で…ですか？」

相当恨んでるだろうからな。公に仕返しなんだろうな。

「そうです。ただ仕返しではなく技術を知りたいとおっしゃってました。」

技術ね…。そんなたいしたもんじゃないけど…。

「…わかりました。私でよければ…。」

断れないよな。いきなり殴ったりしてるし。…殴ってないな。副会長は蹴ったんだな。

「ありがとうございます。では桂木さんも準備して頂けますか？」

準備と言われましても…特にすることないけどな…。唯一あるとすれば…。

「ヘアゴムありますか？」

髪が邪魔だ。普段なら気にしないけど動くなると流石に気になる。

「髪を結ぶのですか？でしたらこちらに来て下さい。私がやります。」

お言葉に甘えよう。髪なんかいじらないから苦手だし。

会長の所に行って座る。会長は俺の後ろに回った。…会長以外の足音も聞こえた気がする…。

「桂木さんの髪は染めてる訳では無く地毛なんですね。根元まで同じ色ですね。」

「キレイな髪ですね。」

この声は甲野さんだな。ってかあんまり観察しないでもらいたい…。恥ずかしい。

更に願うなら会計の人。正面からジーツと見ないで下さい。

「あの…何か？」

「気にしないで。」

気になるわ！せめて座るなら普通に座ってくれ！ちゃんと膝を床につけて！

くっそ…、どこを見てればいいんだよ…。やっぱ横か？

「頭を動かさないで下さい。」

はい、すいません。動かしません。再び正面を向く。視界に入る会計の人の顔。及び会計の人の白い足と薄い水色の…。

あうあう…。まあ見れて嬉しいのはあるんだけどさ…。流石に堂々と見るのはマズイし…。

あ…。ある事がわかった。俺って天才じゃねえ？そんである事をした結果…。

ほら！見えなくなった！予想通りだ！これで問題無いな！後は髪を結んでもらうまでこのままで居ればいいんだ。

って結ぶだけなのになにやに時間かかってんな…。

「あの…まだ結び終わらないんですか？」

「今ブラシかけてますからもう少々お待ち下さい。」

ブラシ？たかが結ぶだけなのになんで？

「サラサラですね。羨ましい。」

「全くだす。」

いやいや、そんな事無いと思うけどな…。って早く終わってくれないかな…。

「これはどんな状況なんだ？」

あ、あっちは準備終わったみたいだな。副会長の声が近くで聞こえる。…どんな状況なんだろうな…。

俺の後ろで俺の髪をいじってる会長。それを見てる甲野さん。俺の前に座ってる会計の人。それに挟まれて目を閉じてる俺。…自分でもいいながら訳わからない状況だな。

「幸、見えてるよ。」

「知ってる。別に減るものじゃないし。」

減ってます！俺の精神的ななにかが現在進行形で！INGでガリガリ減ってますから！

「桂木さん。準備はできた？」

うーん…どうなんだろう…。

「会長、どうですか？」

「大丈夫ですよ。髪を結ぶのにそんな時間かかりませんから。」

じゃあ今まで一体何をしてたんだろう…。

「じゃあ桂木さん。やろうか。」

やろうか…って…。うう…。お腹減ったよ…。

昼休み・戦い

「それで桂木さん。本当にそのままでもいいの？」

そのままって…確かに副会長は胴着に着替えてるけど…こりゃマジだな

「私も着替えた方がいいのですか？」

「別にそのままでもいいなら構わないけど…。」

なんでそこで会長をみるんですか？そんで会長もなんでニッコリ笑ってんだ？

「会長のあの表情から察するにカメラくるから。」

カメラ？なんの事だ？あれか？クルクル回りながら空を飛ぶ怪獣か？

「私は呼んでいません。ただあの方の嗅覚は計り知れませんから。」

え…マジでカメラ来るんですか？となるとスカートノーガードは流石にマズイよな…。

「えっと…スパッツあります？」

よし…。体も温まったし準備OKだな。副会長も準備できたみたい

だな。さて、やりますか。

スパーーーン！

「これはナースタイミング。今から丁度始まるみたいね。」

ぬわっ！なんだ？誰だ？何事だ？

カメラを持った人を引き連れてやって来た一人の人。中の状況を見てからカメラの方に向き直った。

「淑女の皆さん、こんにちは。今日は皆さん憧れの副会長の水無月さんの勇姿を御見せします。」

なんなんだ？放送部か？いやに間延びした喋りだな。

「水無月さんの御相手は……。」

あ、俺の方を見た。それでもって俺に近付いて来た。

「確か桂木さんよね。顔と名前を御出していい？」

さて、どうしたもんだろう……。ここで顔出すと騒がれそうだし……。でもマスクとかすると視界がな……。

「なんならあんまり映らない様にしてモザイクかけるけど。」

あつ、それは助かるな。そうすりゃ周りにバレにくいだろうし。

「あ、じゃあお願いします。」

「はいはい。」

そう言って放送部の人は戻って行った。

「じゃあこれ着けて。」

副会長が投げた物を受け取る俺。これはグローブか。それも総合とかで使うようなタイプだな。両手にはめて拳と手の平を打ち付ける。

パン!

うん。いい感じだな。軽く左右のパンチを打つてみてもそれほど邪魔になる感じないし。

「いい動きだね。それじゃあルールを説明するよ。時間無制限の本勝負。グラウンドは無し。投げはあり。参ったするかその会長が止めたら終わり。どうかな?」

スタンディングの勝負か。悪くないな。

「わかりました。」

そう言って俺は道場の真ん中の線の所に行く。副会長も同じ様にやって来てお互いに一礼する。

しかし、こういう真っ当な所でやるのも久々だな。男の頃は助っ人で行ってたけど最近呼ばれないしな。

「それでは…始め!」

会長の声で道場内の雰囲気が変わる。声を出しているのはさっきの間延びした放送部の人だけだ。

俺はゆっくりと右手を前に出す。副会長も右手を出して俺の右と拳を合わせる。

お互いに右手を引いて相手をじっくり見る。

副会長は右半身を少し引いた半身。両手は顎の辺り。体重はやや後ろ足にかかっている。よくみる空手の構えに思える。

一方の俺は流派なんかないからな。普段は構えなんか気にしないんだけど。今日は状況が状況だけに構えをとっている。

副会長と同じ様に右半身を引いた半身になって軽くジャンプしながらリズムを取る。両手は握らずお腹辺りに。某カンフースターの構えだな。

お互いに様子を見ながら円を描く様に動いていく。お互いが半周して位置が入れ替わった。そこでお互いに動きを止めた。少しの間の後、副会長が動いた。

「はっ！」

まず内腿への左のローキック。これは足を上げて流す。ローを打った副会長はそのまま距離をつめて来た。

続けて左ジャブ2発からの右。狙いはもちろん顔面。それは首を左右に振ってかわす。かわしても副会長は止まらない。左右の拳を連

打してくる。ストレート、ジャブ、フックと使い分けながら打ってくる。

って結構速いぞ！最近暴れて無かったってのもあるのかもしれないけど…。

俺は副会長の拳を流し、弾き、避ける。因みに数発かすった。

ってマジで止まらねえし！かわせる事はかわせるけどキツいな。

しゃあねえな…。止まらないなら打つ前に止めるか。ホントは女の口に手を出したくないんだけど…。

副会長の両肩の動きを見ながら俺も手を動かした。

パパパパパパアアアン…

副会長は後ろに下がって距離を取った。そこで少し驚いた表情で俺を見てる。

へえ…。やってみると意外と出来るもんだな。

俺がした事。それは副会長の拳のラッシュを全部迎撃した。副会長の両手にたいして俺は左一本で。まあ速さだけだすならなんて事ないしな。

「やるね。」

副会長が唇のハジを軽く上げながら言ってきた。

「お誉めにあずかり光栄です。」

こういうときは返すのがマナーだよな？

「いくよ！」

副会長が再び突っ込んで来た。そしてまた連打を打ち込んできた。ってさっきよりさらに早いんだけど！無理無理！こんな弾ききれねえ！

避けれるのは避けて無理なのはガードする。

こりゃマジでマズイぞ。このままだといずれ当たりそうな気がする。

「どうしたの？打ってきなよ。」

いや、わかっています。これが挑発だってことは。ただ、このままじゃヤバいのも確かだ。…くそ！

「うらあ！」

スパアン！

一瞬の隙を縫ってくりだした右ローが副会長の足を捉えた。

副会長は後ろに下がった。あめえ！

「逃がすかよ！」

副会長が下がった分プラス半歩分踏み込む。

そのままの勢いで膝をを跳ね上げて副会長の腹に膝蹴りを入れる。

「くっ！」

副会長が声を上げる。俺は更に左右の掌底を副会長の脇腹にぶちこむ。

たまらずに副会長は体をくの字に曲げた。

チャ～ンス！

副会長に向かった右足を上げた。狙うは顎。

副会長は俺の足に気付き顔を後ろに反らして俺の右足を避けて。

まだだ！

回転を止めずに今度は左の上段後ろ回し蹴りへ繋ぐ。

よし！手応え……足応えあり！

俺の左足は確実に副会長を捉えた。俺は回転を止めて態勢を整える。

副会長は横に飛ばされて倒れた。…やべえ、やり過ぎたか？

道場内を静寂が包む中、副会長が動いた。そして……

立ち上がった。

って嘘だろ。バッチリ捉えたぜ？立てるとは思えない…。でも実際に副会長は目の前に立っている。

副会長が上体を屈める。まだ来るのか？

ドサツ…

副会長はまえのめりに崩れた。足が着いて来てないのか…？

その時、俺と副会長の間に白い物が飛び込んで来た。

「水無月さん。もう無理です。」

それは会長が投げたタオルだった。副会長は投げられたタオルを見てる。

「なによ。まだできるわ。」

「いえ、水無月さん。できると言うならその足を止めて下さい。」

副会長は自分の足を抑えながら倒れている。やっぱり膝にきてるみたいだ。

「水無月さん。俺でよければいつでも相手になるからさ。」

「くそ…。今日は私の負けよ。」

副会長は倒れたまま俺を見ながらそう言った。

キーンコーンカーンコーン…

ん、タイミングよく昼休みも終わりか。

って結局昼飯食ってねえよ！うゝ…午後もつかない…

贈り物（前書き）

感想等頂けるとモチベーションが上がります。

よろしく願います

贈り物

……今日も今日とて意味のわからない授業が多い…。テーブルマナーなんか一切知らねえぞ！美味しく食べれりゃそれでいいじゃねえか。

プシュ……。とか排气しながら机に突っ伏してえ…。そもそも普通教科も確実に一度は差されるから嫌だ。

そんな愚痴を頭で思い浮かべながら脳内でストレス発散とばかりに嵐をボコボコにしながら教科書を片付ける。

『桂木 真さん。桂木 真さん。生徒会室まで来て下さい。』

またですか？なんだか毎日呼ばれてる気がするな。…そして今日も昼飯を食えないんだろうか…。はあ…行くか…。

コンコン…

「失礼します。」

何事も無く生徒会室にやってきた俺はノックして中に入る。

中に居たのは会長と会計の人。そんでもって甲野さん。

「お呼びして申し訳ありません。そちらにおかけ下さい。」

会長が指した先には椅子があった。じゃあ遠慮なく…。

俺が椅子に座ると生徒会室のドアが開いた。

「悪い。すこし遅れた。」

やって来たのは副会長さん。……そうそう、水無月さん。

「揃った所で話を始めましょう。甲野さん、準備を。」

甲野さんはカーテンを閉めてスクリーンを下げて部屋の電気を消した。…なんの話だ？それ以上に俺はなんで呼ばれたんだ？

「まずはこれを見て下さい。」

スクリーンにうつしだされたのは数枚の写真だ。

…なるほど。写真みれば俺が呼ばれた意味が少しは理解できるな。

なんてったって映ってるのは俺だからな。ってちょっと待った！

俺は慌てて立ち上がりプロジェクターの光を遮った。

「桂木さん。突然どうしました？」

どうしたもこうしたも無いわ！なんでわざわざ体育祭の写真まで！
仮装とか猫セットとかさ！

「…この写真はよろしく無いです…。」

「では飛ばしますから座して下さい。」

…なんだかその微笑みに黒さを感じるのは気のせいだろうか。…気のせいだよな…？

俺は深呼吸をしながら座ってた椅子に座る。

ガシッ！

ん…？俺の肩に手を置くのはどちら様かな？右を見ると水無月さん。左は会計の方。あの…笑顔の裏に黒いのが見えます。

「聖。抑えるから続きよろしく。」

「二人で止める。」

「お任せ下さい。」

なんなんだよ！いつの間にそんな合図だしたんだよ！

スクリーンに再び映し出される写真。

「わ~~~~~！」

仮装の写真だ。しかもヒラヒラしてる所からなんか白いの見える。

「離してください！」

「誰が離すか。」

ぬお〜！立ち上がれねえ！ヤバいって！恥死するって！

「この写真は霞ヶ崎学園の教師の方からお預かりしました。」

ゆーちゃん！間違いなくアンタだろ！こんな確認するまでもねえ！

「甲野さん。次を。」

会長の指示の元、次々と写真が映し出される。時間にして5分位。
……悶死しそう……

「写真は以上です。」

「はあ…はあ…はあ…。」

俺は机に突っ伏した。それでようやく肩から手が離された。

「メツチャ疲れた。」

「暑い。」

俺の肩を掴んでた二人は自分の席に戻ったみたいだ。

「桂木さん。あと、数名の方から伝言をお預かりしてます。」

会長は懐からボイスレコーダーを出して再生を始めた。

『真～。写真は気に入った？精々頑張りなさいよ。こっちは気楽に稼がせてもらってるから。』

やっぱり予想通り写真はアンタか！って待て！アンタはまた売ってるのか！売ってんだな？

『桂木さん。我が校の代表として頑張ってお下さい。あきらまも応援してますので。』

あゝ…麗さん。なんか真面目な挨拶が非常に嬉しいです。

『…ネタ待ってる…。』

この伝言は必要か？俺はネタを持ち込んだ覚えはねえ！周りが俺をネタにしてんだ！

『まこっちゃん。ちゃんとやってる？こっちはまこっちゃんが居なくて少し静かな？体には十分気を付けてね。』

バカ。俺は今、実姉のせいでボロボロだ。そんでなんで俺が居ないと静かになるんだ…。

『真。頑張ってお嬢様しろよ。』

うっさい。実際にいたら今の鬱憤を全部晴らしてやるのに。

伝言はこれで終わりらしい。会長はボイスレコーダーを懐にしまった。

「桂木さんにお伺いしたい事があるのですが。」

「はい。なんでしょう？」

会長はいつもの笑顔を浮かべながら俺を見てる。

「桂木さんの担任の先生と少しお話をしたのですが、こちらでの桂木さんの様子を話したら…。」

ああ…なるほど。なんとなく予想できる気がするな。

「笑ってましたか？」

「はい。それは楽しそうに。なにか思い当たる節があるのですか？」

やっぱり…。ゆうちゃん…アンタは人の苦労を爆笑で済ませないでくれよ。

「思い当たる事があります。私の担任はお互いの事をよく知ってますから。」

ん…。やっぱり色々と言った方がいいのかな？

「よろしければお話頂けますか？」

別によろしいんだけど。数日の苦労が水泡に喫するだけだし。

「まず、担任は私の姉です。なのでお互いをよく知ってる訳です。」

「同姓愛かと思った。」

そこ！会計の！変な事言うな！俺は間違っても男を恋愛対象としてなんか見ないぞ！

…あれ？俺は今女だから…。ある意味同姓愛者なのか？いや、根っこは男だからそれは普通の訳で…。ヤバイ…頭がこんがらがって来たぞ？

「桂木さん、如何なさいました？」

おおぅ！危ない危ない。メビウスの輪クラスの無限ループに陥るところだったぜ。

「すみません。大丈夫ですよ。」

変な考えは止めよう。頭を軽く振って思考を飛ばす。

「続きですけど笑っていた理由は…。」

笑うよな…。俺だって毎日虫酸を走らせながら生活してんだからな。

「私の喋り方だと思います。」

俺は4人を見る。みんな意味がわからないって顔してんな。

「喋り方が変わってことなの？私は別にそうは思わないけどな？」

あ、水無月さんが思考を取り戻したらしい。

「桂木さん。よろしければ普通に話してみて頂けますか？」

うわっ！皆が俺を凝視してる！やめて！穴が空くから！

ってなんで喋るだけで変な緊張してんだ？

…よし、腹をくくろう。

「…わかった。普段通りに喋らせてもらう。」

…んで、さっきからずっと気になってたんだけど。

「扉の陰にいるヤツ。出て来るなら今の内だぞ？」

ガタガタガタン…

「に、にゃん…。」

随分ベタだな、おい。

生徒会室内の全員の視線が扉の方に向く。

「俺が大人しくしてるうちに出てこい。じゃないと後悔させるぞ？」

「わかったわよう。出てけばいいんでしょ。」

扉を開けて出てきたのは…：…確か放送部かなんかの人だな。名前は知らんけど。

「せっかくのゝ特ダネなのにく。」

手にはハンディタイプのカメラ。本当にたいした嗅覚だな。

「録るなら本人の許可を取ってからやるこったな。中身は没収する

からな。」

放送部の人は大人しくテープを俺に差し出した。

本来いた四人は俺をジーツと見てる。

「そんな珍しいもんを見る様な目で見んの止めてくれ。」

四人はサツと目を反らした。

「桂木さん。それがいつもの喋り方なのか。」

「ああ、そうだ。こんな口調のヤツが丁寧に話してっからゆるちゃんは笑ったんだろうな。」

さっきもそうだったけど思考停止したときの回復は水無月さんが一番早いな。

「じゃあ今までなんで喋り方を変えてたのさ？」

「そりゃ一応は代表って形で来てるからな。良く見せようって思うのが普通だろ？」

「確かにね…。」

水無月さんは納得したみたいだな。後の3人はっと…

「厄介ね。」

「そうですね。少々問題ですね。」

会計の人と会長が小声で話してる。バッチリ聞こえてるけどな。

「多分、悲鳴が上がるのは間違いですよ。」

甲野さん。悲鳴ってのはなんでだ？

「先日の撮影で桂木さんはどの程度映っていますか？」

「ん〜と、顔は映ってないよ。ただ後ろ〜から映ってるのとか〜髪が〜映ってるのはあるね〜。」

会長、会計の人、甲野さんはなんか悩んでるみたいだ。

「桂木さんほどの髪の生徒は…。」

「長さはともかく色で該当するのは0。」

「つまり見る人が見れば判るって事ですよね。」

なんだ？なんの話だ？全く意味がわからんぞ？

「桂木さん。他の生徒達に囲まれても構いませんか？」

「面倒な事はご免被りたいな。一応は平和な学園生活を目指してんで。」

3人はお互いにお互いの顔をみだした。

「普段からこの喋りで居られたら…。」

「無理。」

「そうなりますと…。」

3人はこそそと話し合いをしてる。

「ま、真。」

ん？誰だ？って考えるまでもないか。3人は話してるし放送部の人もちよこちよこ参加してんだし。

「ん？なんだ？ってよりあそこの会話に参加しないでいいのか？」

「ああ、私は頭脳担当じゃないから。」

アッハッハと笑う水無月さん。案外いい性格してるよな。

「なるほど。んで何の用だ？」

「ただ呼んだだけ。どんな反応するかなってさ。」

反応？何を言ってるんだ？呼ばれりゃ普通に反応するぞ？

「まあいいわ。あの話し合いは長引きそうだから。お茶でも飲む？」

「ああ。もらう。」

水無月さんは立ち上がり冷蔵庫からお茶を出した。…なんで冷蔵庫が普通にあるのかは聞いちゃ行けないんだろうな。

「はい。」

机の上にペットボトルのお茶が置かれる。

「サンキュ。水無月さん。」

水無月はボトルに口を付けて半分位一気にのんだ。飲み物のCM依頼が来そうなほど豪快な飲みっぷりだな。

「プハア…そう、それなんだけど。」

それ？それって一体どれなんだ？

「水無月さんってのがなんか気になるの。下で呼んでよ。」

下？名前ですって事か？水無月さんの下の名前。……………なんだっけ？

「悩んでるね。桜よ。水無月　桜。」

フムフム、水無月　桜か。ちゃんと覚えておこう。

「わかった。ありがとな、桜。」

お礼を言ってボトルを開けてお茶を飲む。

「そう、それでいいのよ。」

これでいいらしい。水無月…桜は俺に笑顔を向けてる。…初めて見たかも知れないな。

「なにそんなジーツと見てるのよ。」

「いや、笑ってる所初めて見たなって思ってる。」

「そりゃ自己紹介をする前に蹴り倒した相手だからね。」

そりゃそうだな。そうだったな…。挨拶も無しに蹴り倒してんだよな。

「その件はすまなかったな。」

「いいわよ。悪いのは真が来るってわかってながら私と幸が悪いんだから。」

「ゆき…? ……ああ会計の人か。」

俺はいまだ話し合い中の3人の内の1人を見た。

「そうよ。…あ、向こう終わったみたい。」

みな…、桜は空になったボトルをゴミ箱に投げて自分の席に座った。

「桂木さん、お待たせしました。」

「いや、別に構わないけど。」

3人…いや、放送部の人込みで4人か。俺の方を見てる。

「桂木さん。今後も可能な限り今まで通りに生活して頂けますか?」

「今まで通りってのは？」

「喋り方なんですけど。」

うーん…。まあ別に今日ここでバレなけりゃそれで生活するつもりだったから構わないけど…。

「なんか理由あんのか？」

「混乱防止。」

この会計の人：ずっと思ってたんだけど口数少ないよな…。

「ちゃんと説明しますね。この学校は女子校なので当然男性は居ないんですよ。」

ここで『実は少し前まで男でした〜』とか言ったら混乱するんだろうな。面白そうだな。いや、言わないけどな。

「そんな集団なので同姓を崇拝する人も居るんです。」

ああ、桜みたいな感じか。俺がチラッと見ると『何よ。』見たいな表情をしてる。

「桂木さんが考えてる通りです。桜さん見たいに囲まれるんです。」

あれは面倒な感じだよな。スッゲー声上がってたし…。

「桂木さんは今注目度も高いですし、見た目も抜群です。あの映像

の通り騒がれてる桜さんを倒してます。その上にあの口調ではなされる…。」

ああなるほど。言いたい事はよくわかった。ようはそういう事か。

「俺も崇拜の対象になるってことか。」

「そうです。しかも相当な。」

めんどくせ〜。非常にめんどくせ〜。

「そういった訳です。放送部にはかんこう令をひきます。」

そっちからもれる事は無いと…。

「確かに面倒な事は嫌いだからな。わかった。」

これは同意しない理由は無いしな。

俺がそう言うところ人はホッとため息をついた。別に普通に喋ってもそんな騒ぎになるとは思えないんだけど。

「クラスには私が居るし。我慢できなかったらくれればいいよ。」

確かに桜は後ろの席だし、話やすいな。

「そうだな。桜、その時は頼むな。」

「ええ、頼まれたわ。」

胸を叩く桜。なんか変に自信満々だ。何に対して自信を持ってるのか全くわからないけど…。

お誘い

う〜〜〜〜……腹減った〜〜。

結局昼休み潰れてし……。こりゃどっかで買い食いしないと寮の晩飯まで持たないな……。

ただここら辺に何かあるのかわからん。相談できるのは一人。でも流石に授業中に後ろ向く訳にもいかねえよな。寝てるヤツすら居ないんだし……。

こうなったらノートを切って……

『腹減った。どっか買い食い出来るとこねえか？』

よし、これを後ろのヤツに。よっと……。多分机に乗っただろう。

トントン……

後ろから紙が来た。早いな。

『私も同意見。今日の放課後は生徒会ないし一緒に行く？』

よっしゃ！話がわかるな！俺は後ろに向かって指で丸を作って見せた。

さて、後30分。なんとか耐えるか。

「じゃあみんな気をつけて帰ってね。」

姫ちゃんからの連絡事項も特に無くHRは直ぐに終わった。

「じゃー、ごっきげんよう。」

『ご機嫌よう。』

姬ちゃんの後にはほとんどの生徒が続く。俺はもちろん言っていない。
誰が言うもんか。

礼を終えると俺はグルンと後ろを向く。

「桜、行くぞ。」

俺は小声で言った。声を大きくすると周りに聞こえるからな。

「ん、ちょっと待って。」

何！待つのか？もうお腹と背中がこんにちはしそうなんだ。

「椿。今日これからなんか予定ある？」

つばき…？ああ、俺の隣のドリルお嬢様か！

「急になんですか？特にこれと言った予定はありませんけど。」

おう、放課後になってもお嬢様はナイスドリルだぜ！ありゃ絶対に刺さるな。

「これから真とお茶するんだけど一緒にどう？」

ドリルお嬢様も一緒にか？

「楽しそうですわね。私もご一緒致しますわ。」

そう言うのとドリルさんは携帯を取り出した。

「爺？迎えを遅らせて頂戴。ええ、こちらから連絡致します。」

爺だど？爺ってあれか？執事的な感じのあれなのか？

「なあ桜。爺って何者だ？」

「今、真が考えてるので間違っていないと思う。」

んじゃこのドリルはホントにお嬢様なんじゃないか？

「桜さん。それでどちらに行かれるのですか？」

「いつもの所でいいんじゃない？」

「そうですわね。」

いつもの所ってどこじゃーい！

「真。行くよ。」

二人は鞆を持ってスタスタ歩いて行く。

そんで廊下に出た瞬間耳を貫く悲鳴に包まれた。

ドドドドドッって効果音と共に囲まれる桜。いやいや、凄い人気ですこと。

「あっ。」

危なっ！桜の取り巻きの一人がドリルお嬢様にぶつかった。倒れそうになるお嬢様の腰に手を回して支える。

「大丈夫ですか？」

「あ、ええ、大丈夫ですわ。ありがとうございます。」

ドリルお嬢様は俺の肩に手を置いて態勢を治した。

「全く。これだけ人が多いと誰がぶつかったのかもわかりませんわね。」

うん。こりゃあきらかに通行の邪魔だ。廊下の横幅をほぼ埋めている。

「桜さん。下でお待ちしてますから早くいらしてくださいね。」

「なっ！椿！待って！」

声は聞こえど桜の顔は見えず。芸能人クラスの囲まれ方だな。

「では先に降りて待っていきましょう。10分程で桜も降りてくると
思いますますから。」

うーん。慣れていらっしやる。じゃなけりゃあの状況を10分とは
言えないだろう。

俺とドリルお嬢様は喧騒に背を向けて歩き出した。俺は後ろをチラ
ッと見た。

『ああはなりたくないな。』そう思った。桜がなんか言ってる気が
するけどその声は取り巻きの声に消されて途切れ途切れにしかきこ
えなかった。

という訳で俺とドリルお嬢様は校門の所で桜を待ってる。ただ俺と
ドリルお嬢様に会話は無い。それは何故かと言うと…

「椿様〜。」

「今日もお美しいです。」

「キャ〜〜〜!」

ってな感じになってるからだ。はい、ドリルお嬢様は校門から校舎
に続く道の途中で囲まれています。

ドリルお嬢様は慣れているのかかけられる言葉に丁寧な対応をして
る。

俺はそんな状況を見ながら校門の柱によりかかっている。

あのお嬢様も人気あるんだな。囲んでる人数は桜にひけを取らないくらいだ。

まあ慣れてる見たいにだし救助はいらないだろう。たとえ救助が必要でも俺の空腹度合いは限界に近い。

「ああ…腹減ったな…。」

そういえばこの学園に来てわかった事なんだけどこの宝華学園は人気の学校らしい。校門の外には同年代くらいの他校の男子生徒がスッゲーいる。

男子生徒達はどうやらナンパ目当てらしい。宝華学園の生徒と付き合うのは男にとっての最高のステータスらしい。そんな事を言うてるのを聞いた気がする。

今も校門の外を見れば花やらプレゼントやらを持った男達がわんさか居る。

因みに俺は声をかけられた事は今の所無い。ただ視線はスッゲー感じる。全く意味がわからん。

「お、相変わらず囲まれてるな。」

そんな事考えてたら隣から声がかかった。

「アレはいつもなのか？」

隣には取り巻きから解放された桜が立っていた。

「いつもね。椿はいいところのお嬢さんだからね。」

ふうん。なかなか大変なんだな。

「そういえば桜は外の連中に声かけられたりするのかな？」

俺はチラッと外を見ながら桜に尋ねた。

「ぼちぼちね。面倒でしょうがないけど。」

「中でも外でも大人気だな。」

笑いながら桜をからかう様にそう言った。

「冗談。外のは『宝華学園の生徒』ならだれでもいいのよ。」

：わからん。そんな考えになる理由が全然わからん。

「真だって声かけられるんじゃないの？」

「いや、見られてるのはわかんだけど声はかけられないな。」

桜は俺を上から下へとジロジロ見る。

「あゝ、なるほど。そうかもね…。」

ジロジロ見た結果何かに納得したらしい。

「何一人で納得してんだよ。」

「別に。ただ無自覚は怖いって思ってたのよ。」

：言いたい事がさっぱりわからない。なんなんだ一体…。

「あ、椿も来たね。」

あ、ホントだ。集団の視線を背中に浴びながらドリルお嬢様が歩いて来る。

「まったく。毎日毎日よく飽きないものですわ。」

若干お疲れ気味だ。それでもドリルは螺旋を描きながら鋭角に尖っている。

やっぱどう見ても刺さるよな。おおう…

「桂木さん。手を交に動かして如何なさいまして？」

如何なさいましてもなにもな…。これ言ってもいいのか？喋り方を気をつけるなら行動も注意しなきゃだよな…。でもな…。

「なんとなく今の真の考え私はわかる気がする。私は実行したけどね。」

同士が居た！しかも実行済みだと？

「一体なんのことですか？気になりますわ。」

うずうず…。うずうず…。ああ！気になったら止まらねえ！

「椿。あんたの髪にさわりたいんだと思う。特にその巻いてる所に。」

YES！その通りです！

「私の髪に？そうですね…。桂木さんが触らせてくれるならよろしいですよ。」

「好きなだけ。」

こんなん即答に決まってんだろ。俺の髪なん触られても困らないし！

恐る恐るドリルに触れる。……。や、柔らかええ！てっきり金属的な固さを持つてるとばかり思ってたぞ！

スッゲーふわふわだ。なんか触ってんの楽しいんだけど！

「では桂木さん。失礼致しますわ。」

ドリルお嬢様が俺の髪を触ってきた。

「…信じられない位サラサラですわ。なにかケアしてますの？」

「いえ、なにもしてませんけど。」

そもそも髪ってケアするものなのか？ってか俺の中でケアってたらしいレスラーしか思い浮かばないんだけど…。

「何、なにもしないでこの髪？ズルいな。」

ってなんか一人増えた！

「桜。何を…？」

「いいでしょ。減る物じゃないんだし。」

そりゃまあ…。減ったとしても触られて髪が数本減るくらいだと思うけどさ。

「でも同じ金髪でも真と椿で違うのね。」

「そうですわね。桂木さんの濃い目の金ですからね。」

俺のは金髪じゃなくて明るい茶色なの！誰も同意してくれないけどな。

「「キャ〜〜〜！」」

な、なんなんだ！いきなり！

声のした方を見るとたくさんの宝華の生徒がいた。なに？何事？

「そういえば校門だったの忘れてたわ。」

「私も迂濶にも忘れておりした。」

これはアレか？『憧れの桜とドリルお嬢様が！』的なアレか？

「椿、真。逃げるわよ。」

「ええ。」

はあ？逃げるっておい！ちよつとまっつて…ぎゃくくく！抜け
る！肩が抜ける！引っ張んなくて！

なんだか訳のわからん状況で俺は桜とドリルお嬢様に手を引かれ校
門から走り出した。

「ここまで…来れば…大丈夫…そうね…。」

「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ。」

「腕痛い…。」

軽く肩を回すけど…外れてないな。腕の骨も異常なさそうだ。桜は
えらい力で握るしドリルお嬢様はぶん回すし、…外れるかと思った
ぞ。

俺は息を整えてる桜と両手を膝に付いて肩で息をしてるドリルお嬢
様をみて自販機まで行ってお茶を2本とコーヒーを買って来る。

「よろしければどうぞ。」

コーヒーを口に運びながらお茶を二人に渡す。

桜はお茶を受け取ると中身を一気に飲んだ。そりゃもう凄い勢いで。
ボトルが『ベコッポコッ！』って音がしてた位だ。

一方ドリルお嬢様は俺達に背中を向けてお茶を飲んでる。うん、お嬢様っぽい。

一方の桜は…やっぱこいつをお嬢様って属するのはサギっぽいんじゃないか？

「そういえばどこのお店に行くんですか？」

俺はこころ辺はホントにわからないぞ。走った道は覚えててもどこに居るかはわからないからな。

「ああ、そこよ。」

桜の指差した先にあるのは落ち着いた店構えの所だ。…期待は出来そうだな。これで中がウフフアハハだったらドン引きするけどな。

「椿、大丈夫？」

「大丈夫です…。ただ早く…座りたいですわ。」

お嬢様はまだ息を整えるきれてないのか。

「そうね。じゃあ入りましょう。」

先導する。その後ろにドリルお嬢様。そんで俺と続いて中に入って行った。

内装も外観と同じく落ち着いた感じの感じだった。…よかった。キヤハハウフフな感じじゃなくて。

空いてる席に座ると店員さんがお冷やとメニューを持って来た。

三人でメニューを見て俺はカルボナーラとコーヒー。桜はホットケーキとアイスティー、ドリルお嬢様はホットティーを注文した。

「それで、桜。私もご一緒した理由をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

ん？このお嬢様は一体何を言ってるんだ？チラツと桜を見ると『あちや』見たいな顔してるけど…。

「やっぱ椿にはバレバレね。ねえ、お嬢様は約束を破る様な不義理な事をしないよね？」

流れが全くわからん。とりあえず桜がなんか話すのに俺は居てもいいのか？

「もちろんですわ。それとも桜には私が約束を破る様に見えますかと？」

「だよね。よかったよかった。なあ、真？」

って俺！？こいつは何を企んでやがるんだ？

「あら、桂木さんの事でしたの？私のはてっきり桜の思い人の事かと思っておりましたわ。」

「そ、それは今は関係無い！」

思い人？へえ：桜に好きな人いるんだ？

「桜のその思い人は私も気になります。」

「ま、真まで！こら、椿！そもそもあの人のはお互いに共闘って話でしょ！」

「ええ。ですから桜がこっそり抜け駆けしたのでは無いかとヒヤヒヤしましたわ。本当にあの方の件では無いのですね？」

「だから違うって！今回は真の件よ！」

詰め寄るお嬢様も中々怖いな……。これはこれでアレだけどそれ以上に桜だな。顔真っ赤にして慌ててるし。スゲーおもしれー。

「わかりました。桜を信じますわ。それで桂木さんの話とは？」

おお、そうだった。なんか俺の話だったんだ。桜はなんの話をする気なんだ？

「そうよ、真の話よ。実は椿にちょっと協力してほしいのよ。」

水を飲んで落ち着いた桜は前に乗り出しながらそう言った。

「協力：ですか？」

「そう。生徒会の一部しか知らない件なんだけど。」

ああ、なんとなく桜が何を言おうとしてるかわかった気がする。確かにお隣さんもなら楽になるな。

「私でお力になれるのでしたら…。ただ私に得はありまして？」

「椿、ちょっと耳を貸して。」

なんか二人で耳打ちをし出したぞ。

『……………鈍くて……………ないの。』

『まさか……………ごさいませんこと？』

『……………感じ……………よ。』

『……………ですわ。』

二人で話されると俺はあぶれるんだよな。…カルボナーラまだかなあ…。

『だから……………。』

『……………ようですわ。』

なんか二人共俺をチラチラ見てっけど…。うゝ、てもちぶたさだな…。

「桂木さん。」

「は、はい？」

なんだ秘密のお話は終わったのか？ちょっとビックリしたぞ。

「桂木さんのお話がなんなのか存じませんがお力になりますわ。」

「あ、ありがとうございます。」

なんか目をキラキラさせてスゲーヤル気だよ。桜は一体何を言ったんだ。

「それじゃあ真。生徒会で話したみたいをお願いね。」

つまりここからはこのお嬢様にたいしてもいつも通りでいいって事だよな。

「ああ。わかった。」

お嬢様は俺の返事を聞いて肩をピクツと動かした。

「今までは丁寧に喋って来たけどこれが俺の本来の話し方って事。」

ジーツと俺を見るお嬢様。すると突然サツと目を逸らした。

「こ、これは強烈ですわね…。」

ん？なんか言ったか？いまいち聞き取れ無かったけど。

「なんかね、一応は代表だからってお行儀よくしてたらしいのよ。」

「そうでしたか…。つまりはこの件を他の方に言わなければよろしいのかしら？」

「まあそうらしい。なんか周りが騒ぐからって言ってたけど。」

そりゃオホホホでハハ〜ンなお嬢様の中じゃ目立つんだろうけど…

「わかりました。誰にも口外しない事を約束しますわ。」

「わるいな。でも隣のアンタも協力してくれるなら心強い。成績も
いいみたいだから色々相談させてもらうよ。」

このお嬢様はその手の授業の時に頼りになりそうだな。礼儀作法と
かしっかりしてそうだし。

「なによ。授業だったら私にも聞きなさいよ。」

なんか横で桜から抗議の声が上がってんだけど…。

「いやいや、桜が礼儀作法とかちゃんと出来てるとは思えねえんだ
よ。」

「確かに桜はいつもギリギリですわね。」

笑いだす俺とドリルお嬢様。桜はなんか膨れてる。

「あ、桂木さん。桜だけ名前で呼んでるのはなんですので私も名前で
呼んで頂けます？私も名前でお呼びさせてもらいますので。」

名前！？このお嬢様の名前はなんてんだ？桜がさっきから呼んでた
とは思うけど全然覚えてねえぞ！ここは勝負所だ。俺！頑張っと思
い出せ！

「…ドリル？」

はい、思い出せませんでした。その結果ずっと思ってた名前が出ました。

「誰がドリルですこと！」

はい、すいません。当然そんな名前じゃないですよ。

因みに桜が横で爆笑してます。目に涙浮かべながら腹抱えています。

「しっかり覚えてくださいませ。椿ですわ。」

そうそう、椿。さっきから桜が呼んだのはそんなだった。

「じゃあ椿。よろしくな。」

「それでよろしいのです。改めてよろしく願いますわ、真。」

まあ、こんな感じで協力者がもう一人増えた訳だ。

補足ながら出てきた食い物は満足のできる味だった。

歓迎会【1】

只今、着せ替え人形の真っ最中！あれやこれやと色んな服を着たり脱いだり（着させられたり脱がされたり）で大忙しだ！

こら、責任者出てこ〜い！

「真、こちらもし合うと思いますわよ。」

こら、責任者！そんな楽しそうに服選びしてんじゃねえ！

なんでこんな事になったのか…それは昨日の話……

「真。日曜日は空いてまして？」

授業の合間の休み時間ドリル椿がそんな事を聞いてきた。

「日曜？別に予定はないな。ゴロゴロしてそこらを探索するくらいだし。」

さすがに周りに何かあるのか知っておきたい。誰かに聞こうにもかなりの確率で俺の趣味に合わない可能性がある。たとえば服とか。

「それならよかったですわ。実はアナタの歓迎会を行おうと思いついて。」

「そんな、いいよ。なんか悪いし。」

俺なんかに歓迎会なんて勿体無いしな。みんな予定もあるだろうし。

「残念ながら開催はもう決定なんですわ。数日前から準備してますから。」

はあ？それは随分大層だけど…

「それで俺に予定があつたらどうすんだ？」

「もちろん決行ですわ。」

即答しやがったぞ。俺の予定は関係なしか！

「今回はまあいい。次回からは事前に言ってくれ。」

「わかりましたわ。」

全く、お嬢様は意外と恐ろしいな。

「んで、どこでやるんだ？」

「ホールの使用許可をとりましたのでホールで行いますわ。9時にいらしてください。」

「はいよ。」

休みの日に学校に来るのか。授業じゃないとはいえあんまい気分

じゃないな。

「服は普通でいいんだろ？」

「そうですね。真は普通でいいですわよ。」

この時気付くべきだったのかな……。『真は』って言葉の意味に。そ
んでもってドリル椿と後ろの桜の黒い微笑みに……。

そして今日の8時半。少し早いけど俺はホールにやって来た。まあ、
なんか手伝う事もあるだろう。

ホールの扉を開けると……なんじゃこりゃ！ 広っ！ 高っ！ 凄っ！

なんかスッゲー飾り付けられてる。なんなんだこのハイソな貴婦人
がハハーンでエレガントな紳士とランラン♪みたいな内装は！ 馬鹿
じゃないのか！

俺はゆっくり扉を閉めた。

「俺は何も見なかった。うん、見なかった。そして誰にも見られて
ない。よし、帰ろう。」

俺は扉に背を向けて来た道を逆戻りする事にした。

しかし、その一步を踏み出す事ができなかった。

「ぐっ！」

背後から首に手を回されれば例え誰であろうと前には進めないだろう。

「真。どこに行くのよ。」

この声は桜か？は、離せ…。喉が…。

俺は喉に回された腕を軽く2回叩いた。言うまでもなくタップの合図だ。

桜はそれに気付き腕を離した。

「ケホッコホッ…不意打ちとは卑怯だぞ…。」

「そんなのは来ていきなり逃げ出すのが悪いのよ。」

一理ある…、いやいや、あんな見たら誰でも逃げ出すわ！

「とりあえずアンタはこれから控室に行くのよ。ほら、来なさい。」

ぐお！腕を引っ張るな！自分で歩けるから！つか痛い！そんなに強く握るな！

俺は桜に連れられてホールの中の控室へと連行…連れられていった。

控室には信じられない数の服があり、ドリル椿が待っていた。

そして今に至る……。

もうかれこれ1時間は着せ替え人形をやってる気がする。

周りにはドリルの家の方々が…。マジなメイドなんて初めて見た。いやゝ実在したんだな…。

「真。ちゃんと協力して頂きますと困りますわ。」

そんなんするか！あんな動きにくいヒラヒラした長い服なんかきれるか！

「疲れた…。」

服を着たりするのって意外と重労働だな…。結構疲労がたまってるぞ。

「それは真が暴れるからですわ。」

「全くだよ。抑える私の身にもなってほしいよ。」

そう、散々暴れてる俺を抑えてるのは桜withメイド隊。ってより主に桜。

「真。どんな服なら着て頂けますの？」

「男物の服。ダメなら妥協してズボンのヤツ。」

これはもう何回もやってるやりとり。ちなみに今着てるのは白いマードレス。なんかスッゲー足にまとわりついてきてイヤだ。そもそも白いのになんか溢したらシミになっちまうだろ！

「しょうがないですわね。これは出したく無かったのですけど。」

ドリルお嬢様は2着の服を取り出した。1つはドレス、色は黒。なんか背中が腰の辺りまで開いてて胸元もけっこう…。

もう1つの色も黒。ただしこっちはタキシード。なんだ、男物のあるんじゃないかよ。

「それとこちらを。」

ドリルお嬢様はなんかを俺に出してきた。なんだ？手紙か？

白い封筒には『真くんへ』…ってこの字は見覚えあるな。母さんの字だ。

俺は手紙の封を開けて中を読んだ。

『真くん。元気にしてる？真くんの事だからきつと元気にしてると思います。優ちゃんから真くんがパーティーに参加するって聞いて服を用意しました。真くん、ズボンを履きたい気持ちもわかるけどよかったらドレスも来てね。それでよかったら写真も欲しいな。じやあ体に気をつけて頑張ってね。』

光

さすがは母さん。わかってるな。なんか写真と違って文字が見えたけど…。まあ用意してくれたんだしそれくらいはいいか。

「手紙にはなんて書いてありましたの？」

「ん？中読んでなかったのか？」

手紙から視線を上げて目の前のドリルお嬢様を見る。

「心外ですわね。人様の手紙を無断で読むような真似は致しませんわ。」

確かに人の手紙を読むような人間には見えないな。

「それよりも椿。お前この歓迎会の事ゆーちゃんに言ったのか？」

椿は顎に手を当てて何か考えた後口を開いた。

「ゆーちゃんというのが誰だか存じませんが霞ヶ崎学園であなたを一番知っている方には言いましたわよ。」

「なんでだ？」

「食べられないものを出されたら嫌ではないですか？」

俺を馬鹿にしてもらっちゃあ困るな。俺に嫌いな食べ物はない！

…まあちよつと苦手なものはあるけどな。

「それより早く着替えませんかと時間ありませんわよ。」

そうそう、さっき聞いたら開始は11時らしい。つまり2時間くらい着せ替え人形にするきだったみたいだ。あり得ないよな…。

「そうだな、じゃあこつちを。」

俺はドリルお嬢様の持つてる服のうちの一着を取った。するとドリルお嬢様の表情が変わった。

「真？先程まで嫌がってましたのにいかがなさいましたの？」

ドリルお嬢様が驚くのも無理は無いと思う。俺が選んだのは黒いドレスだったんだから。

「こりゃスゲエな。大胆なのは上だけかとおもったら随分深くスリット入ってんじゃない。」

これを選んだ母さんは恐ろしいと思うな。スリットがあって細い感じのドレスだからこりゃ足見えるな。

前なら嵐ほどではないにしろチラツと見える足をいいなあとは思って見てたんだけど…。まさか自分で足をこんな風に晒す事になるとはな。

「椿。頼みがある。」

「は、はい。なんですか？」

「俺が着替えてる間にカメラ持ってきてくれ。母さんが見たいらしいからさ。」

「ええ、わかりましたわ。」

椿は持っていた服を近くの使用人^{メイドさん}に渡して部屋を出ていった。

さてと後はこのドレスに着替えるだけなんだけど…。

「桜。アンタは外で待っててくれないか？」

「なんで？私も真をいじりたいのに。」

アナタは自分に正直だね。そんなハッキリといじりたいっていうなよ。

「アンタを信用してない訳じゃないんだ。ただ信用がアンタに足りないだけだ。」

「ちょっと！どちらにしても意味は同じじゃないの！」

うん、そうです。同じなんです。

「メイドさん達。桜を外に出しちゃって！」

俺が桜をズビシッと指差しながらそう言うのと…

『かしこまりました。』

4人のメイドさんが桜に向かって突進して体を拘束して桜を引っ張っていく。

「待ってって！あんた達誰の使用人なのよ！離して！私も真をいじるんだから〜〜〜！」

ボタン…

ふうっ、これでやっと静かになったな。

さて、後はこの目を輝かせてるメイドさん達か…

スゝハゝスゝハゝ…

「よっしゃ！バッチこいや〜！」

瞬間でメイドさんに囲まれた。砂糖に群がる蟻か！無事に着替え終わる事を祈ろう…

歓迎会【2】

「いやゝ、しかし随分集まったもんだな。みんな暇人なんだな。」

ホールにある壇上の幕の間からホール内を見ると着飾ったたくさんのお嬢様とドリルの家のメイドさんと執事さん。

「それだけ真が注目されてるって事よ。」

同じ幕の間からホールを見てる桜。

「注目ってただ珍しいだけだろ？」

短期間の交換留学だからな。そりゃ珍しいだろう。

「はあ…。あんたって子は…。」

なんだその呆れた様なため息は！俺は事実を理解した上で話してるだろうが！

「本当に……。」

ぬおっ！ドリルお嬢様にまで馬鹿にされてる！ちつくしょう！鋭利な髪形しやがって！

「それよりもお二人とも、その行いは品がないですわよ。」

「以後気をつけまゝす。」

「俺はお嬢様じゃないんで。」

そうさ、俺はお嬢様じゃないからな。二人しか居ないなら品が無くたってかまうもんか。

「全く。さて、そろそろ挨拶の時間ですわよ二人共。いったん袖に下がってください。」

ああもうそんな時間か。それじゃあ引っ込むかな。桜を見ると無言で頷いた。俺達二人はこそそと袖に引っ込んで行った。

するとスルスルと幕が上がって行った。

『皆様、本日はお集まり頂きましてありがとうございます。』

ドリルお嬢様が自慢のドリルが地面に向かって発射すんじゃないか？って感じでお辞儀するとホール内から拍手がおこった。

『まず桂木さんの歓迎会に協力して頂いた生徒会の方からのお言葉を頂きたいと思います。』

「あ、私か。」

桜はもぐもぐとかんでいたものを飲み込みながらドリルお嬢様の方へ向かって行った。

：なんかツツコミ入れんのも面倒なんだけどアイツはいつの間に食い物を口に入れたんだ？

そんな裏で起きてる事なんて知らないホールのお嬢様方は桜の姿が

見えると…

「キャ～～～！」

「桜様～～～！」

「素敵～～～！」

ってな感じで騒ぎだす。今日も音響兵器は絶好調だな。ホールなんていう閉ざされた空間だからより一層声が響く。…うん、耳が痛い。

『今日は桂木さんの歓迎会って事で他の生徒会メンバーをおいて私が来たのよ。一応仲良くさせてもらってるし。』

とりあえずは真面目な感じだな。

『今日集まってもらってる人達が正装してるように真も正装してるわ。みんな、期待していいよ。』

さりげなくハードル上げてきやがったな。ただでさえ俺は桜やドリルとは違って騒がれてないってのによ。絶対に期待を裏切るぞ。

『って訳で椿。もう呼んでいいんでしょ？』

挨拶短っ！頼むからせめてハードルを下げてから登場させてくれ！

『それではご登場頂きますわ。どうぞ。』

ド～～～ルウ～～～！お前もサラッと言うな！マジでハードル高いんだって！

シーンとなるホール。何かに期待をするみたいだな。何に期待して

んのかはわかってます！俺が出てくんの待ってんだろ！

「真。早く出てきなさいって。」

うっさいわ！そんな状況で出れる程自信無いんじゃない！

そんなこんなでまごまごしていると桜が何やら口をパクパク動かしだした。違うな、ちっちゃい声でなんか言ってるんだな。

えっと…『こ』『ん』『しょ』『う』『な』『し』

……………『根性無し』だど？誰が根性無しじゃい！ああ行つたる！出て行つたるわい！

挑発だつてのは十二分にわかってんだけど根性無しって言われてそれを肯定する男は居ないんだよ！

ホントなら足跡を鳴らしながら行きたい所だけどまだ冷静な部分があったみたいで俺にできる限りおしとやかに舞台の上に（性格には桜の所に）向かった。

動作は可能な限りおしとやかに、目は桜をガン睨みしながら舞台の中央にやって来た。

『後で覚えてろ。』

声を小さく口の動きは大きく。俺は桜にそういった。桜は軽く肩をすくめる程度だった。

俺は一つ深呼吸をするとホールの方を向いた。ホールにいる方々は

シーンとしてる。

ほらっ！やっぱり駄目だったじゃねえか！みんな期待外れで黙っちやったよ！みんな静かに見てるし！

「真。一言お願いしますわ。」

この状態でか？会場内がめっちゃ冷めきってますけど！そんなに俺を虐めて楽しいか？

『あ、今日は私の為にこの様な会を開いて頂きまことにありがとうございます。』

ペコリとお辞儀する。やらないぞ？マイクにゴンッ！なんてボケはやらないからな。

会場内はスッゲー静か。うわゝ、帰ってえゝ。

『知らない方もいらっしやるかと思しますので自己紹介させていただきます。霞ヶ崎学園から参りました桂木 真と申します。2ヶ月間ですが皆様よろしくお願い致します。』

こんなもんかな。もう一回ペコリとお辞儀をしてマイクをドリルに返す。

『でわ皆様。お食事とお飲物を用意してますのでお召し上がりくださいませ。』

ドリルがそういうと幕が降りてきた。桜とドリルが礼してるから俺も一緒に頭を下げる。

やがて幕が完全に降りきると頭を上げた。そこで俺は桜の方を向く。

「桜。根性無しってのは随分な言い様じゃないか？」

「なによ。なかなか出てこないのが悪いんじゃないのよ。」

「あんなハードルを上げられて出られるか！現にみんな期待外れで黙っちまってたじゃねえか！」

桜とドリルは俺を見てそんでお互いの顔を見て………笑い出した。
なんで？

「あはははははは！」

「ふふふふふ！」

なんで笑ってんだよ！人の不幸がそんなに楽しいか！しまいにや落ち込むぞ！

「あははは。もうここまでくると凄いよ。」

「ふふふふ。本当ですわ。まさかここまでだとは思いませんでしたわ。」

ちくしょう。いじけてやる…。座り込んでの字書いちゃうぞ…。

「真、ごめんごめん。大丈夫よ。とりあえず下りよ。少しは食べた
いし。」

そうだ。食い物があつたんだ。ずっと着せ替え人形してたから腹減

ったぞ。

歩き出した桜、ドリルに続いて舞台から降りてホールに入った。

『桜様〜!』

『椿様〜!』

二人は速攻で囲まれた。俺は巻き込まれないように二人から離れて壁に寄りかかった。

「冷たっ。」

忘れてたぜ。背中パツクリ開いてんだった。しかしよくこんな布切れに近い服を皆着れるもんだ。

俺がそんな考えをしてるとさっき俺を着せ替え人形にしてた一人である椿の所のメイドさんがやってきた。

「桂木様。なにか飲まれますか?」

メイドさんの手にはトレイがあり数種類の飲み物があった。未成年だから乗ってるのはジュースとかなんだろうな。

「ではそのウーロン茶を頂けますか?」

そういうとメイドさんはトレイからウーロン茶を取り俺に渡した。

「桂木様。とてもお似合いですよ。この中で一番ですよ。」

流石だな。こういう所でさりげなくお世辞が言えるんだもんな。

「ありがとうございます。お世辞でも嬉しいです。」

こういう時は笑顔で返すべきだよな。俺はメイドさんにニツコリ微笑みかけた。

「い、いえ。お世辞ではなくて……。そ、その、失礼します。」

メイドさんはそそくさとどこかに行ってしまった。んゝゝなんか失敗したのかな？　こういう場所でのマナーはわからん。

まあいいや。失敗は次回の糧にすりゃいいしな。

俺は壁に寄りかかったままウーロン茶を飲んでホール内を見渡した。相変わらず二人は集団に囲まれている。

残りの人達は思い思いに会話をしながらチラチラと俺を見てる。なんだよ。言いたい事があるならハッキリと言ってくれよ。なんか気になる。

なんか食おうにもがつつり食ってる人はいないしな……。さて、どうしたもんなかな…。

「おゝい。」

二人もまだ向こうで囲まれたままだしな…。

「無視しないでよゝ。」

さっきのメイドさんも忙しそうだし。皆はチラチラ見るだけだしな
…。俺って嫌われてんかね？落ち込みそうだ。

「桂木さん！」

「っ！」

なんだ！敵襲か？敵襲なのか？よっしゃ、総員第1種戦闘準備！つ
て総員って誰だ！

それより誰だ！いきなり大声を上げたのは！

俺は左右を見渡す。お嬢様方が俺を見てるけど近くには誰も居ない。
マジで誰だ！

「こっち。こっちだよ。」

声のするのは下から。…下？俺は視線を下げる。あ、いた。

「あらあら迷子かな？お母さんとはぐれたの？」

うーん…。メイドさんか誰かの子供かな？流石に校内には託児所な
んかないだろうしな…。

「だから丁寧に失礼な事言わないでよ。」

ぷくぷくと頬つぺたを膨らませるこの子供。なんか見覚えがあるん
だけだな。

「お嬢ちゃんはこの子供かな？」

「私はあなたの担任よ。」

タンニン…？シミやソバカスのあれか？いや、そんな成分が人になって出て来られてもな…。たんにん…たんにん…。

「そうでした。姫ちゃん。今は飴とかは持ってないですよ？」

そうだ。文〇省の考え違いによって生まれたうちのクラスの担任だ。通りで見覚えがあると思った。

「そうじゃなくて。桂木さんの知り合いって人が来てるの。」

俺の知り合い？はて…？こっちに来て知り合いはまだそんなに居ないんだけど誰だ？

「その人は今どちらにいらっしゃいますか？」

「ホールの入り口。行くなら私も行くよ。」

行くならって知り合いってのを放って置けないよな。

「では行きましょうか。」

俺は姫ちゃんの手を握ってホールの入口に向かった。…姫ちゃん、そんな手をブンブン振るの止めてくれ…。犬の尻尾じゃないんだから。皆こつちをガン見してるんだからさ。

ホールから廊下を通って玄關的な場所に出るまずは太陽の眩しさが目に染みた。中が薄暗かったせいかな？ 姫ちゃんは俺から手を離してパタパタと先に走って行って……コケた。

それも木陰で座っていた人達の前で。

おかしい……。別に転ぶような段差はないのは俺も見ただけだな。

俺が転んだ姫ちゃんを見てると姫ちゃんは自力で起き上がった。

偉い偉い。泣かないで自分で立つなんて。後でチョコでもあげよう。

そんな考えをしながら立ち上がった姫ちゃんの所に行く。

「姫ちゃん。大丈夫？」

「痛い……」

あらら……。泣いちゃいけないけどもうちょいで泣くな。目がメツチャうるんでるし。

「急に走ったりするからですよ。」

姫ちゃんの前にしゃがみ頭を撫でながら目元をハンカチで拭いてやる。

って姫ちゃん！ 涙を拭くのは構わんが鼻をかむんじゃない！ マジで！

「すっきりした。」

くそ！満面の笑顔だぞ。俺はこのハンカチをどうしたらいいんだ？

「姫ちゃん。それで私の知り合いの方は。」

処理に困ったハンカチを姫ちゃんに渡しながらそう尋ねた。

「この人達よ。」

姫ちゃんが指差したのはすぐ近くで一部始終を見ていた方々。

「知ってる人？」

はい、知ってる人達ですよ。それは十二分に。ただこの人達と話すにはある問題があるな。

「姫ちゃん。水無月さんと崎島さんに私がここに居る事を伝えてもらえますか？すぐに私も戻りますので。」

姫ちゃんが居ると面倒なんだよな。色々な事で。

「いいよ。」

姫ちゃんは快く快諾してくれた。なんか子供にお使いを頼む気分だな。

姫ちゃんはクルリと背を向けるとパタパタて走って転ばずにホールの中に戻って行った。

俺は姬ちゃんが無事に中に入ったのを確認すると待っている人達をみた。そこに居るのは3人。

茶色いロングヘアーの人。この人は座り込んで木に寄りかかっている。

黒い肩くらいまでの長さの髪の人。この人は俺の顔を凝視してる。そんなに見ても穴は開かないからな。

黒いロングヘアーの人。この人は校内の様子を見ている。

3人共俺の見知った人だった。ただなんでここに居るのがサッパリわからん。

「で、お三方。一体何の様なんだ？」

三人の視線が俺に集中した。

歓迎会【3】

3人からの視線が痛い…。3人共視線が同じ事を物語っている。

『あなたは誰ですか？』

呼んで置いてそれはないんじゃないかな？

「呼ばれたから来たんだけどさ。」

3人は俺の顔を見たまま固まった。そして同時に口を開いた。

「真？」

「まこっちゃん？」

「真さん？」

なんで3人はこんなに驚いてんだ？

「そうだ。姫ちゃんに俺を呼ぶように言ったんだろ？」

まあおかげであの居づらい空間から逃げたんだけどな。

「それで俺が誰だか3人が理解した所でもう一回聞くんけど何をしましたんだ？ ゆーちゃん、巴、麗さん。」

そう、目の前にいる3人は霞ヶ崎学園での担任であり我が姉のゆーちゃんとガキの頃からの付き合いの巴。そして霞ヶ崎学園の生徒会長の麗さんだ。

「いやゝ真。化けたわね。」

「うん。まこっちゃんだってわからなかった。」

「それにそのドレスもとてもお似合いですよ。」

3人が各々の感想を同タイミングで述べる。ええゝい！俺は聖徳太子じゃ無いんだ！一気に言われても聞き取れないぞ！

「まずは質問に答えてくれ。ここに來た理由はなんだ？」

そんな質問をするとうゝちゃんが鞆から封筒を3つ出した。

「この生徒会長から招待状をもらったのよ。よろしければって3枚ね。」

招待状？それじゃ立派なお客様なんじゃないか。

「私はついでに母さんに頼まれた写真を撮りにきたのよ。」

「私はこちらの生徒会長とお話をしに参りました。」

「私はまこっちゃんが心配で…。」

ふむふむ…3人ともなんらかの理由もあってなんだな。

「しかしよく嵐が來たがらなかったな。」

女子校内に入る絶好のチャンスだったのに珍しいもんだ。

「……………」

な、なんだ！巴と麗さんが俺から目を逸らしたぞ！そしてゆーちゃん
んがメツチャ笑ってる！

「嵐くんは行きたいなんて『言わなかった』わよ。」

その笑顔がすごい怖いです。嵐になんかあったのか？

「あ、嵐は…。」

「最後まで勇敢でした…。」

嵐……！星になったのか……！空を見上げると星になった嵐が……
……あ、太陽しか見えないや。まあ来たとしても殴って追い出す
けどな。あんなのが来たら恥だしな。

「んで嵐は捨てて置いて構わないけど、3人共中に入るのか？」

親指を立ててクイクイツと後ろを指差す。後ろには歓迎会を絶賛開
催中のホール。

「入るけどあんたみたいな服じゃないとダメなの。」

「どうやら面倒な事にそうらしい。あとゆーちゃん、普通に煙草を
くわえないでくれ。当然の様に禁煙だ。」

禁煙にしているのは俺じゃないんだ。『チッ』とか舌打ちしながら睨
まないでくれ。マジで怖いから。

「私達そんな服持ってないよ。」

そりゃそうだろうな。普通に生活してる分にはこんな布みたいなのは必要ないからな。

「中にヤバイ量あったから大丈夫だと思う。一応確認してみるけど。」

携帯をポーチから取り出して電話をかける。さて、まだ囲まれてるか？だとしたらまた面倒なんだけど。

そんな心配は杞憂だったみたいだ。4回目のコールで相手は電話にでた。

『もしもし、真。今どちらにいらっしゃいますの？』

「外だけど？」

なんかちょびつと怒ってないか？おっかしいな。

『あなた。今日の立場わかってまして？あなたは主役なのでしてよ。』

「悪い悪い。ただ、ほら。俺に客が来たからさ。姬ちゃんから聞いてないのか？」

『姫宮先生でしたらケーキを大量に抱えて幸せそうに食べてますわ。』

な、なんてこった…。伝言を伝えずにケーキの誘惑に負けたか…。

『とりあえずいまからそちらに行きますわ。』

「わかった。出てすぐの樹の所にいるから。」

ピッ：

携帯を切りしめようと俺は大きく息をついた。…姫ちゃん…、予想以上だぜ…。

「ま、まこっちゃん？どうしたの？」

そんな俺を見てか巴が心配そうに俺に声をかけてきた。

「いや…、まさか伝言をミスとは思わなくてな。」

「そりゃ誰かの付き添いで来た子供に頼むからでしょ？あんな子供が真を連れてきただけで上出来なのよ。」

ゆーちゃん…、言いたい事はよくわかる。だけど一つ間違ってるんだ。

「ゆーちゃん、あのチビッコはここでの俺の担任だ。」

3人は静かになり俺をジーツと見てくる。…あんたらの気持ちちはよくわかる。

「それはビツクリかなにか？さすがにあんなわかりやすいのには引っ掛からないから。」

ハハハハ…って笑ってるゆーちゃん。アンタの反応は俺と全く俺と一緒にだ。

「ビックリでもなんでもないらしい。遺憾ながらホントに教師らしいんだ。」

「ち、ちよっと！あんなの経歴詐称でしょ！文〇省はなにを考えてんのよ！」

ああ…やっぱり俺とこの人は血が繋がってんだな。リアクションがホントに同じだ。

「〇部省の考えなんか知るか！俺の話で信用出来ないなら今からくるヤツにも聞いてみりゃいいだろ。同じクラスのヤツだから。」

「そうね。そうさせてもらうわ。」

これで矛先は今からくるドリルお嬢様に向いたな。後は頼んだぞ。

歓迎会【4】

今、控室は大混乱につつまれている。混乱の原因は来客の3人。そしてその周りにいるたくさんのメイドさん。

そんな中居る意味のわからない人物が1名。…まあ俺なんだけど。

「真〴〵。壁なんか見てないでこっち見たら〴〵。」

「まこっちゃんダメだよ!」

「真くん。もう少し待っていて下さい。」

壁を見てる理由は至極簡単で着替えてるからなんだけどな。さすがに見れないよな…。

そんな訳で俺は壁をジーツと眺めてる。ハッキリ言って退屈だ。話相手でもいれば別なんだけどドリルは会場に戻ったし、桜はこっちに顔を出してもいない。多分まだ囲まれてんだろう。それでメイドさん達は忙しそうで話かけられない。つまりはどうしようも無いって事だ。

さっき暇すぎて

「先に行ってる。」

って声をかけたら

「待ってなきゃ殴る。そんで蹴る。」

っていうありがたいお言葉を頂いてしまっただけで逃げられない。うゝ…
暇だゝ。

「あ、桂木さん？」

ん？みんな忙しいのかと思ったら声をかける人が。丁度いいや。この人と話しよう。

「はい？」

俺は声のした方、後ろを向いた。

「「キャーーーーー！」」

や、やべっ！着替えてたんだっただけ！こいつはうっかりだ！

俺は速攻で元の姿勢に戻る。

「真、見損なったわ。」

ゆーちゃんまで！からかいとは言え散々俺にこっち見ろって言った癖に！

「あ…、ごめんなさい。」

声をかけた人は謝りながら後ろから横に移動してきた。

「いえ…、下がるんで前に来てもらえますか？」

現在、俺と壁の間に人が入れる隙間はない。俺は自分で言った通り3歩程下がりスペースを作る。そうしたらお願いした通り俺と壁の間にメイドさんが入ってきた。…あれ？この人って…

「さっきホールであつたよな？」

「はい。よくおわかりになりましたね。」

そりゃあのホールの中で俺に声をかけた数少ない人だからな。後の人は声かけてくれなかったし…。

「みんな俺を見てるだけで声をかけてくれなかったから。」

アレは意外と傷付いたな。おそらく「たいした事ないヤツ。」とか「桜とドリルに近付き過ぎ。」とか言われてんだろうけどな。そういう事はコソコソ言わないでハッキリ言ってもらいたいもんだな。

「それは話かけられなかったんだと思いますけど…。」

「ん？なんか言ったか？」

なんかモゴモゴと言ってたけど聞き取れなかった。

「いえ、なんでもありません。それより桂木さんも着替えませんか？」

そう言うメイドさんの手には一着の服。おお、そうだ。そういえばもう一着あるんだった。

「そうだな。あっちの3人もまだ時間かかりそうだし俺も着替える

かな。」

メイドさんから服を受け取りながら俺はそう言った。さて…着替えるにあたり問題があるんだけど…

「もしよかったら着替えるの手伝ってもらえますか？この服どう脱いだらいいか全然わからないので…。」

これはしょうがないと思う。着た時はメイドさん達が着せたからな。しかも俺はいままでこんな服着たことないし。

「ええ。構いませんよ。」

メイドさんは俺がそう言うってわかってたんだろう。軽く笑いながらあっさり了承してくれた。

「私達がこの服に合うような姿にしてあげますから。」

いつの間にかメイドさんが増えてる。しかもみんな笑顔だ。その笑顔が若干怖い…。無事にいられるよな…。

「お、お手柔らかに…。」

「妥協はしませんよ。」

ヤル気十分だ。多分凄い事になるだろう。…着替えるなんていわなけりゃよかったのかな…。

メイドさんは俺の手をガシツと掴んだ。よ、予想以上に力強いぞ。って痛い痛い…。逃げないからそんな強く掴まないで…。

歓迎会【5】（前書き）

皆様の率直なご意見お待ちしております

歓迎会【5】

着替えた俺はホールに向かっている。着替えに関しては凄かったとか言えない。簡単に説明するとある部分を圧縮してある部分を水増しした。

ホールの前まで来ると御三方が居た。どうやら俺を待ってくれたらしい。俺は3人の所まで行って声をかけた。

「ゆーちゃん、随分化けたな。見た目だけならカッコイイ大人だな。」

「麗さんはやっぱり似合いますね。落ち着いた雰囲気だし。」

「巴も綺麗だな。見違えたぞ。」

こういう時は思ったまま誉めるのがいいんだよな。なんか3人して固まってるけど。

「なんだ真か。折角いい男が来たと思ったのに。」

「俺で悪かったな。それと待ってもらって悪かったな。」

3人の間を抜けて扉の前に行く。巴と麗さんは固まったまま俺を見てる。なんだ？どっか変か？

「巴、麗さん。中に入るけど大丈夫か？」

俺が声をかけると二人は正気に戻ってみたいで返事を返してきた。

「うっしや、じゃあ行くぞ。」

俺は扉を開けて中に入った。それで扉を抑えて3人を中に招き入れる。3人が入ったのを確認すると扉を閉めて前を向いた。

俺達が入ると話をしていたお嬢様方がこっちを見た。そしてそのまま固まった。それは徐々に広がって行きやがてホール内全体に広がった。

ざわついていたホールが沈黙に包まれる。

なんだ？やっぱ俺の格好がなんか変なのか？そうならハッキリと言って貰いたいもんだ。

「ゆうちゃん。とりあえず挨拶からでいいんだろ？」

ゆうちゃんに確認を取るとゆうちゃんは肯定の返事をした。俺はそれを確認すると人が異常に集まってる所に向かって歩き出した。

「わおっ。」

俺は思わず感嘆の声をあげて短く口笛を吹いた。これは嫌われてんのか？俺が進もうとしてる所にいた人達が左右に動いて道が開けるんだけどさ。

「なんだっけ、モーゼの樹海だっけ？」

「真、それを言うなら十階よ。樹海じゃ迷うだけでしょ。」

「お二人とも違います。十戒です。」

おう！樹海じゃなかったんか！そしてゆうちゃん、自信ありげに言いながら違ってるし！

それで十戒の海みたいにな人がわかれて行くから楽に歩ける。その効果は目的地の所にいた集団にもあったみたいで人垣が割れた。その先には相も変わらずキューーーンって音がしそうな位のドリルを付けたお嬢様の椿と大量の料理を抱えてる桜がいた。あゝ、そういえば少し腹減ったな。

「崎島さんと、そちらは水無月さんですね。本日はお招き頂きありがとうございます。」

ドレスの裾を軽く摘まんでご挨拶をするゆうちゃん……って、なに！ゆうちゃんが礼儀正しく挨拶してる！

巴と麗さんもゆうちゃんと同じ様に礼をする。麗さんは慣れた感じだけど巴はやっぱりぎこちないな。

「何よ。」

「い、いや。そんな挨拶が出来るとは思わなかったから。」

「…怒らないから正直に言いなさい。アンタは私をどういう風に思ってるの?」

「…暴君…行ってえ!」

いやいや！怒らないって言ったじゃないか！そんな先の尖ったヒ-

ルでさりげなく踏むな！そしてジワジワと体重をかけるな！足が貫通する！穴が空くから！

（巴！ヘルプ！ピンチだ！）

こういう時は奥義のアイコンタクトを！

（ムリムリ！私にはどうしようもないから！）

（そこをなんとかか！マジで穴が空く！なんとかゆーちゃんの気を逸らしてくれ！）

（やるだけやってみるけど…。）

よし、頼んだぞ巴。ゆーちゃんにピンヒールは凶器以外のなにものでもないから！

「ゆ、優さん。この人達は誰なんですか？」

巴が桜と椿を見ながらゆーちゃんに尋ねた。その姿は俺にはボヤけて見える。…涙出てきた。

「こちらの方達は真の歓迎会の主催者の崎島さんと生徒会の副会長の水無月さんよ。」

ゆーちゃんは巴の方を向く様に態勢を変えた。足の位置も動かしたから俺の足はなんとか穴が空かずにすんだ。ただ最後におもいつきり体重かけて回転したけど…。悲鳴を上げなかった俺を誉めてやりたいぜ。

「そうだったんですか。あ、私は天城 巴です。まこっちゃんの友達かな？」

「ご挨拶が遅くなりました。私は霞ヶ崎学園の生徒会長の八神 麗と申します。」

巴に続いて麗さんも二人に挨拶をする。うん、やっぱり挨拶は大事だよな。

「ご丁寧にありがとうございますわ。私は崎島 椿と申します。」

「モゴモゴ…。んっ…。…私は水無月 桜。よろしくね。」

桜。口に物を入れたまま喋らなかったのは立派だけどとりあえず皿は置いてくれないか。

「私は桂木 優です。真の姉で霞ヶ崎学園の教師です。」

ゆうちゃんはそこで一端切って一息付いてからさらに言葉を続けた。

「今日はうちの『愚弟』の為にホントにありがとうございます。」

誰が愚弟だ！そりゃちよつとヒドイんじゃないかい？

「優さん！」

「桂木先生！」

ほら、二人も言い過ぎだって怒ってくれてるじゃないか。

「「ぐてい?。」」

ほら、二人もそんな事無いって聞き返してるじゃないか。ゆうちゃん、いくらなんでも愚弟は言い過ぎなんだよ。愚弟…って、おい！弟なんて言ったらダメだろ！こっちの学校じゃ誰にも言っていないだから！

「あ、ゴメンね。ついいつもの流れで言っちゃった。」

いやいやいや！そんなテヘツみたいなノリで謝らないでくれ！マズイだろ！

「愚弟って言うのは真ってあんな性格だから男みたいでしょ？だからそう言ってるの。」

よっしゃ！ゆうちゃん、いいフォローだ！ただ目が若干泳いでたのを俺は見逃してないからな！

「確かに真ってそんな性格してる。」

「ええ。男性的な感じですよ。」

おっ。二人も納得してくれたみたいだ。全くスゲーヒヤヒヤしたぜ。とんだ爆弾投入しやがるな。

「そういえばその真はどこにいるの？」

桜が巴の方を見て聞いてきた。なんとなく巴に聞いた理由がわかるな。おそらく気を使って喋るのが面倒になったんだろう。ゆうちゃんと麗さんは年上だからな。

「それ以上に私は男性が来るとは聞いてませんわ。」

椿が呟いた。…こいつはドリル以外の器官は飾りなのか？このどこに男がいるんだ？

俺は周りを見るけど目に入るのは着飾ったお嬢様ばかりだ。まあ一部お嬢様じゃない人もいるけど。…誰とは言いません。命が惜しいから。

「何キヨロキヨロしてまして。アナタの事でしてよ。」

ビシッとドリルで…間違えた。指でさした先に居るのは…俺！？軽く左右に動いても指先は俺の鼻先から動かない。

怒りをうつすら浮かべた椿に指差された俺。何故か桜も指差してる。そんな俺の取った行動は…

「……………ッ。」

顔を伏せて肩を震わせていた。や、ヤバい。非常にヤバい。

「泣いてもわかりませんわ。アナタは何故ここにいらっしゃいますの？」

「そうよ。ここは男は入っちゃいけないのよ。」

もう無理。耐えきれない。限界だ。

俺は片手を前に出して二人に待ったをかける。もう片方は腹を抱える。それで顔を少し上げてゆーちゃんを見る。

（ゆーちゃん…。もうムリ…。後頼む。）

ゆーちゃんもうっすら涙を浮かべた目で俺を見る。

（私も無理。ヤバいわ。こらえきれない…。）

こんな所でも血が繋がってるのが実感できるな。同じ状況に陥るとは思わなかった。

ちょっとは耐えれたがそれももう限界だった。ゆーちゃんも同時に限界を向かえてダムが決壊するかのごとくその感情は溢れ出した。

「「アーツハツハツハツハツハツ！」」

俺とゆーちゃん、爆笑。は、腹が痛え…。涙が出てきた。

ゆーちゃんも腹を抱えて声も高々に笑ってる。それを見て桜と椿は呆然としてる。まあ急に笑い出したんだから無理もないだろう。

巴と麗さんも俺達につられるように笑っている。もちろんゆーちゃんみたいに大声ではないけど。やっぱり二人も今のは面白かったみたいだ。

「み、皆さん如何なさいましたの？」

「なんで急に笑いだしてるのさ？」

その二人の反応が俺達のツボを更に刺激する。ヤバいつて！腹筋がちぎれる！

「二人…共…。本気で…言ってる…の？」

ゆうちゃん、息を切れさせてます。どうやらゆうちゃんの腹筋もピンチみたいだな。

二人は状況を全く理解出来てないからただ首を上下にカクカク動かしてる。

「「ハハハハハッ。」」

笑い声が一人分追加された。この声は巴だな。どうやら限界を超えたみたいだ。結構頑張ってたけどな。一方の麗さんはまだ堪えてる。背中向けてるからわかりにくいけど肩っていうか上半身がプルプル震えてる。それにプラスして耳が超赤い。

「ほ、ほら。怪しげなの…。…名乗り…なさ…いよ…。」

周りからの注目の視線を浴びてる俺達。そりゃこれだけ爆笑してりゃそうなるか。

「わ、わかった…。ちょっと…待って…。」

まず息を整えないとまともに喋れねえ…。スーハースーハ….:…よしっ！

「桂木 真です。つい最近に霞ヶ崎学園から宝華学園に来ました。」

『えーーーーっ！』

二人が同時に：いや、周りに居た人達も同時に叫びだした。

『アハハハハハッ！』

俺達はその叫び声を聞いて再び笑いだす。どうやら麗さんも耐えきれなかったみたいだ。俺達4人は腹を抱えて笑ってる。これが部屋だったら転げ回ってるな。

ホール内には笑い声が響いている。他の人達は俺を見ながら呆然としてる。

因みに笑いは10分位の間響き渡った。

明日は笑い過ぎで腹筋が筋肉痛になるのは確実だ。まあ切れなかっただけまだ良しとしよう。

歓迎会【6】

「真、シメになんかやってよ。」

唐突に桜にそう言われて俺は目を点にする。あやうく持ってた皿を落とすところだったじゃないか。

「お前は一体何を言い出すんだ？」

「いやゝ、椿に聞いたら後はこのまま普通に終わるっていうからさ。それじゃつまらないでしょ？」

まあそれは確かにつまらないかも知れないな。だけどそこでなんで俺なんだ？

「まこっちゃん。お返しは大事だと思うよ。」

お返し？ ああ、わざわざ歓迎会開いてもらってるもんな。そう意味なら俺に声がかかる理由も納得だ。

「やるのはいいとして何をしたらいいんだ？」

俺はこんな時に披露できるような芸は無いぞ。

「なんでもいいんですわよ。軽く歌をうたうとかでも。」

「「歌？」」

椿の言葉に反応したのはゆーちゃんと巴。なんで？

「そういえば、真。あれ以降歌ったりした？」

あれ以降ってのは変わってからって事だよな。そういえばなんだかんだカラオケも行っていないな。

「歌っていないな。音楽の授業も選択していないし。こっちでもそんな授業なかったしな。」

そもそも歌うの自体あんま好きじゃないからな。

「ほほう…。」

ゆうちゃんと巴がお互いの顔を見た後に俺を見てニヤニヤしてる。なんだかスッゲー気になるんだけど。

「じゃあ歌ってきなさいよ。ちゃんと真剣にね。」

そりやお礼なんだから真剣に歌うけどよ…。知ってるか？俺って音楽の成績悪いんだぜ？1年の時に必修でやった時なんて10段階で3なんだからな。そんな俺の歌なんか相当ヤバいぜ。

「まあいいや。それで音はあんのか？アカペラなんかだったら嫌なんだけど。」

「演奏するならピアノがありますわよ。曲を流すのでしたら音響室から流せますわ。」

ピアノなんか俺は弾けないぞ。そりやお嬢様連中はガキの頃に習い事とかしてんだらうけど俺は遊びに夢中だったからな。

「ピアノは無し。音響室でなんか探す。んで音響室ってどこだ？」

「舞台の袖から階段を上がった所よ。」

「サンキュー。じゃあ曲を見て来るわ。」

手をヒラヒラ〜と振りながら桜に札をいい音響室を目指す。さあて、どんなのがあるんだろうな〜。

これであるのが讚美歌だけだったらどうすっかな〜。

――・――・――・――

「まこっちゃんの歌聞くの久しぶりだな〜。」

「これは気合い入れないと。」

私の前で真のお姉さんと友達の天城さんがなんだか気合いを入れてる。

「ねえ、真って音楽の成績ヤバイの？」

そんな気合いを入れてる天城さんに私は聞いて見た。

「うん。確かに成績はヤバかった気がする。」

へえ。なんかあの子ってなんでもこなしてそうだから意外ね。

「そうよ。担任の私が保証するわ。真は確か3だったわよ。他の成績も知りたければ教えるわよ。」

：酔ってるのかな？ワイン4本飲んでるし。じゃなかったらこんなペラペラ言わないよね。個人情報に関しては厳しいはずだし。

それにしても真って音楽の成績良くないんだ。あの子ってなんでもこなしそうな気がするから意外だったわ。

「そういえば、真は模試で凄い成績を取ったと聞きましたわ。本当ですか？」

あ、それなら私も知ってる。霞ヶ崎学園から届いた資料に書いてあった。確か1位だったね。

「あの時は珍しく真が真面目に勉強してたわね。クラスも成績いい子が多かったし。私の評価もグンッと上がったのよ。」

この人はこれが素なのかな？…いやいや、酔っ払ってるだけよね。そう言う事にしておこう。

「珍しくって優さん…。あの時は『アンタ達。後悔したくなかったら前回よりも上になりなさい。』って言ったんじゃないですか。」

き、脅迫したの！？この人教師だよね？

「そういえばそんな事言ったかもね。」

しかも認めたよ！な、なんなんだろう。普通の学校の教師ってみんなこうなの？

「か、会長さん。霞ヶ崎学園ってどんな所なんですか？」

少し話した感じこの会長さんは真面目そうな人ね。この人に聞いた方がちゃんとした事が聞けそうね。

「そうですね…。面白い所ですよ。」

抽象的過ぎ！全く内容が解らないよ！

「そうそう、面白いわよ。体育祭で何回も爆発があったりとか…。」

ば、爆発っ？学校行事で爆発って一体どういう事なの？

「ず、随分と面白い所ですわね。」

椿。これは面白いで済むもんじゃないんだけど…。確かに面白そうではあるけど。

ピーーガー

『あつ、あ、入ってる。』

突然ホールに聞こえた機械的な音と真の声。どうやら準備できたみたいね。

『あ、皆さん。本日は私の為にこのような会を開いて頂きありがとうございます。』

舞台の方を見るとあきらかに男性にしか見えない真がマイクを持っていた。

『私からなにかお返しをしたいと思いますのですが何も出来ない若輩ものです…。それで簡単なながら歌をうたわせて頂きます。』

パチパチパチパチパチパチパチ。

ホールからの拍手に真はペコリと頭を下げる。

『それでは聞いて下さい。』

真はリモコンのスイッチを押した。するとスピーカーから音楽が流れてきた。

「持っていると危ないわよ。」

真のお姉さんがそんな事をボソツと言った。危ない?…よく理解出来ないんだけど。でも真のお姉さんと天城さんは持っていた飲み物をテーブルに置いてた。

「優さん。まこっちゃん本気ですよ。」

「そうね。これ歌おうっていうんだもんね。」

流れ出した曲は私も知ってた。『HIKARI』って歌手の『星』って歌。この歌手はマスコミ、テレビに一切顔を出さない変わった

歌手。でもその歌は凄い。それで難しい。

『煌めくゝ幾千の輝きゝ♪』

真はそんな歌をマイク無しで歌い出した。…って、メッチャ上手いんだけど！声量も凄くて多分ホールの端まで十分届いてる。これで成績が3なの？

『願いを込めてゝ星空を見上げてゝ貴方に届くようにゝ♪』

サビに入って真の声量が更に上がった。そんな真をジッと見てると頬に何か流れた。…うわぁ、涙出てきた。

それ以上に実際に星空が見えて来た様な気がする…。

周りからは微かにカシャンとかカランとか聞こえる。多分持ってたグラスとか落としたんだと思う。

私も落としてるし…。

『届けゝ私の思い…。貴方へゝゝゝ♪』

な、涙が止まらないんだけど…。ちよっと尋常じゃ無いって…。

曲が終わり真はペコリとお辞儀をして舞台から降りて行った。

そんな真に拍手は送られなかった。皆涙流しちゃってそれどころじゃないからだと思う。

曲が終わって静かになったホール。聞こえるのは皆の小さな泣き声。

周りのほとんどがハンカチで目元を抑えてる。唯一無事そうなのは…。

「やっぱり久々に聞くとヤバいわね。迂濶にも上がって来たわ。」

「私もです。この建物自体が音が響くせいかも知れないですね。」

いや、確かにそういう作りだけど…。それはあくまでもスピーカーを使うのを前提だから。あの子は地声だからね。

「いやゝ、お情けの拍手も無いってのはさすがに落ち込むな。」

周りの人達を見ながら真が戻って来た。いやいや、これは感動のあまり拍手すら出来ないって状況なのよ？

「しかも皆泣いてるしよ…。毎回そうだけど俺の歌ってそんなに酷いのか？」

だから！泣いてるのはアンタがあんな歌をあんな風に歌うからなの！

色々とツツコムべき所はたくさんあるんだけど、今口を開くのは非常に危険なのよ。

大泣きしたいのを堪えるのに精一杯だから…

記念

「ねえねえ、真。聞きたい事があるんだけど。」

歓迎会から一週間ちよつとたったある日の昼休み。桜、椿、俺の3人で昼飯を食ってる時、桜がいきなり口を開いた。

「俺に聞きたい事？なんなんだよ？」

俺は周りに聞こえない位の声で返事を返した。歓迎会以来より一層周りからの視線が強くなった。やっぱりあまりに歌が下手過ぎたんだろうな。歌わなけりゃよかった。

「真って霞ヶ崎学園の方にずっと住んでるの？」

「ああ。生まれてからずっと住んでるけど？」

食後のコーヒーを口元に運びながらそう答える。うん、今日もいい香りだな。

「じゃあさ、金色夜叉って知ってる？」

「ブッ！」

あ、危ねえ…。飲んでたら間違いなく毒霧クラスの勢いで吹いてたな。

「その反応じゃ知ってるのね？」

知ってるも何も…なあ？俺の事だからなあ…。

「真はその金色夜叉を見たことありまして？」

「まあ…あるな。」

会話に加わって来た椿に返事を返す。鏡を見りやいつでも見れるし…。

「話した事は？」

「ない。」

これがもしもあつたら俺はブツブツ独り言を言う危ないヤツになっちまうから。

「な、なんで急にそんな話をしだしたんだ？」

冷静になろうとコーヒーを飲む。…ああ、味がわからない…。

「なんかその金色夜叉と仲間の鬼がこっちに来てるらしいのよ。」

「……………ッ！コホツケホツ…。」

コ、コーヒーが気管に入った…。

「ま、真。大丈夫？」

俺は片手を上げて大丈夫ってサインを送る。まあその間にも咳こんでる訳なんだけど。

それにしても…。俺は現にここに居るからまあアレだけど…。嵐の馬鹿もこっちに来てるのか？

「私もその話は聞いてますわ。校内でも噂されてますし。」

なんだと？俺はそんな話聞いた事ないぞ。…ってそうか…。こっちに来てから交遊関係があんま広くないもんな。大半の人からは話かけられないし…。俺って嫌われてンかね…。

「そうなのよ。こっちに来てなんか暴れてるらしいのよ。」

待て待て待て待て待てえい！暴れてる？俺は比較的大人しくしてるぞ！

「かなりの人が被害に逢われてるらしいですわね。」

「そうなのよ。もう噂が流れ出してから1ヶ月くらいになるけど被害は増える一方だってね。」

「いっかげつ…？」

ちよい待ち！俺が来てからまだ一週間くらいなんだけど…。

「名前が出たのは1ヶ月半前。」

「それって夏休み開始位からじゃない。」

「そんな長くなんて信じられせんわ。」

夏休みからだ俺は向こうに居たぞ。しかも両手を怪我してたから
それどころじゃなかったし。

って…おい！

「なんか一人増えてないか？」

「そうかな？」

「そうですか？」

「気のせい。」

上から桜、椿。んで……。やっぱ増えてるじゃねえか！

「あ、幸。」

「こんにちは、一文字さん。」

「こんにちは。」

ん？この人なんか見覚えがあんだよな…。え…と…

「肘、痛かった。」

あ…！そうだそうだ。生徒会の会計の人だ！

「俺だってアンタと桜のせいであんなの曝されたんだからな。」

あの写真のスライドを止められなかったのはさすがに辛かった。そもそもはあんな写真を送ってくるゆ…ちゃんが悪いんだけどな。

「あんなのとは何ですか？」

おうっ！そうだ。ドリル椿はそんなときの事知らないんだ。

「何ってこんなの。」

ここで一文字さんは何事も無いように普通に写真を出してきた。

「なっ！」

慌てて写真を隠す俺。そこに伸びる手が一つ。

「あら、まあ。」

ドリル~~~~！なんでそんな咄嗟に手が出るんだよ！

「真ってこんな趣味がありましたのね。」

うぎゃ~~~~！よりによって猫セットの写真かよ！

「そんな趣味は無い！それは騙されたんだ！」

そんな変な疑いをかけんじゃねえ！俺の人間性が疑われるだろ！

「それとアンタ！なんでこんなの持ち歩いてんだよ！」

他の写真をポケットに入れて処分しながら会計の人に詰め寄る。

「楽しそうだから。」

楽しくねえよ！少なくとも俺は超不快な思いしてんだけど！

「椿！それから手を離せ！処分するから！」

「嫌です。処分するくらいなら私が頂きますわ。」

くっ！この！引っ張ってもマジで離さないし！頂かれないから処分したいんだよ！

「よかったらまだあるよ？」

だからなんでアンタが写真を持ってんだよ！

「幸、アタシにも何枚か頂戴よ。」

お前も欲しいのか！俺の写真なんか持ってもなんも意味ないだろうが！

「他の皆にもあげようかな？」

他の人なんかより一層欲しがらないぞ！考えてみればわかるだろ。誰も俺に近付かないんだぞ？

「頼むからそんな写真はやめてくれ。普通の写真ならともかく…。」

ああ、もう！なんで昼休みにこんなに疲れる思いをしなきゃ行けないんだよ！

「普通のならいいの？」

「少なくともこんなものより何十倍マシだ。それ以前に俺の写真なんか何に使うんだよ!」

「記念。」

なんの記念だよ! ホントに意味がわからないんだけど。

「友達記念。」

………はぁ? 友達…記念?

「それは俺とアンタがって事か?」

頭が混乱してきたぞ。煙噴いてショートしそうだ。

「イヤ?」

「別にイヤって訳じゃねえけど…。いいのか? 俺ってなんか嫌われてるっぽいぜ?」

なんだか固まる会計の人。たしか一文字さん。ゆっくり動いて桜を見る。無言で頷く桜。今度はドリル椿を見る。同じく無言で頷く椿。そんなのを見ると3人はいきなり集まって小声で話だした。

（今の本気?）

（これが本当にそう思ってるのよ。）

（私も最初は疑ったのですが…。）

声が小さすぎて何を話してるのか全然聞き取れねえ。なんだかハブ

にされてる気分だ。しょうがない、いじけながらコーヒーでも飲んでよう…。

若干冷めたコーヒーを飲みながら3人の様子を見る。3人の話は変に盛り上がってるみたいで俺は入る隙間は無いみたいだ。

（真は自分の事を嫌われ者ってホントに思ってるのよ。）

（嘘。）

（本当ですわ。人が近付かないのも逆の理由ですのに。）

なんだか話の内容はよくわからないけど話ながら人の顔をチラチラ見るのはやめて欲しいな。

その話し合いは昼休みが終わる前まで続いた。

多分、俺は居なくてもよかったんだろうな。でもさすがに一人だけ帰るのも悪いしな。

話してる3人とそれを見てる俺。こりゃ確実にハブられてるって光景だよな…。マジで落ち込みそうだよ…。

俺が机にの字を書いているとどうやら3人の内緒話は終わった様で再び一文字さんが俺を見てきた。片手にはどこから取り出したのか（本当に謎だ）デジカメを持っていた。

「友達記念。」

まあ、俺としては構わないんだ。こっちでの友達少ないし。短期間とはいえ少しでも仲のいい子欲しいし。

「わかった、わかった。」

一文字さんからカメラを取り片手を思いっきり前に伸ばす。

「私も一緒に入る。」

「私も入りますわ。」

桜と椿も俺の所に寄ってくる。あゝ、それは構わないんだけど桜。さりげなく俺の脇腹に肘をぶちこむのはやめてくれ。…飯食った後だし。

「そ、それじゃあ撮るぞ。√4はゝ。」

「「2。」」

「えっとゝ…」

パシャ…

撮ったのを確認する…。何故か桜だけ悩んだ表情で指を折りながら数えてる。桜、こんな問題で悩まないでくれ。

「プリントアウトはどうするんだ？」

「生徒会室でする。」

持ってたデジカメを一文字さんに返しながら聞いたらそう答えた。

「ま、まったあ。撮り直しを…。」

「駄目。」

桜の懇願を一蹴した一文字さんはポケットから何やら一枚の紙を取り出して桜に渡した。

「これも駄目。」

「あ、うう…。」

桜が渡された紙を見ながらうめいている。横から覗くと紙には

『¥380

お菓子代として領収します』

そんな風に書いてあった。そりゃお菓子代で領収書は通らないだろ…

外出前

今日は休日だ。ホントはゴロゴロしてたいんだけどさすがに少しは周りに何があるか知っておかないとな…。取りあえずブラブラするか。

って考えたから休みにワザワザ目覚ましをかけて起きた。ここで二度寝をしたいところだけどそうすると昼まで寝るだろう。

俺は気合いを入れて体を起こしてベッドから出る。…取りあえず顔を洗うか…。

水で顔を洗って眠気を飛ばして顔を拭きながら冷蔵庫からミネラルウォーターをとりだして冷蔵庫の上に積まれてるブロック型の簡易栄養食を取って一つを口にくわえる。ちなみにこれは黄色い箱でお馴染みのCMだ。味はチョコレート。

その一つを咀嚼して水を飲む。もう一つを口にくわえながら着替えを始める。着てく服は…適当でいいか。

よし、んじゃ出掛けますか。

自室に鍵をかけて玄関に行って靴を履き替える。

いやゝ、ズボンを履くのも久しぶりだな。やっぱ楽でいいな。

そんな事をしみじみ思いながら寮から出た。

「あ、真じゃない。」

「んあ？」

誰かに呼ばれたのでキョロキョロとあたりを見る。そしたら桜がいた。

「なんだ、桜か。なにしてんだ？」

「何ってトレーニングよ。」

トレーニングか。言われてみれば首にタオルかけてるし、汗もかいてるし…見りゃ一発でわかる事聞いてんな。

「朝早くからお疲れさん。偉いな。」

「別に。ただこの前誰かにいいように負かされたからね。」

「へえへえ。その誰かさんです。どうもすみませんでしたね。」

かなり卑屈っぽく返事を返す俺。

「別に嫌味とかじゃないから。アンタのお陰で自分がまだまだだつてわかったんだし。ある意味感謝してるんだよ。」

ななななななっ！こいつはホントに桜か！くっそ。なんか輝き過ぎで直視できないぜ。

「何よ…。それより真は何してんの？」

「ああ、近くに何かがあるか知りたいからブラブラしに行く。」

「ふう〜ん、一人で？」

「見りゃわかんだろ？」

どうせこっちで友達少ないですよ！アンタみたいに取り巻きもないしな。

「じゃあ30分したら行くから部屋で待っててよ。」

「はあ？来るの？」

こいつはいきなり何を言ってるんだ？

「ある程度案内するからさ。」

そりゃあ確かにナビゲーターがいれば楽だけどさ。

…うん。何を言っても無駄そうだ。この眼は何を言っても聞かなそうだな。

「わかったよ。んじゃ部屋で待ってるから早く来いよ。」

「うん。汗流したらすぐに行くよ。」

桜はタッタタッタと小走りに寮の中に入って行った。

しやあない。俺も戻るか…。さっき来たのを逆走して俺は部屋に戻った。

つっても30分か。世のお嬢様方はもう少し時間かかるだろうからな…。まあ1時間位だろうな…。

およそ1時間をどう潰すか。何かをするには短いし、ボツと待つにはちと長いな。

そんな事を考えながらベッドに横になる俺…。…………あ…、なんか……瞼が……落ちて…………

スウ…………スウ…

…………んっ…

目を開けると天井が見える。…………やべ、寝ちまったか…。時計を見ると1時間半位経ってる。…桜はまだ来てないのか。

「ん…………。」

今の声は俺じゃないぞ。ってちょっと待て！なんで俺のベッドから俺以外の声が聞こえるんだ！？

頭が一気に覚醒していく。頭の覚醒に従い体の感覚もハッキリしてくる。…俺の左側になんかある。

俺は布団を捲ってそのものを確認した。

「ブッ！」

俺は瞬間的に布団を戻した。そういえばベッドの横に『俺のじゃ無い』服があるのが見える。

「おい！起きろ！」

……ちっ！声をかけても何も反応しねえよ！

「起きろって言ってんだよ！」

俺は布団に手を入れて勘でそれに触れる。勘の理由は見てはならないから。

結果これが裏目に出た。俺の手は確かにそれに触れた。触れた部分は異常に柔らかかった。

「んっ…。」

布団の中のそれはビクツと震えた。…起きるか…？

「スウ…スウ…。」

起きねえよ！このアマ…！…まあ今ので起きられたら俺が異常に気まずくなるんだけどな…。

取りあえず触る場所を変えよう…。そう考えた俺は手を動かそうとしたんだけど…少し遅かった。

ギュ…。

「ぬおっ！」

あろうことか布団の中のそいつは俺の手をロックしてきた。

こんなのは掴まれてない手でロックしている腕を離せばいいんだろうけど残念ながら俺の片腕は布団の中のヤツに枕替わりに使われている。

俺はしょうがなくロックされてる手を抜こうとする。手を少し動かすとその手に伝わるのは柔らかな感触。

これはヤバいぞ！具体的には俺の理性的なものが！狙ってやってんならまだしも寝てる以上無意識だからな。

抜こうとする度に変な声上げるし！マジで！マジで勘弁してくれ！

…よし、この幸せな感覚は無視だ。全力で引き抜く！……………おりゃ！

ガンッ！

「くおおおおお…。」

ひ、肘っ！肘が！電気がくくくく！

もがく事も出来ず静かに痛みと痺れに悶える俺。肘がシビシビするく。

2、3分悶えたと痛みと痺れが治まってきた。くそく。踏んだり蹴ったりだ。

「おいっ！いい加減に起きやがれ！」

俺は大声をあげつつヤツの頭を叩いた。これは決して肘をぶつけた八つ当たりじゃないからな。

「ん……。ん……。？」

ようやく、俺の布団に居たヤツ……。桜がうつすら目を開けた。

「あれ……。？真……。？」

うん、寝ぼけてやがりますな。俺はなんとなくムカついてもう一発叩く。

「いたっ！何するのよ。」

「いいからとにかくどけ。腕がもう限界だ。」

非難の籠った眼で文句を言う桜を一蹴する。俺の左腕は血が止まり過ぎて限界を越えていた。

「覚えてなさいよ。」

桜は小声で呟きながら上半身を起こそうとした。

「待った！取りあえず頭を腕から退かすだけでいい！布団からは今はでるな！」

見覚えの無い服が落ちてる。そして一瞬とはいえ見てしまった桜の

格好。今こいつが起き上がったらヤバイ。

桜は俺の声に大人しく従って俺の腕から頭を退かす。うおおおお
…。血が巡って痺れがスゲー事になってやがる。

「ん？ ああ…。」

ツン。

「Nooooooooooooo〜!」

ツン。じゃねえよ！このアマ！脳みそ解剖するぞ！

予想以上の大ダメージの左腕を庇いながら、そして極力布団を捲らないように俺は起き上がって桜に背を向ける。

「桜。話は後だ。先ずは着替えろ。」

「別にそれはいいけど…。どうして後ろ向くの？見られても気にしないけど。」

お前は気にしなくても俺は気にするんだよ！俺は年頃の男の子なんだよ！

「いいから着替えろ。さもなくばそのまま廊下に出して大声上げるぞ。」

こんな事言っちゃいるが見れない以上無理なんだけだな。

「それは色々困る。わかったわよ。着替えるわよ。」

後ろからモゾモゾと動く音がする。そこで着替えてるって感じの音がする。

…決してその光景を想像したりしてないからな…。

「着替えたよ。」

その声を聞いて後ろを向く。フェイントでもなんでも無く桜は落ちてた服を着ていた。ふう…一安心だ。

「さて、水無月桜さん。」

「な、何よ改まって…。」

一歩後ろに下がる桜。そんなので遠慮はしないからな。

「なんであんな状況になっていたのかお話頂けますか？」

たしか母さんが言ってたな。話す時は目を見て話なさいって。そんな言葉を思い出したから桜の目を見ながらゆっくりと笑顔で言った。

「いや…真？怖いよ…？」

「そんな事ないですよ。こうやってちゃんと話を聞こうとしてるじゃないですか。もう一度伺います。なんであんな状況になっていたのですか？」

2歩3歩と桜は後ろに下がっていったけどやがて壁にぶつかった。俺は桜が下がった分だけ前に詰めて行く。

「いや…そのね、シャワー浴びて来てノックしても反応がなくてね…それで…ノブ回したら開いてたから…。」

なんか桜の目が左右に動いてるけど…。この寮は防音はしっかりしてるし部屋には他に誰も居ないから助けを求めても無駄だよ？

「開いてたから？」

「開いてたから…その…入って…そんで…真が幸せそうに寝てたから…つい…。」

「それじゃあ服を着てなかったのは？」

「それは私が普段寝るときそういう格好だからで…。」

ふん。じゃあ悪戯でどうこうって訳じゃないんだな。

「わかった。まあ寝てた俺も悪かったんだしな。」

「そ、そうよ。私が急いで準備して来たのに。」

あ、俺が非を見せたら強気になりやがった。

「そもそも俺は一人で出掛けようとしてたんだけどな。」

「うっ…。」

俺の反論に声を詰まらせる。

「まあいいや。飯をおごってくれりゃチャラにしてやるよ。」

「それくらいなら…。」

言ったな？言っちゃったな？

「よし、じゃあ昼飯は満漢全席だな。」

「えっ……………」

うゝん。昼が楽しみだ

買い物

さて、俺は今駅前に来てます。昼飯も食べて時間は1時。いや、冗談で言ったのにまさかホントに桜がおごってくれるとは。

因みに食べたのはお蕎麦とカツ丼だから。さすがに昼に満漢全席は無理だ。

「んで、桜。どっかい所知ってんのか？」

なにやら財布の中身を眺めてる桜に声をかける。そんなに眺めたって中身は増えないからな。

「あ、そうね。真がどんなお店を知りたいかにもよるけど。」

俺の知りたい店か…。ぶっちゃけコレ！ってのはないんだよね…。

「桜が普段行く所を教えてくださいよ。何があるのかもわからないしさ。」

「わかったわ。じゃあ行きましょう。」

財布を鞆にしまった桜は俺を先導するように歩き出した。俺はその桜の横に並び付いていく。

「まずはここよ。」

そう言って桜が足を止めたのは……武具店。…おい。

「これは予想外と言うか…それとも桜なんだし予想通りと言うか…。」

「なにブツブツ言ってるのよ。ほら、入るわよ。」

俺の手を強引に引いて店内に入って行く桜。まあ…いいか。こういうの嫌いじゃないしな。俺は手を引かれながら店内に入っていく。

「いらっしやい…って桜か。」

入ると店員さんが来店の挨拶で向かえてくれる。そして奥から姿を現した。

こういう店で女の店員さんも珍しい。歳は20代の半ば位ってところか？一番に目につくのは…くわえ煙草だな。

接客しながら煙草ってのはどうなんだろうか？桜が気にしてないって事はいつもの事なんだろうな。

「なんだはないでしょ。一応はお客なんだから。」

その意見は至極ごもっともだな。

「そっちの子は立派なお客様なんだけどね。随分綺麗な子ね。やっぱ桜の取り巻きの子なの？」

取り巻き？俺が？桜の？まっさかー。

「違うわよ。この子は私の友達よ。ほら、名前くらい自分でいいなさい。」

肘で脇腹をつつかれる。…いや、脇腹に肘をねじこまれる。音がツンツンじゃなくてドスドスだし。微妙に痛いんだけど…

「はじめまして。桂木 真と言います。」

一応校外でもお嬢様っぽくしておくか。誰が見てるかわからないし。

「桂木 真？ ああ、桜が話してたのはこの子の事なんだ。」

納得したような表情でウンウン頷く店員さん。その時、煙草の灰が落ちたのを俺は見逃さなかったぞ。

「桜がいつも世話になってるわね。私は水無月 楓よ。」

へへ。水無月 楓さんか。…ほへ？ 水無月って？

俺はチラッと隣の桜を見る。

「真の考え通りよ。私達は姉妹なのよ。」

「そういう事。いつも妹が世話になってるわね。」

言われてみりゃ確かに目元とかそっくりだな。うん、なんか納得した。

「いや、名前を言われるまで桜がそっちに目覚めたのかと思ったわ。」

そっち？そっちってのはどっちの事だ？

「そんな訳ないでしょ！」

「いや、あの子に取られたからそっちに走ったのかなって。あれはどっちも進展無しなの？」

楓さんがイヒヒって笑いながら桜をつつく。うん、こういうリアクションはそっくりだな。

「そ、そんなのどうでもいいでしょ！」

「酷いわね。写真をあげたの私なのに。あ、桂木さんも見る？」

そういうながら楓さんはレジの所に行ってなんか持って来た。話の流れからして写真なんだろうな。

「ちょっと！何してんのよ！」

桜がこの前の手合わせみたいに：手合わせの時よりも早い連打で写真を奪いに行く。

一方の楓さんはその連打から写真を庇うように弾いてる。なかなかレベルの高い攻防だ。あの速さだと俺も迎撃は出来ないだろうな。

そんなのしていると段々と桜の動きが変わってきた。狙いが写真から顔をとか腹とかになってきてる。

「面倒ね。黙らせてから写真奪うわ！」

「いい度胸ね。やれるものならやってみなさい。」

おい。ここは店内だぞ。商品散らかるぞ。

そんな心配を俺はしてたけど二人は商品の棚には一切触れずに前後に移動しながらやりあってる。

ちなみにこの状況。俺は完全にハブられてるんだよね。これなら一人でブラブラしてても変わらなかったんじゃないか？むしろこんな姉妹喧嘩とかに逢わないで済む分だけましだったんじゃない。

今や店内はさっきまで聞こえていたBGMの代わりにガツとかバシツとかそんな鈍い音とキュツとかズザツみたいな足音しか聞こえない。

あ、あとは二人の会話が聞こえるくらいかな？

まあぶっちゃけるならすることも無くて、てもちぶたさだ。商品を見ようにも巻き込まれるのは嫌だから二人に近付きたくないし。

「いい加減に沈んで！」

「拒否するわ。」

二人は俺の事は忘れて白熱してるし。そんだけ暴れながら商品に当たらないのは尊敬しそうだよ。本来は暴れないほうがいいんだろうけど。

「あつ。」

そんな声が楓さんから聞こえた。それに気付いて俺はそっちを見る。すると何かがこっちに飛んできた。小さな紙みたいなもの。…写真だ。

それは俺の足元に滑るように落ちた。当然俺の視界に入る写真。

写真に写ってた人に見覚えがある気がしてしゃがんで写真を手に取って確認して…

「ブッ！」

写真に写ってたのはよく知ってるヤツだった。写真にでかでかと写り、しかもピースをしてるのは…

「嵐かよ…。」

探求心

「真。その人知ってるの？」

「うわっ！」

お前はさっきまでそこで暴れてただろ！急にこっちに来るな！マジでビビるから！しかも顔近いから！

俺と桜の距離は鼻と鼻がぶつかろうという距離。しかもさっきまで暴れてたから若干息が荒い。いやいや、怖いって…

「ま、まあ。知ってるけど…。」

「そうなの？桂木さん？」

今度は後ろからかよ！こっちも少し息が荒いし！これじゃ下がろうにも下がれないじゃないか！

「まあ…付き合い長いですから…。」

いやゝ、それにしても嵐かゝ。あんな存在が疑われるようなヤツが好きな人がいるなんてな…。

「真。この人の事教えてよ！」

だからにじり寄るな！ただでさえすごい近いんだ！それ以上近付くな！なんか柔らかいの当たってるから！

「そうよ、桂木さん。教えて。」

後ろのアンタも押しつけるな！体重をかけるな！

「教える。教えるから二人共落ち着け！」

この状況じゃ話すにも話せないから！

俺は肩を押して桜を下がらせながそのまま前に出て後ろの楓さんから距離を取る。

「ってかさ、話してって言われても何を話したらいいかわからないんだ。だから知りたい事を聞いてくれ。」

近くにあった椅子（多分靴の試着用）に座って二人を見る。

「じゃあまず質問。」

先に手を上げたのは楓さんだった。俺は手でどうぞって合図を出す。

「桂木さんはその話し方がデフォルトなの？」

話し方？ああ、言われてみれば素になってたな。

「そうです。気になるなら戻しけど？」

「いや、いや。その方が私も楽だし。」

そっか。そりゃよかった。わざわざ代えないで済むなら楽でいいや。

「真。そ、その人の名前はなんて言うの？」

「その前に確認。桜が聞いているのはこの写真に写ってるヤツの事でいいんだよな。」

写真を見せるとコクコクと首を縦に振った。うわぁ。桜の反応が見てて面白いんだけど。

「OK。こいつの名前は嵐だ。」

うおっ！いきなり手帳を取り出してペンを走らせるだした！

「嵐さんね。名字は？」

「赤井。色の赤に井戸の井な。んで、嵐の何が知りたいんだ？」

嵐の名前をすっかり覚えるように書いた桜が顔を上げる。それから桜と何故か楓さんの口撃が始まった。

「まず、嵐さんと真の関係は？」

「腐れ縁。」

「嵐くんって何部？」

「帰宅部。」

「嵐さんの成績は？」

「100以内。」

「それは上から？」

「下から。」

ちなみにヤツは放っておくと下から50以内にすらランクインする。
まあ巴もただけだな。

「嵐さんの得意な科目って…。」

「成績がいいのは体育だな。」

正確には体育以外はヤバいんだけど…

「そうなんだ。それは私と同じだ。」

なんかスッゲー嬉しそうなんですけど…。

「そういえば…。この写真っていつ撮ったんだ？」

「ああ、それは私が撮ったのよ。空手の関東大会だったわね。桜の
応援に言った時にね。」

関東大会ってと…ああ、俺が空手部にレンタルされた時に嵐と巴が
見に来た時か。あんときは俺は男だったんだよな。……まああんま
り思い出さないようにしよう。皆に悪いからな。

「なんで桜の応援に行って他の人の写真を撮ってんの？」

「いやゝ、桜だけ写してもつまらないじゃない？」

「私だけって結局私の写真一枚も撮らなかったじゃない。」

つまらないって言いきったよ。しかも応援に来てんの一枚も撮ら
ないってどういう事だよ。

「それは、ほら。その上の大会で撮ればいいかなってね。」

ただ単に忘れてたのか桜を信賴してんのか全然わからない発言だな。

「それにしても桜に勝ったのがこんな子だったなんてね。」

勝った？ ああ組手の話かな？

「あれは組手だったから。試合とは違うよ。」

「何言ってるのよ。大会でもあんな強い人なんて居なかったわよ。」

「桜だって全国行ってるのにね。そんなのに勝つ人っていうから人間離れした野生児みたいな人だと思ってたのに。」

や、野生児？ 人をなんだと思ってんだ。それにその言い方だとアンタの妹は野生児以外に負けない野生児寄りな人って事になるぞ。

「それは期待に応えられず悪かったな。」

「いやいや、想像とは違ったけどある意味期待以上よ。」

何が期待以上だったのかさっぱりわからん。

「そういえば桜。桂木さんが無自覚ってのはホントなの？」

俺が無自覚？ なんのことを言ってるんだ？

俺は桜を見たんだけど。メッチャ頷いてんですけど！ その表情たる

や『困ったもんです』見たいな感じだし！

「信じられないなら姉さんから質問してみればいいじゃない。」

「そうね。じゃあ桂木さん。アナタは自分の人気をどう思う？」

「人気？そんなのある訳ないだろ？人気があるのは桜とかドリルとかだし。俺はただ珍しいだけだよ。」

ってこれはまぎれも無く正当な評価だろ！二人して呆れた様なため息をつくんじゃないやねえ！

「これは中々…。」

「言った通りでしょ？」

「ええ…。」

桜が楓さんになんて俺の話をしてるのかとても気になる所だな。

「俺の話はいいだろ。それより嵐の事はもう聞かないでいいのか？」

「そうよ。聞きたい事はいっぱいあるのよ。」

これが恋する乙女ってヤツか？目がスッゲーキラキラしてる。

「嵐さんって身長はいくつ？」

「確か180はあるって言ってたな。」

ムカつく事にアイツは俺より高いんだよな。

「嵐さんの好きな物は？」

これは正直に答えていいのかな？正直に答えるなら『女』なんだけど…。乙女ドリームを壊したら可哀想だよな。

「よく食ってるのはカツカレーだな。」

これも正確に言うなら『カツを食われた』カツカレーだな。カツを食ってるのは俺等なんだけど。

「じゃあ嫌いなものは？」

「さあ？食い物に関しては無かったと思ったな。」

メモにペンを走らせながらガンガン質問してくる桜にひたすら答える俺。

個人情報？嵐に関してはそんなもん無いから気にしない方向で。

ちなみにこの乙女の質問ラッシュは1時間止まらなかった。

…喉が乾きました。

拉致と尋問

「たくさんさんの情報ありがとね。これはお礼よ。」

そういつて渡された缶コーヒーを一気に飲み干して空になった缶をゴミ箱にぶちこみ桜に指を一本突き立てる。

このジェスチャーが現す事は至極簡単だ。つまりは『one more』。短時間で話をし過ぎて喉が渴いちゃった。

「しょうがないわね。まあいいわ。有益な情報ばかりだったし。」

自販機に硬貨をいれもう一度同じボタンを押すとガタンという音と共に取り出し口にコーヒーが出てくる。それを取った桜はそのコーヒーを俺に投げてきた。

「おっと…。」

驚きながらそれをキャッチして一口飲む。

「ブッ！」

そして瞬間で嘔いた。

「甘え！」

そう、渡されたコーヒーは尋常じゃなく甘いコーヒーだった。

ぬおおおお…。甘さが脳髓を駆け上がる…。そして甘さが歯にズキ

ユーンと来やがる。

「ちょっと！いきなりなんなのよ！汚いじゃないの！」

「うっさい！ブラックの後にこんな甘いコーヒーを寄越すな！不意打ちもいい所だ！」

「あ、ゴメン。押し間違えてたわ。」

ホントに間違えたんだろうな？これが故意だったら許さないぞ。

「まあいいじゃないの。それより次はどこに行く？」

どこに行くって言うてもな……。別に行きたい所があるわけじゃないし……。あくまで目的は探索な訳だし。

「任せる。桜がよく行く所でいい。」

「私のよく行く所？うーん…、いいわ。じゃあ付いて着て。」

クルリと背を向けて歩き出した桜。俺は言われた通りその後ろに付いて行った。

「ここを抜ければ本屋があるんだけど。」

大きな通りを歩いてた桜が止まりビルの間の道を指差す。なんて言うかTHE路地って感じの道だ。

「なんか人が絡まれてたり倒れたりしそうな道だな。」

「いやいや。確かにそんな感じだけど今まで一度も見た事無いわよ。」

そっか。そうだな。そんな事がそうそうあるわけないよな。

「.....!」

.....。

「桜。なんか言ったか？」

「私は何も。真じゃないの？」

首を横に振って桜の発言を否定する。ああ、つまりコレはアレなのか...？

「フラグ立っちゃったって事か？」

ちゃんと聞いてみれば声はこの路地の先から聞こえてる。いや、わかつちやあいたんだ。ただそれを現実と認めたく無かつただけで...

「取りあえず言ってみるか？」

「そうね。ここ通らないと本屋行けないし。」

いや、本屋は別にな…。何してんのか興味があるっていうか好奇心というか…。どっちも意味は同じだな。

「ほら、行くよ。」

気付いたら路地に入ってる桜。お前、意外とヤル気十分なんじゃねえか。

そんな桜に続いて路地に入って歩くと声が少しづつちゃんと聞こえるようになって来た。

『…ら。いいだ…。』

『……………。』

『そ…事言わないでさ。』

『……………。』

男の声が複数聞こえるけど相手の声は聞こえないな。なんか会話をしてるっぽいけど。

さらに近付くにつれて段々と声が聞こえてきた。

『ちょっと位いいだろ？』

『嫌。』

『いいじゃん。楽しもうぜ。』

『興味無い。』

素晴らしいまでの一刀両断だな。そんでさっき声が聞こえなかったのはそんな大きな声で話してないからだったのか。

「この声は女の人よね？」

「そうだろうな。少し低音だけど女の声だな。」

どんな娘がどんな奴等に絡まれてるのか俄然興味が出てきたな。

『あんまり手荒な真似はしたくないんだけどな。』

『何するの？』

なんだか雰囲気は怪しくなってきたぞ。

「桜。こっそりゆっくり急げ。」

「ゆっくり急ぐってどうやるのよ。」

さあ？俺が聞きたい位だ。もしやり方を知ってるなら教えてくれ。

『おい！おさえろ！』

『へい！』

向こうから人の動く足音が聞こえる。こりゃマジでヤバくないか？

路地の向こうからは人が動く足音が聞こえて来る。

「桜。とにかく急げ。」

「わかってるわよ！」

前を歩いていた桜も様子に気付いたのか走り出した。俺もその後が続く様に走った。

「居た！」

桜は現場を視界に捉えたみたいだ。俺からは見えないけど…。桜、ちよっと邪魔！

「おい！なんか来やがったぞ！」

「野郎共、逃げるぞ！」

まあそりゃ見つかるよな。男達は逃げようとしている。

「あ、幸！こら！幸を離しなさいよ！」

幸…？って一文字さんかよ！

桜が態勢を低くしたから前が見える様になった。男が4～5人いるのが見えた。そんでなにかを抱える様に持ってる。距離は相当近い。

「にゃろ！」

俺は靴を片方脱いで男達に向かって投げた。もちろん桜には当たらない様に。緊急事態だ、文句は後で聞く事にする。

「がっ！」

靴は最後尾を走っていた男に当たって男は転けた。

桜は転けた男を飛び越えて集団を追った。

俺は走りながらジャンプして男の背中にフットスタンプを決める。

「ぬあっ！」

うん、ジャストミート！ただ着地に若干ミスって俺は男の背中から滑り落ちたけど。靴が片方無いからバランスが悪い。

「待ちなさいよ！」

「あいつが居ないぞ！」

「いいから乗れ！追いつかれるぞ！」

そんな声の後に車が走る音が聞こえた。流石に車じゃ桜も無理だろうな……。こりゃこいつを逃がす訳にはいかないな。

俺は男から降りて悶えてる男を見下ろす。

「逃げられたわ。」

予想通り桜は逃げられたみたいだ。まあ車に追いついたら人間じゃないからな。

男は桜の声で自分が置いてかれた事に気付いたのか体を反転させて周りをキョロキョロと見出した。

「なんだ、女かよ。お前等、俺が誰だかわかってんのかよ。」

俺達が女だとわかると男は少し冷静になったのか強気になりやがった。

「それは気になる所だな。アンタはどこ誰なんだ？」

これからの事を考えると知っておかなきゃならない事だからな。男を見下ろしたまま俺は尋ねた。

「あ、桜。俺の靴持って来て。」

こいつから目を離す訳には行かないから桜に頼む。足が汚れるしバランスが悪いのは何かと不都合だ。

「女が調子に乗ってんじゃねえぞ！」

多分、俺の態度が気に入らないんだろう。男が立ち上がろうとした。

「誰が立っていいって言ったんだよ。」

上体を起こした男の側頭部にローキックを入れる。勿論気絶させない程度の強さで。

男は蹴りをまともにくらって転がって頭を抑えながら痛がってる。

そんな男の上に馬乗りになって再び男を見下ろす。

「質問に答えろ。アンタはどこの誰だ？」

「ち、調子に乗ってんじゃねえぞ！」

男は俺を睨み返してくる。…ふう。ヤレヤレ…。

「あ、真。靴。」

「おう。サンキュー。」

桜から靴を受け取って履く。勿論その間にも男を逃がす様な真似はしない。

「あと桜、針とペンチ持ってないか？」

「無いけど…。何に使うの？」

桜が若干怯えた顔で俺を見てる。いやいや、桜がそんな怯える必要が無いだろ。

「コイツに赤いマニキュアをしてやってから剥がす。」

俺の下から小さな悲鳴が聞こえた。コイツはなんだかわかったのか？それとも剥がすってのに反応したのかな？

「じ、冗談だろ？」

「本気だ。本当ならテメエみたいな奴の叫び声なんか聞きたく無いんだけどな。」

「そんな事お前が出来る訳ないだろ！」

強がってるけど俺にははっきりわかるぞ。アンタが小刻みに震えてんのがさ。

「だったら試してみるか？出来るか出来ないか？」

俺はニツコリと笑いながら男に聞いた。桜が後で言ってたんだけどこの時の俺はかなり怖かったらしい。桜はあまりの怖さに3歩位下がったらしい。

「は、話す！話すから勘弁してくれ！」

男は目に涙を溜めて：ってより少し流しながら鼻声で懇願して来た。

「じゃあ話せ。アンタはどここの誰でなんの後ろ楯があるんだ？」

馬乗りになったまま笑顔で尋ねた。

「お、俺のグループのトップは：

金色夜叉だ。」

……………。

「悪い。もう一度言ってくれ。」

何を言ったのか理解出来なかった。

「トップは金色夜叉なんだよ！俺を離さないと酷い目にあうぞ！」

……。ああ聞き間違いじゃなかったんだな。コイツ等のトップが……俺？

「何？あの悪名高い金色夜叉なの？」

「ブッ！」

あ、悪名高いのか？俺は悪名高いのか？

「…で、アイツ等はどこに行った？」

「潰れたボーリング場だよ！もういいだろ！離せよ！」

潰れたボーリング場か。まあ探せばすぐにわかるだろう。

「ありがとよ。」

後はコイツを警察に渡しやいな。

俺は馬乗りの態勢のまま左右の掌底を一発づつ顎に入れた。

男はそれをまともにくらい意識を手放した。

「桜。警察呼んでこいつ渡して。」

「真はどうするのよ！」

俺？そんなわかりきった事聞かないでくれないかな？

「ちょっと所用ができちまったからさ。」

俺は携帯を取り出してある人物に電話をし出した。

呼び出し

俺が今いるのは駅前の喫茶店。いる理由はこれからの所用の為の腹ごしらえと待ち合わせだ。

ちなみに桜は警察に出頭しに行った。……、間違えた。警察に男を連れて行ってもらった。もちろん暴れない様に梱包した上でだ。

そんな訳で腹ごしらえの為目の前の料理を腹に突っ込んでいると携帯が鳴った。液晶を見ると待ち合わせの相手からだった。俺は通話ボタンを押した。

「ん……。ふう……。あ、悪い、着いたか？あぁ、じゃあそこから喫茶店が見えるだろ？そこの窓際の席にいるから。」

そう言って相手の返事を確認して携帯を切った。そして再び料理を口に運び出した。

「おう、真。なんか美味そうなもん食ってるじゃないか。」

そんな事をいいながら俺の前の空いてる席に座ったのは

嵐だった。

「いいだろう。それより頼んだ物持って来たか？」

「ああ。だけどなんで急にコレを持ってこいなんて行っただ？ 優さんに散々聞かれたんだぜ？」

嵐は鞆から袋に入ったある物を出してテーブルの上に置いた。

「理由は今から使うから。電話で伝えなかったのはお前がゆくちゃんに言う可能性があったから。」

袋を受け取って中身を確認する。うん、大丈夫だ。ちゃんと入ってる。

「なんだ？ 優さんに知られたくない事なのか？」

「まあな。嵐。ついでにもう一つ頼んでいいか。」

俺は袋をテーブルから下ろして嵐をジッと見た。

「真面目な話っぽいな。：いいぜ。俺でよけりゃ力を貸すぜ。」

内容も言っていないのにそんな返事をする嵐。美点なのか汚点なのかは判断が付きにくい所だ。

「嵐、ありがとな。やっぱりお前なら俺の背中を預けられるな。」

実を言うと電話をするときに少し迷ったんだ。嵐に電話するかゆくちゃんに電話するか。

結局は嵐を選んだんだけどそれには理由がちゃんとあって、1つは『金色夜叉』って名前が関わってるから。

それでもう1つはどっちなら背中を預けられるかだ。これがゆーちやんだと『お互いのフォロー』じゃなく『ゆーちゃんのフォロー』になりそうな気がするんだ。

一方の嵐は不本意ながら付き合いも長いし散々二人で無茶してきたから遺憾ながら連携力もある。

だから一瞬迷って嵐に電話をしたんだ。

「なんだ？ やっぱり荒事なのか？」

俺は鞆から一枚の写真を出して机の上に置いた。

「おお！ 可愛い娘ばっかじゃねえかよ。なんだ？ こっちの友達か？」

なんでコイツは写真だけでこんなに興奮してるんだろう？ まあこんだけ興奮してるならヤル気も出るだろう。

俺は写真の一部分…一文字さんの顔を指差す。

「この娘なんだけど…。」

「この娘か？ なんかクールな感じがする娘だな。んでこの娘がどうしたんだ？」

「連れてかれた。俺の目の前で…。んで、嵐。お前にその為に力を貸して欲しいんだ。」

「いいぜ。お前のダチなんだろう？ だったら力を貸すさ。」

やっぱ話を持ちかけたの嵐でよかったな。ゆうちゃんだと何を要求されてたかわからないからな。

「んで、真。この娘がどこに連れて行かれたかわかってんのか？」

「ああ。仲間の一人が快く答えてくれたよ。」

嵐、なんでそんな『ご愁傷様』みたいな顔をしてんだ？

「なあ、真。ホントに快くなのか？」

「ああ。物が無かったから何もできなかったしな。」

「って物があつたらヤル気だったのかよ！」

「そりゃあな。話してくれなかったらやってただろうな。桜も止めなかったし。」

まあ止めたとしても状況が状況だったからやってたかも知れないけどな。

さて、食う物も食ったし、嵐からブツは受け取ったし。

「取りあえず行くか。嵐、準備はいいか？」

「あんまりよくは無いけどそれどころじゃないんだろ？」

「勿論。」

嵐からもらった袋を手に持って席なら離れる。後ろで嵐も立ち上
ったのがわかった。

さて、救出に行きますか。

入口

「わお。いかにもな場所だな。」

「全くだ。」

日が若干沈んで来た頃、目的地に着いた。男が言ってたボーリング場だ。郊外にある為、周りには他に建物も無い。

「んで、真。ここであってんだろな。」

「合ってると思うぞ。潰れてるのに車止まってるし。それに、ほら……」

俺は入口を指差す。そこにはガラの悪いのが二人立っていた。

「見張りか。じゃあ間違い無いな。」

しかし、ホントに寂れてんな。建物はなくて側にあるのは林だけだからな。まあ林があつて助かったけどな。これまで無かつたらおちおち近付けやしないよ。

「さて、見張りは2人。とっとと黙らせて救出に行くか。」

「そうだな。ホントは暗くなるまで待ちたいけど待ってたら一文字さんに何されるかわからないし。」

俺は袋からブツを出して腰の所に付けて服で隠す様にした。

「そういえば嵐。今回は救出だけじゃないからな。」

中に入る前に言っておかないとな。重要な事だし。

「今回は救出と殲滅が目的だから。逃がすなよ。そんでやられても助けないからな。」

「殲滅ってまた物騒だな。そこまでする事なのか？」

「まあ、理由は中で判ると思う。取りあえずはそういう事だから。」
着々と突入の準備を進めながら話をする。髪は縛らないと邪魔そうだったから適当に縛った。暑いしさらに汗をかくだろうからポニテで。

嵐も手にグローブをはめたりして準備してる。グローブって言うてもボクシングみたいのじゃなくて総合とかで使う指先は出てるヤツな。

「嵐、準備はいいか？」

「いつでも。」

俺と嵐はお互いの顔を見てニヤリと笑う。こうやって2人でなにかするのは久しぶりだからなんか楽しいな。

2人とも右手に石を持って見張りの方を見る。石を持ってる理由はまあ簡単だ。当たればラッキー。当たらなくても注意を逸らせるから問題無いって事で。

「よし、行くぞ！」

俺と嵐は同時に石を見張りに向かって投げて走りだした。

石は見張りの一人に当たった。2つとも。

「嵐！同じ方を狙ってどうすんだよ！」

「俺じゃねえ！お前が俺の狙ってた方に当てたんだろ！」

「嵐が悪い！」

「真だ！」

言い争いながらも走ってはいる。全く、投げる前にどっちに当てるか話し合うべきだったな。それにしても嵐め。余計な手間増やしやがって。

「なっ！テメエ等！何しやがる！」

ほら、当たらなかった方、元氣そうじゃ無いか。嵐の大馬鹿。

「何って殴り込みだよ！嵐、俺はトドメさす。」

「はいよ！」

お互いが左右に散る。見張りはなんかワタワタしてる。この時に携帯とかで連絡されてたらヤバいんだけどパニック起こしてるみたいだ。嵐に突っ込んでる。

俺は石が当たって倒れてる男の所に走りこんでそのままの勢いで頭をシューシュートオ!

うん、見事なゴールが決まって相手は動かなくなりました。今のシユートの強さはあの日向○次郎にもヒケを取らない強さだったな。

「おい、真。扉に鍵がかかってるぞ?」

嵐も一瞬で済ませたらしく扉をチェックしてる。って鍵か。探すの面倒だな。

「よし、蹴破る。嵐、やるぞ。」

「おお。かますか。」

扉を前にして2、3歩下がる。足元も安定してるしぶち壊せるだろう。見た感じ押して開けるみたいだし。

「行くぞ、嵐。1、2の、3ッ!」

俺の掛け声と同時に嵐が一步踏み込んでサイドキックを扉にぶちこんだ。

扉は向こう側に向かって勢いよく開いた。どうせなら思いっきり吹き飛ばした方がよかったのに。

……俺か?俺は立ったままだぞ?無駄な労力を使いたくないし。

「って真お!なんでお前はやらない!」

「開いたんだからいいだろ？それよりどうせなら蹴り飛ばせよ。かつこいい所を見せるチャンスだったのに。」

「知るか！それに見てんのお前だけじゃねえかよ！」

それはごもつとも。確かに見せる相手が居ないな。

「そんな事ウジウジ言っていないでいくぞ。」

「ちくしょう。この話は後でじっくり話し合うからな。」

はいはい、3年位したらゆっくり話し合ってやるよ。

偽者

ボーリング場の中はシーンとしてる。：いや、奥からなんか聞こえて来てる。

「連中は奥みたいだな。」

「そうだな。あんだけ嵐が騒いだから入ってすぐにお出迎えかと思っただ。」

さて、ホントなら慎重に行きたいところだけどそんな事してたら手遅れになっちまうな。

「おい、真。見取図があるぞ。」

あ、ホントだ。暗いけど一応は見えるな。

「ふむ、奥に行く道は2つあるのか。こりゃ好都合だな。」

問題は普通に行くか少し遠回りになる道に行くかだな。

「真は真っ直ぐ行け。俺が遠回りするからよ。」

「理由は？」

「後から行った方が目立つから。」

うん。取りあえず脛に蹴りを一発入れておこうか。

「いてっ！冗談だって冗談！そんなに心配なら早く行きたいだろ！それに少ししか変わらないからそんな遅れねえし！」

そうならそうと普通に言えいいんだよ。変な事を言うから余計なダメージを負うんだ。

「ならそうさせて貰う。遅れんなよ。」

「おう。じゃあまた後でな。」

お互いに決めた方のルートに向かって走る。警戒？そんなもんする必要無い。仲間が反対から来るのわかってんだから会うのは全員殴っていいやつだ。

まあ、ある意味嵐も殴っていいやつに分類されるけど。

距離はそんな無い。100m位だし。途中でトイレの前で一人と会ったけど取りあえず殴った。勿論嵐じゃなかったぞ。

そんなこんなでレーンの並んでる所に出た。こ、これは：

「うわー、いかにもだなー。」

ボロボロのレーンにそこら中に転がってるピン。そして並んでるけど明らかに数が足りないボール。

「ああ？なんだテメエ？」

そんな感じで見てたら男と目が合った。くわえ煙草で片手に缶ビール。

ってビールかよ。なかなかやるじゃねえか。ゆーちゃんなんか発泡酒で我慢してるのに。まあソレを買った金の出先なんてロクな事じゃないんだろうけどな。

「なんだと言われてもな…。…。じゃあ宅配便屋って事で。」

「ああ？舐めてんのか？」

誰がお前なんか舐めるかよ。汚らわしい。

「本気だ。荷物の集荷に来たんだけど。」

「そんなもん頼んでねえよ。」

男は俺に近付いて来た。くはっ、息がヤニとアルコールで臭いぞ！

「寄るな。喋るな。とつとと連れてった荷物を持って来いよ。そしたらなんもしないで帰るからよ。」

「うっせえ！そんなん知らなっ！」

俺は男の腹に膝を入れた。不意打ちに反応出来ずまともに喰らった男は上体を屈ませる。そんな男の頭を右手で掴んで床に叩きつける。

「喋んたって言ったら。息が臭いんだよ。」

男には聞こえて無いだろう。なんか顔を床に付けたままピクピクしてるし。

さて、視線を再び場内にもどすと…あ、人がスゲー溜まってる場所がある。

あ、その向こうからなんか走ってくる。

「ライダー！叩キーーック！」

人の集まりに向かって放たれたライダー叩キックは綺麗に決まって数人を吹き飛ばした。それで叩キックをしたヤツは背中を着地して俺の方に滑って来た。

…うん、取りあえず踏んで置こう。

「お前は！考え！無しに！そんな事！するんじゃ！ねえ！」

「真っ！おさえろ！痛い！マジで！悪かった！すまん！」

まあ予想は付いてたとは思うけど今俺がケチョンケチョンに踏み潰してるのは馬鹿（嵐）だ。

「一文字さんに当たったらどうするんだよ！」

「大丈夫。確認したはずだから。多分…おそろく…。」

こいつは…。なんとなく蹴りやがったな。まあ当たってないからいいようなもののさ…。

「お、お前等…なんなんだ。」

あ、そういえばこの馬鹿のせいですっかり忘れてた。

「桂木さん…?」

なんてこった。一文字さんまで目を丸くしてるじゃねえかよ。

「あ、悪い悪い。そこにいる娘返してもらおうから。」

未だに呆然としてる一文字さんを指差しながらそう言う俺。

「そんな事言われてそうですかって返す訳無いだろ!」

まあそうだろうな。俺も聞いてみただけだし。

「それじゃあさ、そっちの代表者と戦って勝ったら返してくれないか?」

多分、これが一番楽だ。相手の人数が結構多いから（嵐が少し減らしたけど）面倒だしな。

俺がそんな提案をするとなんか一人が前に出てきた。身長は嵐よりあるな。190位かな? 横幅も結構…いや、だいぶあるな。そんなにいかにも悪そうな顔で髪は金髪。ただし根本は黒い。

…:こいつがアレだったらイヤだなあ…。

「姉ちゃん、なかなか面白いじゃねえか。いいぜ、その案に乗ってやるよ。」

そんな返事をするって事はこいつは上の人間なんだよな…。しかもプリンとはいえ金髪。

「こっちの代表は『金色夜叉』のこの俺自ら相手してやる。そっちは倒れてる兄ちゃんが相手か？」

やっぱりコイツかよ…。こんなヤツが金色夜叉を名乗ってるのか…。

「真。ひょっとして俺を呼んだ理由って…これだからか？」

いつの間にか立ち上がった嵐が小さな声で俺に囁いて来た。

「そうかそうか、へえ。これが金色夜叉か。」

そんな俺にしか聞こえないような声で言うんじゃねえよ！俺の偽物がこんななのかよ…。

「…相手は俺だよ。」

ようやく復活できた俺は自称『金色夜叉』に向かってそういった。

「姉ちゃんが相手か？女だからって遠慮しないぜ？」

何が楽しいのか笑い出してるし…。なんかスゲームカつく。

「ひょっとして嬢ちゃんは知らないのか？『金色夜叉』って名前をさ？」

…なんだろう。イライラするな、こいつ。

「知ってるよ。だからアンタの相手が俺なんだよ。それで『鬼』の相手はコイツがするよ。」

嵐の頭を軽く叩く。なんでって肩震わせてやがるから。

「ホントに知ってるみたいだな。おい！出てこい！」

自称『金色夜叉』が声をかけると一人の男が出てきた。

黒い短髪に明らかに日サロで焼いた黒い肌。身長は嵐と同じ位だな。

「その兄ちゃんが相手か？まあいい、この『黒鬼』が相手になつてやる。」

「ブッ！」

……思わず吹き出しちったよ。『黒鬼』だって『黒鬼』！

「嵐、『黒鬼』様が相手してくれるってさ。」

嵐は呆然としてる。なんとも楽しい事に超間抜けな顔してるし。

「なあ…真。『黒』だったっけ？」

「さあ？あちらがそう言ってるんだからそうなんじゃないのか？」

「真、これも知ってたのか？」

「いや、これは知らなかった。」

「おい！なにコソコソ話してやがんだ？」

俺と嵐がヒソヒソと話をしてるのが気に入らないのか自称『金色夜叉』が怒鳴り声を上げた。

「いや、色々とな。それより無事を確認したいから一文字さんと話をさせてくれよ。」

「そんな事言って連れて逃げんじやないだろうな？」

「心配ならしっかり見てりゃいいだろ？それともその目にはまってるのは飾りのビー玉か？」

俺は返事を待たずに一文字さんの方に歩いて行く。後ろには嵐が着いて来てる。

「一文字さん。大丈夫か？」

パツと見た感じ殴られた跡は無さそうだ。多少髪が乱れてるのは暴れたからだろう。

「なんで？」

ボソリと小さな声で一文字さんは呟いた。これは『なんで来たの？』って事か？

「俺達は友達なんだろう？だったらダチの危機には出来る事をするのが普通だろ？」

「でも、あれは…。」

「記念の写真もあるんだ。そうだろ？」

撮った写真はしっかりプリントアウトされて俺、桜、椿、一文字さんがそれぞれ持ってる。

「だけど…。」

「ダメダメ、こうなったら真は何を言ってもきかないぜ。」

横からひょっこり顔を出した嵐が口をはさんで来た。

「あなたは？」

「赤井　嵐。真に呼ばれて捕らわれのお嬢様を助けに来た助っ人だ。」

嵐…、この状況でそんなに目をキラキラ輝かせるのはヤメロ。お前が悪役みたいだ。

「助っ人？でも二人じゃ…。」

一文字は微かに震えてる。冷静を装おってるけど怖いんだろうな。まあ普通の反応だよな。

「大丈夫だ。『赤鬼』が居ればこんな連中二人で十分だ。」

「そうだな。『偽者』なんかに負けられないしな。」

そうそう。俺等が静かになった途端に名前使って悪さするヤツには負けられないな。しかも間違ってるし…。

「赤鬼？偽者？それはどういう…。」

「そのままの意味だ。偽者は偽者で本物の敵じゃないって事だ。」

「おい！まだか！」

おっと、お相手さんが痺れを切らしたみたいだな。

「桂木さん、まさか…。」

「まあ無事に帰してやつから少し待っててくれ。」

嵐を見て小さく頷く。嵐も頷き返してきた。

「じゃあ話は帰ったら聞く。」

「ああ、そうしてくれ。」

一文字さんに背を向けて俺と嵐は元居た場所に戻って行った。

さて、偽者を懲らしめるとするかな。

虎の衣を借る（前書き）

すごい間隔が開いてしまい申し訳ありません

虎の衣を借り

そんなこんなで俺の前には『自称』金色夜叉がいる。見れば見るだけこれが金色夜叉を語ってるって思うと落ち込みそうだ。

奴らの仲間は一文字さんを見張りながら俺達から距離を置いてる。

「姉ちゃん、顔は殴らないでやるよ。後で楽しむ時冷めるからな。」

「そりゃどうも。」

うん、予想を裏切らない下衆野郎だな。

「さて、さっさと終わらせてあっちの兄ちゃんを眠らせて楽しませてもらうかな。」

なんかニヤニヤ笑って変な事言ってるんだけど…。気持ち悪さ全開だな。これなら嵐の方が紙一重でマシだな。

「紙一重かよ!」

ウルサイぞ嵐。人の考えを読んでまで絡んで来るな。お前は『黒鬼』の相手をしてなさい。

「まあ、彼氏にたくさん見せ付けてやるからよ。俺達人数も多いし。」

……………。

こいつ今なんか変な事を口走らなかったか？ いや、まさかな？

「おい、今なんて言った？」

「ん？ 忘れたよ。まあ、彼氏より楽しませてやるよ。」

なんてこった……。やっぱり聞き間違いじゃなかったんかよ……。

「誰が嵐の彼女だ！ 俺に失礼だ！ 謝罪を要求するぞ！」

ふざけんじゃ無えぞ！ 無礼にもほどがあるだろ！

「なんだ？ 彼氏じゃ無いのかよ？」

「違えよ！ あいつは相棒だよ。それと『彼氏』の語尾を一々上げるな！ うぜえ！」

俺は足元にあった空き缶をつかみ嵐に向かって投げた。

「あぶっ！ 何すんだ真！」

「そのまんざらじゃ無いような余裕そうなニヤケ顔がイラついたんだよ。悪気は無い。」

「悪気しか無いだろ！」

そりゃ勿論。今はかわされて若干ムカついてるけどな。

「だいたいお前は俺がそういう趣味ないの知ってんだろ！」

「まあな。そうになったら優さんになにされるかわからないしな。」

全くだ。彼氏が出来たとか言ったらめっちゃくちや冷たい目で見てゴミを扱うような感じで扱われる事が確実だ。

「こるあ！何二人で話してやがんだよ！」

ああ、そう言えば嵐にムカついててすっかり忘れてたわ。

「そもそもはアンタがああ馬鹿嵐を俺の彼氏とか言うから悪いだよ。」

「なんだあ？俺のせいだって言うのかよ！」

「そうだよ。罰として一文字さんは返してもらおうから。」

うん。これでどっちも無駄な事をしないで済みそうだな。

「それでわかりましたって言う訳ないだろ！」

あ、やっぱり？流れ的にイケるかなって思ったんだけどな。

「って言うか怒り過ぎだ。ロクな物食べてないんだろうけどカルシウムはしっかり取れよ。」

「うるせえ！てめえにとやかく言われる事じゃねえだろ！」

うん、至極ごもつともだ。アンタの心配をしてやる義理も何もないな。

「でもカルシウムないとあっさり折れちゃうぜ？」

「はっ！お嬢ちゃんの力で折れるなら折ってみりゃいいだろ？俺は金色夜叉だぞ？」

自称だろ、自称。ってかいちいちその名前を出すな。気分的に凹むから。

「じゃあ試してみるか。折れるかどうか。」

そろそろ真面目にやっとかないと一文字さんが不安がりそう…、いや、それは無いか？表情読めないし。

まあ、こんな澱んだ空気の所から早くおさらばしたいし。

「嵐、そっちは任せたからな。」

「あいよ。任された。真こそハマすんじゃないぞ。」

どアホ。誰にももの言ってやがる。

「さて、楽しみだなあ。強がってるお嬢ちゃんが屈辱を味わうのが見れんだからな。」

うわぁ、メツチャ嫌な笑い方してるよ。気持ち悪っ！

「やってみな！」

俺は距離を詰めて『自称』金色夜叉の懷に潜り込んだ。

「らあっ！」

潜り込んだスピードを使って右の掌底腹に打つ。

「ぐうつ…。」

うん、いい手応えだ。そして脇腹に左右のフックを入れてバックステップで下がる。

「なんだ、随分鈍いな。少しは動けよ。」

打った感じではなかない手応えだった。

「こ、このアマ…。」

「流石にこれくらいじゃ折れないな。まあ、あんた肉が厚そうだしな。」

「うるせえ！」

叫びながら『自称』金色夜叉が突っ込んで来たけど…なんかドタドタって感じた。しかも大振りのパンチだ。こんなの避けてくれって言ってるもんだ。

俺は体を横に向けて大振りのパンチをかわす。『自称』金色夜叉は避けられてフラつきながら俺の方を向いてさらに右、左、右とパンチを打ってきた。

「このっ！避けるんじゃない！」

無茶を言う奴だ。当たらないのは避けられる位アンタのパンチが遅いからなのに何故か俺のせいにしてるし。

「避けられたくないならもっと早く打てよ。」

更に数回殴って来たけどそれを避けて流して捌いた。

「やっぱり一人じゃ何も出来ない連中だったのか。」

「黙れ！俺は金色夜叉なんだ！」

はいはい、わかったわかった…。

「自称だろ、自称。所詮アンタは虎の衣を借る狐なんだよ。」

ブンブン振り回すようなパンチの一つに合わせるようにしてヤツの顎に掌底のフックを入れる。

「じゃあな。偽者さん。」

相手の動きが止まった所で体を半回転させて腹にソバットをぶち込む。

「ぐげえ…。」

腹を押さえながら膝をつく男。俺はまた半回転して相手の顔面にソバットを入れる。

それをくらった『自称』金色夜叉は蹴られた勢いで床に後頭部を打って動かなくなった。

まあ、ピクピクしてるから生きてるだろう。

「リーダー！」

「ボスッ！」

「親方！ッ！」

「頭ぁーッ！」

呼び方くらい統一しておけよ。見事にバラバラじゃねえか…。

「LRだ〜！」

そんな事考えてたら向こうから声が聞こえてきた。その後に何かを叩きつける音がした。

「嵐、わざわざフィニッシュをアピールしてんじゃねえよ。」

「いいだろ。ギャラリーがいるんだし。」

このギャラリーは99%がアウェイだって事は理解してんだろうな。

「んで、それは生きてんのか？ラストライドなんか決めてさ。」

「大丈夫だろ？なんかピクピクしてるし。」

なら生きてるな。こっちと同じ状況だし。さて、波乱も起きずに終わったし一文字さんを連れていくかな。

「ちょっと待つんだな〜。」

あん？なんだ？

「女を連れていくんなら俺に勝ってからにするんだな。」

ギャラリーの向こうから声が聞こえたかと思うと人垣が割れて一人の男が出てきた。

「その女。俺と勝負なんだな。」

現れたのは縦にも横にもデカイ男。頭はスキンヘッド。

「なあ、嵐。俺こんな人を見た事あんだけどさ？」

「奇遇だな。俺も見たことあるぞ。」

うん。こいつはある人物にソックリなんだ。

「「ハー○様だ！」」

こいつは間違いないぞ！某世紀末救世主に出てきたお方がなんでもんな所に！

「女。お前の攻撃は俺には通用しないんだな。」

いやいや、そんなお腹をポンポン叩きながら言うな。○ート様と同じで脂肪があるから通じないっていいたいのか？

「なあ、俺が相手なのか？」

「そうなんだろ？直々にご指名だし。」

え〜〜〜！なんかベトベトしてそうだから触りたくないんだけどさ〜。

「女〜。かかってくるんだな〜。」

……。なんか余裕そうに笑われてるってのもムカつくな。

「わかった。俺を指名したことを後悔させてやるよ。」

デカイのを相手にするときの基本は足から崩す。これでしょ、やっぱ。

そういう訳で正面からハ〇ト様の左膝に前蹴りを打ち抜くように入れる。

そうすると結果はどうなるかというと…

「ああああっ！足がー！ー！ー！」

はい、本人の体重もあって膝が曲がっちゃ行けない方向に曲がります。それでもって痛そうにのたうち回ってます。

「よっ！と！」

そんでトドメとばかりにハードブーツでトーキックをおもいつきり一撃。

「びぎよじゃあ！」

なんか人間とは思えない悲鳴あげてハー○様は泡を吹いて沈黙しました。

って訳でしゅ〜りよ〜。別に脂肪があっても鍛えられない所はあるしな。

「俺の前ではお前はただの脂肪の固まりに過ぎん！」

クルツとハート○に背を向けると

パチパチパチパチ。

って感じで誰か一人が拍手をした。まあ、誰かって考えられるのは一人しか思いあたらんのだが。

「いいぞ、真。決めゼリフまでバッチリだ。」

ほら。やっぱり嵐だ。そんな拍手を送る嵐の所まで歩いて行く。

「ほら、馬鹿が馬鹿やってると哀れだぞ。帰るぞ。」

「そうだな。もう誰も文句いいそうに無いしな。」

よし、じゃあ一文字さんを連れてっど。

「って真！馬鹿ってのは：「そいつらを生きて帰すな！」

全員の目が叫んだヤツの方を向く。そんなみんなからの視線を集めたのは：

『自称』 金色夜叉の人だった。

禁忌

「そいつらを生きて帰すな！」

そう叫んだ男は鼻から血を流しながらみんなの注目を集めていた。

「真。浅かったんじゃないのか？」

「おっかしいな。確実に捉えたと思ったんだけどな。」

だってブーツで顔面にソバットだぜ？普通立ち上がれないって思う
だろ？

「犯れ！殺れ！ヤレーーーーーッ！」

あ…、あの目はヤバいな。イツちゃってるぞ。

そんなヤツの叫びを聞いてヤツの仲間達は殺気だってきた。手には
各々が得物を持って。

男達が持っているのは鉄パイプとか角材とか木刀とか空き瓶。それ
にコシヨウとかタバスコとか…ってある一部のヤツ！お前はその武
器で何をする気なんだ！

目潰しか？目潰しなんだな？そんなもん喰らわないからな！

「いやいや、囲まれちゃったな。」

「全くだ。嵐、後ろ任せるぞ。」

「はいよ。その代わり俺の後ろよろしくな。」

俺と嵐は背中合わせになって立っている。さてさて、この人数はどうしたもんかね…。

「話が違う。」

「うるせえ！引っ込んでろ！」

パシンッ！

そんな声と音が聞こえた。人垣の向こうらしく姿は見えなかったけど。

会話はどうでもいいんだ。肝心なのは一文字さんを殴ったって事なんだ。

「嵐、背中はいいや。一文字さんを頼むわ。」

「構わないけど大丈夫なのか？」

「ああ、危ないし。それに見せたくないからな…。」

大事なのは前半より後半だ。これからの俺の姿を見られたくないんだ。

「んで、この厚い壁を俺一人で破れってのか？」

「なんだ？出来ないのか？」

「その『俺なら出来る』って感じで言われたら出来ないって言えなくなるだろ。」

別にそんなつもりじゃなかったんだけどな。

「しょうがない。やってやるよ！」

嵐はさっき声のした方に向かいだした。

普段は馬鹿でどうしようもないヤツだけどこういう時には頼りになるヤツだ。一文字さんの事は任せよう。

相手は二つに別れた。嵐を迎えるヤツらと俺に来るヤツら。

「死にやがれ！」

誰が親切に死ぬかよ。まだまだ長生きしたいんだからよ。

俺は向かってきたヤツらに集中する事にした。

・――・――

金髪の大きな男の人が叫ぶと桂木さん達が男の人に囲まれた。

それに気付いた私は男の人に向かって行っていた。

「話が違う。」

話では彼女がこの人：金色夜叉を名乗る人に勝てば私は解放されるはずだった。

そして彼女と一緒に来た男の人は相手を倒した。

私はそれを金色夜叉を名乗る人に伝えたかった。

でもその結果は…

「うるせえ！引っ込んでろ！」

そんな声と共に振り払われた手で返された。

その手は私の頬に当たり私を吹き飛ばした。

飛ばされた私は汚れた床を滑った。

痛みは感じ無かった。ただ自分の無力さを思い知った。

危ないってわかっていながら助けに来てくれた彼女に対して私は何も出来ない。

その彼女は大勢の人に囲まれている。囲んでる人は手に色々な物を持っていた。

助けに行きたいけれど私の足は動かない。気持ちとは裏腹に体はあそこに行っては行けないと…

ただ怖かった。この人達が…。

「うおうりゃー！」

そんな私の目の前を影が横切った。その影は壁にぶつかり床に落ちた。

落ちたのは人だった。つまり今、私の目の前を人が床と平行に飛んでいったという事なのだ。

普通では絶対にありえない事。でも確かに起きた事だから何か理由があるのはず。

人が飛んで来た方を見るとまた人が飛んできた。

放物線を描く事なく真っ直ぐに…。

そしてこの不可解な現象を起こした人がだれだか判明した。

桂木さんと一緒に来た男の人が何かを投げた態勢になっていたからだ。

人を投げてできた道をその人は走ってきた。

「よっとお！大丈夫か？当たってないよな？」

「当たって無い。」

私がそう言うとその男の人：確か赤井さんは安心したようにため息をついた。

「よかった。もし当たってたら真になにされるかわからないからな。」

」

そういえばこの人は始めに桂木さんにこてんぱんに踏まれてたわ。ちなみにこうやって話をしてはいるけど赤井さんは私に背中を向けてたくさんの人の相手をしている。

「一文字さんだったよな。うお！危なっ！動けるか？よっと！」

「動ける。」

さっきまで体中にあった恐怖は嘘のようになくなり手足は私の望むように動かす事ができるようになっていた。

「よし。それは助かって危な！動けるなら立ち上がってくれ！」

言われた通りに立ち上がった。体は問題ない。

ただ打たれた頬ところんで擦った膝が痛む程度。

「うりゃ！吹っ飛べ！」

私が立ったのと同時に位に赤井さんはまた人を投げた。今度は窓に向かって。

「ひゃあああああ……。」

投げられた人は窓を破って悲鳴をあげながら落ちて行った。

「さあて、次は誰が鳥になるんだ？」

…少なくとも飛ばずに自由落下してるから鳥にはなっていないと思う。
赤井さんを囲んでいた人達が半歩下がった。その気持ちはわかる気がする。人を直線で投げるような人が窓に向かって投げると言っているんだから…。

「来ねえならこっちから行くぞ！」

赤井さんが一步踏み出すと相手達は一步下がった。赤井さんはそんな相手を見てさらに歩を進めた。

そして相手も同じように下がったところで赤井さんは体を反転させて私の方に向かって走ってきた。「逃げるぞ！」

そう言いながら赤井さんは私を抱えた。

「桂木さんが…。」

「いいから！とりあえず安全な所までいくぞ！」

そんな…。桂木さんを置いていくの？私の為にこんな危ない場所まで来てくれたのに…。

それにそもそも逃げると言われても出入り口まではひとがたくさん居て私がいたらとても突破できるとは思えない。

「しっかり捕まってるよ！」

赤井さんは私を抱えたままさっき人が飛んでいた窓に足をかけた。

…窓に足？冗談でしょ？

そう思った瞬間私の体を浮遊感が襲った。

「！！！！！」

私は腕に力を入れて赤井さんに抱きついた。

「ぐえっ！」

浮遊感は一瞬。すぐに重量を感じる事が出来た。しかも着地の際にさっき飛んでいった人を踏んだらしい。らしいっていうのは私の足が地面に付いてないから。赤井さんに抱えられて尚且つ抱きついてるから。

「へえ。悲鳴をあげないなんて大した度胸だな。」

赤井さんの言う通り悲鳴は上げなかったけどどけして度胸があるわけじゃない。ただ驚き過ぎて声が出なかっただけ。

「さて、非常に嬉しい状況で言いたくないんだけどそろそろ手を離してもらえるか？」

「えっ？あ……。」

私はすぐに手を離した。言われて気付いたけど赤井さんに抱きついたらまだだった…。

手を離れた私はその場に座り込んだ。緊張が切れたのと、さっき飛

び降りたのもあとて私は見事なまでに腰を抜かしていた。

「大丈夫…じゃなさそうだな。こんな状況で悪いけどここで待っててくれ。」

赤井さんは私に背中を向けて入り口の方を見ていた。

「待って。一つ聞かせて。」

「ん？電話番号とアドレスなら喜んで教えるぞ？」

「違う。そんなのじゃない。」

「そんなのって……。」

端から見てわかるようにガツカリしてる。…ちよつと言葉間違えたかしら？

「さっき言ってた『偽物』について。」

「ああ、その事か。『偽物』ってのは『本物』じゃないって事だ。」

「じゃあ、アナタ達が？」

「想像通り。真が『本物』だよ。俺も『赤鬼』なんてよびやりよ！」

……………。

話をしていた赤井さんがいきなり飛んでいった。

「はあ…はあ…。幸、大丈夫？」

「桜…。」

どうやら赤井さんを攻撃したのは私の目の前で息をきらせているこの人物のようだ。

「あんた！私の友達に手をだしたら承知しないよ！」

桜は飛んでいった赤井さんと私の間に立ってそう言った。

当の赤井さんは蹴られた脇腹が痛いらしく脇腹を抑えながら悶え転がっている。

「あ、桜…。」

「幸、大丈夫だった。なにも変な事されなかった？」

「あ、うん。」

って違う。ちゃんと桜に説明しないと…。

「くおおおお…。そ、その子は友達か…？」

少し痛みがひいたようで転がるのを止めた赤井さんが体を起こして口を開いた。

「そうよ！それ以上近寄ってみなさい！もう一発いくわよ！」

「もう一発くらうのは勘弁して欲しいな。」

脇腹を抑えたまま立ち上がる赤井さん。不意打ち気味に桜の攻撃を受けたのにこんなにすぐに立ち上がれるなんて…。

「ここでもう一発喰らうと足手まといになっちまうから行くとするかな。」

「戻るの？」

「ん？ああ。あいつなら大丈夫だろうけどな。サボってると何言われるかわかんないしな。」

この人はあの敵だらけの中に戻るんだ。

あれ…？それじゃあ…

「なんでわざわざ外に？」

「あいつが怒ったからかな？」

またわからない事が…。怒る理由がわからない。あと、答えになってない。

「お嬢さんはアイツのダチなんだろう？アイツはダチを傷付けられて黙ってられるヤツじゃないからな。」

傷………？ひょっとして振り払われた時に殴られたこと？

私は相手の手が当たった頬に自分の手を当てた。

「幸、傷ってなによ？ ってよりこの人は連れてった仲間じゃないの？」

「傷っていうほどじゃない。」

そういえば桜の誤解をといてない…。でもそれよりもこっちの方が大事ね。

「桂木さんが怒ったから外に？」

「ああ。真はあんた達に怒った時の自分を見られたくないみたいだからな。」

「真って怒るとそんなにヤバいの？」

桜、いい質問。私も聞こうと思ってた。

「おお、ヤバいぞ。あの名前がピッタリ…いや、可愛いくらいにな。」

あの名前って『金色夜叉』？それが可愛いって相当な気がする。

「さて、そろそろ俺は戻るぞ。真のダチに傷付けたのは許せねえし。…それに俺達の名前語って悪事働くなんざあな。」

そう言い残して赤井さんはボーリング場の入り口に向かって走っていった。

必然的に残るのは私と桜の訳で…。

「幸！無視しないでよ！アイツは何なのよ！」

「あの人は…。」

私は赤井さんが入って行った入り口をみている。今は人影は無い。ただどあそこから2つの人影が無事に出てくる事を信じてる。

「本物…。中にいる『金色夜叉』の相棒の『赤鬼』よ。」

最近流れてた噂とはかけ離れた2人。

ところでさっきから時々上から人が落ちてくるのは…。

やっぱり桂木さんがやってるのかな？

…彼女は怒らせないようにしよう。

終焉

「さて…。てめえら、覚悟出来てんだろうな。」

嵐が一字さんを抱えて窓から飛び降りたのを視界の隅で確認した俺は相手から一旦距離を取る。

「嬢ちゃんこそいいのかぁ？お仲間は逃げちまったぜえ？」

確かに嵐が居なくなった分だけ人が俺の所に集まってるけど…。

「てめえらなんかいくら束になっても関係ねえよ。」

ジリジリ近寄ってくる奴らを警戒しながら俺は『偽物』の方を見た。

「てめえら。後悔させてやるよ。『金色夜叉』を名乗った事をな…。」

人の名前で散々悪い事してきたみたいだからな。ふざけんじゃねえよ。

「後悔するのは嬢ちゃんだ。ヤっちなまえ！」

『偽物』の号令で男達はそれぞれの得物を持って突っ込んできた。

俺はそれを見ながら嵐から受け取ったモノを持つ為、腰に手を持っていた。

俺の両手に握られたのは『ト』のような形をした鈍い銀色のもの…

トンファーだ。

一人のヤツが鉄パイプで殴りかかってきたからそれを左のトンファ
ーで受け流し（腕に付ける感じで握るのがポイントだ。テストにで
るからな）右のトンファーで顔面を殴る。

するとそいつは華麗に吹っ飛ばされて後から迫ってきてたヤツらに
突っ込んでいった。

殴りかかってきてたヤツらはそれを見て足を止めた。

「わりいけど手加減と遠慮はしねえぞ。お花畑と川を見たいやつは
かかってこいよ。」

両手のトンファーをクルクル回しながら男達を見るけど…。なんか
怯えてる感じだな。

「何ビビってやがる！女一人だろ！ヤレーー！」

後ろの方からそんな声がした。いやいや…、後ろで威張られてもな
あ…。

『うおおおおお！』

偽者の命令に従ってか自分達の意地かはわかんねえけど、俺を囲ん
でたヤツらが叫びながらかかってきた。

それぞれが手に持ってる武器で俺を殴ろうとしてるのがよくわかる。

…気持ちはわかるんだけどさ……。こんだけ人がいる所で長物をふ

りまわしたらどうなるか考えろよ。

「んげっ！」

「ぐがっ！」

ほら、仲間に当たってんじゃねえか。んで人に当たってノロくなつたもんに俺が当たるわけないだろ…。

ひょいっとかわして顔面に一撃。それで殴りかかってきた男はKO！

いやゝ。なんてったって周りが全員敵だからな。何も気にしないでいいから楽だ。

近くで動いてるヤツに一発ぶち込んで攻撃は全部かわす。

そうしてれば人数がドンドン減ってくんだからな。

「死ねやっ！」

そんな声が聞こえた瞬間、俺の頭に痛みがくる。その後に何かが割れる音がして俺の目の前をガラスが降って来た。

俺が後ろを向くとそこには割れたビンを持った男がいた。

「イッテェな！」

そいつを蹴り飛ばして殴られた場所を触る。すると手にヌルツとした感触が伝わってきた。

ありゃ…油断したな。血が出てるじゃねえか。

「今だ！ 囲め！ ヤレー！」

またも人垣の後ろから声が聞こえて来た。どうやらチャンスだと思っただけ。

って痛い！ アルコールが傷に染みるってば！

クソが！ よりによって中身入りで殴りやがったのかよ！

『うおおおおお！』

叫んでんじゃねえよ！ うざってーな！

確実に俺に対する囲みは小さくなって。どれくらいかって言うと手を出せば届くくらい。

…って事は殴っちまえばいいんじゃないか。

俺は左右の腕を振って手当たり次第に殴っていく。

おおー！ 当たる当たる！ 密集してっからよけるスペースも無いみたいだ。はっきり行ってコイツ等は馬鹿だ。

「おら！ どけどけー！」

トンファーでひたすら殴りっていくとまた俺の周りにスペースが出来た。（多分2mくらい）

よし！今がチャンス！

「りゃ~~~~っ！」

俺はまず目の前のヤツに向かって飛んだ。

「グルプエ！」

飛んだ際に両足で顔を踏んだら人間とは思えない悲鳴をあげた。：
……キモッ！

それで力の方向を横から縦に代えて…飛ぶ！

「おっ！こりゃ！意外と！」

これ楽しいかも！

俺が何をしているかというところ…飛び跳ねてます！男達の頭とか肩とかを足場にして。ちょく楽し〜！

「この！」

「降りやがれ！」

「プギュア」

下から色々聞こえるぜ。やつらは手を伸ばすだけで俺を捕まえる事は出来ない。

「よっと！」

俺は男達の上を飛びながら位置を変えて壁際に着地した。

「さて、遊びはここまでだ。：テメエ等全員潰してやるよ。」

まずは背中を向けてる馬鹿な連中の頭を殴る。

「オラオラ！」

その後に近くにいたヤツらの顔を殴る。

ボーリング場には男達の怒号と悲鳴、それとトンファーで殴る音が聞こえる。

「くそが！」

男の一人が俺に殴りかかってきた。俺はその殴りかかってきた腕をつかみ男を投げた。

窓に向かって。

パリーン

男はガラスを突き破り下に落ちて行った。死んだか？……まあどうでもいいか。

俺は再び男達をトンファーで殴る。向かってきたヤツは投げて落とす。それを繰り返した。

しばらくすると囲んでる男達は5人にまで減っていた。足元にはたくさんの男達が倒れていた。

視界が開けた事で周りが見えるようになって気付いた。…なんで嵐が居るんだ？

因みに嵐の足元にも男達が転がってた。

「嵐。」

この一言に込めたのは『なにしてんだ？お前は一文字さんを逃がすんだろ？お前がここにいて馬鹿共が一文字さんに危害を加えたらどうすんだ？』って気持ちだ。

「あの子なら大丈夫だ。なんか救援が来た。だから暴れに来た。」

救援だあ？俺達がここに来てるのを知ってるヤツなんて……一人居たか。

「救援はだれだかわかった。任せて大丈夫だな。」

話ながらも俺は手を止めない。側頭部を殴って一人。顎に一撃を入れて一人をダウンさせた。

嵐も二人片付けていた。残ったのは一人。偽者だけだ。

「さて、いよいよアンタだけになったな。」

「て、てめえ！わかってんのか！俺は金色夜叉だぞ！」

いやいや、そんな怯えながら言われてもなあ：

「そういえばそうだったな。ただ俺の知ってる金色夜叉とは違うみたいだけどな。」

同意を求めるように嵐を見ると笑顔を浮かべながら頷いてた。

「俺が金色夜叉だ！違うはずがねえだろ！」

多分こいつを支えてるのは金色夜叉って名前だけなんだろうな。

「違うな。俺は会った事はないけど知ってたんだ。金色夜叉はこんな徒等は組まないし、悪行は働かねえよ。」

「うるせえ！誰がなんと言おうが俺が金色夜叉なんジャピュ！」

訳のわからない悲鳴を上げた偽者。まあ簡単に言うとなんか俺が顔面に蹴りを入れたからなんだけど。

「もういいや。」

蹴られて尻餅をついてる偽者を見下ろす。

「アンタさ。俺の名前語って悪さしたんだ。覚悟は出来てんだろうな。」

「お前の名前だと…？」

鼻からなんか赤いのを流した偽者が俺を見上げる。

「ま、まさか！お前が！」

ようやく気付いたみたいだ。まったく持って鈍いな。

「しかもお前は俺の友達に手をあげた。コレは許される事じゃないんだよ。」

俺は足を上げて偽者の右膝を思いっきり踏み抜いた。

「ギアアアアアアアアアアアアアアアア！足がああ！俺の足がああああ！」

「うるさいよ、お前。」

さっきと同じように足を上げてもう片方の膝を踏みつけた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

両膝を抑えながら痛みに悶える偽者。

「だからうるさいって言ってんだ。いくら頭悪くても日本語は通じるんだろ？」

そう言うとき偽者は涙目で俺を見上げて来た。

「た、たす…けて…。」

「それはこれから考える。さて、聞きだいんだけど今まで俺の名前を使ってどんな事してきた？」

「わ、わからねえよ……。覚えてねえよ……。なあ、そんな事より病院に行かせてくれよ……。」

涙を浮かべながらカタカタと肩を震わせながら俺に懇願をする偽者。

「お前は俺の名前で覚えてられないくらいの悪事を働いたわけだ。その中には今のお前みたいに助けを求めた奴もいただろう？……お前はその人を助けたか？」

うづくまる偽者に微笑みかけて左腕を掴む。そして左肩ゆ跨ぐように背中に座り腕を捻りながら思いつきり引っ張った。肩が動作範囲の限界を超え、鈍い音になった所で手を離す。

「……………っ！」

偽者の口から声にならない悲鳴が上がったように見える。声を出さずに口を大きく開けて痛みに苦しんでいる。

「さて、足二本で腕一本じゃバランス悪いからな。まあ、俺の名前で散々好き勝手やったんだろうからな。軽いもんだろ？」

嫌がる偽者の腕を足の甲に乗せてから俺は右足で肘をおもいつきり踏んだ。

「ぎゃあああああああゝゝゝ！」

私と桜が外で二人を待っていると中からそんな悲鳴が聞こえてきた。

「幸、これさっきも聞こえたよね？」

「聞こえた。」

今聞こえた悲鳴を含めて全部で三回聞こえた。

「大丈夫かな？」

さっきから色々あり過ぎて桜は不安になっていた。

確かに窓から人が落ちて来たり、窓から人が飛んで来たり。そして悲鳴が聞こえたんだから不安になると思う。

「わからない。だから信じる。」

桂木さんの強さは桜との勝負でみた。そしてその桂木さんと一緒にいた赤井さん。あの人も強かった。

なによりも本物は偽物には負けない。私はそう信じてる。

「あっ！幸！」

桜が大きな声を上げて入り口を指差した。

入り口から出てくる二つの人影が見えた。人影がこちらに近付いてくるにつれてそれが誰なのかわかるようになってきた。

現れたのは男の人と女の人が一人。女の人が男の人の脇腹を肘でつきながら歩いてた。

「なにやられてんだよ。情けねえな。」

「ぐっ。やめろ真。マジで痛いんだって。」

「あんな連中にやられるヤツの言う事なんか聞こえないな。」

「ちげーよ。外に出たらいきなり蹴られたんだよ。なんなら聞いてみりゃいいだろ。」

…赤井さんはやっぱり脇腹が痛いみたい。桜に蹴られたからかな？
一方の桂木さんも怪我してるみたい。綺麗な金髪なのに前髪あたりが赤くなってる。

「真〜！」

桜が桂木さんに向かって手を振ってる。

「お〜。やっぱ桜か。」

桂木さんはそれに答えるように手を上げてきた。

「この子だ、この子。俺の脇腹にダメージを与えたの！」

「って事らしいんだけど…。桜？」

「いや、だって、来たら幸と男が居たから攫った仲間だと思って…。」

ワタワタと慌ててしどろもどろに説明してる。確かにそこだけ見たらそう見えるわね。

「つまりはコイツがそんな風に見えたのが悪いって事だな。」

「マジかよ…。」

どうやら不審だったで落ち着いたみたい。ちよつと可哀想かも。

「って真！頭どうしたのよ！」

「頭？ああ…。転んだ。」

「はあ…？」

「クックック。」

「え？」

私と桜は当然のように疑問の声をあげた。どう転んだら頭から血がでるくらいの怪我ができるのだろう。

「普通転んでそんな風になる？」

「ならないかもな。それでも転んだんだ。」

桂木さんは意味ありげに私を見た。…そういう事ね。

「『転んだ』にしておけばいいの？」

「しておくも何も転んだんだって。」

どうやらそういう事みたい。学校ではそう通すつもりみたい。

「さて、こんな所で話しててもしょうがないな。そろそろ帰るか。」

確かに。私としては早くこんな忌々しい所から離れたい。

「そこで一つ問題があるんだけどよ。」

「ん？どうした、嵐？」

「道が全然わからん。別れたらすぐに迷子になる自信があるぞ。」

そんな事に自信を持たないでいいと思う。

「しゃ～ねえ～な。俺が駅まで連れてってやるよ。」

そういつつ桂木さんは赤井さんの脇腹をグーでぶった。………ひどっ。

「桜は一文字さんを送ってくれ。」

「駅までならわた…」

「ダメだ。コイツと二人つきりになったら何するかわからないからな。」

私の意見は被せ気味に却下されてしまった。

「おい！俺がなんかすると思うか？」

「そういうなら今までのお前の行動を思い出してみろ。……思い出したか？さあどうだった？」

「愛があれば！」

「ねえよ！」

「グボパァ！」

桂木さんのハイキックが的確に赤井さんのアゴをとらえた。……えっ？今のがツツコミ？

「よし、アイツが吹っ飛んでる今がチャンスだ！二人共、行け！」

チャンスかどうかはわからないけど区切りがいいのは確かだと思うけど……帰る前に……

「桂木さん。どうなったの？」

「うん？ああ、とっても後悔してた。そんで慌てたもんだから『転んで両手足を骨折した』みたいだ。」

「転んで？」

「ああ。人間どこで怪我するかわからないもんだな。」

「そうね。」

私と桂木さんはお互いに小さく笑った。この感じだと何を聞いてもごまかす気だと思う。

「ほら、そんな事より早く帰れ。アイツが立ち上がるぞ！」

私の肩に手を置いた桂木さんは私を反転させて背中を軽く押した。

「うん。じゃあ。」

「おう。また学校でな！」

手を軽く振ると桂木さんも手を振ってきた。

こうして私と桜は忌々しい所離れ家路についた。

離れ際に後ろから「女の子がいねえ！」とか「うるせえ！眠らすぞ！」とか物騒なやりとりが聞こえたのは気のせいだと思いたい。

これは誰？（前書き）

今回は早く更新できたかな？

次話も早めに上げたいな。楽しみにしてる人に申し訳ないし。
（い
るのかはわからないけど）

後、感想とか頂けるとモチベーションがグンッとあがります。

これは誰？

ピピピピッピピピッピピピッ

もぞもぞ…ごそごそ…カチ

もぞもぞ…スー…スー…

ピピピッピピピッピピピッピピピッ

もぞもぞ…カチ。

ガバッ

「…朝か。」

くそ…あの馬鹿がギリギリまで粘るもんだから全然眠れなかった…。

ヤバイ…眠い……クウ…スー…スー

って寝るな俺！ここで誘惑に負けたら昼まで起きなさそうな感じだぞ。

よし、眠気覚ましにシャワー浴びつか。時間の余裕はあるし。

着替えとタオルと…よし、じゃあ行くか。

シャーーーーー…

「にゃぎゃ~~~~~!」

痛い痛い痛い! 頭がつ! ヤバいメツチャ染みる!

脱出っ! とう!

は〜…は〜…は〜…。

死ぬかと思った…。頭の事すっかり忘れてた。

と、とりあえず水分を拭いて…っと。

一応薬塗って、ガーゼで包帯だな。…よしっ。

しかし予想外の事で目が覚めたな。丁度いいっちゃ〜丁度いいけど…。

さて、それじゃあ行くかな…。

冷蔵庫の上に積まれたブロック状の栄養食品を開けて一つくわえる。

そのまま食べながら制服に着替えるともう一つを口にくわえて鞆をもちドアを開けた。

「おはよう。」

「あ、真。いいタイミング。」

ブッ!

ボタン…。

「ちょっ！なんか飛んできた！」

「きたない。」

「真。何ドア閉めてんのよ！開けなさいよ！」

ドンドンドン…

くそ、あまりにビックリして食ってたの吹き出しちゃったじゃねえか！

とりあえずまた一つくわえて…半端の一つはポケットにでも入れとくか。

ドンドン！ガンガンガン！ドコツドコツ！

っておい！明らかにノックじゃねえ音がしてんぞ！

「開けるから叩くな！」

ガチャ…

…なんで桜は肩で息してんだよ。激しくノックし過ぎだろ。

「こんな早くからなんの用だ？ドアを壊しに来たんなら帰れ。」

ちなみに今の時間は俺がいつも出るより20分は早い。

「別に壊す気はないわよ。真が閉めるから悪いんじゃない。」

「それに私は何もしてない。」

うん、一文字さん。そういう事は握ってるバットを隠してから言う
といいと思うぞ。

「まあいいや。んで何の用事で来たんだ？」

「会長が呼んでる。」

はあ？こんな朝早くにかよ？

「一体何の用なんだ？」

「多分だけど幸の事だと思うわよ。」

まあ、そうじゃないかと思ってたけど…。

「んでわざわざ呼ぶために一文字さんも寮に来たのか？」

「私は元からここに住んでる。」

おう、そりゃあ知らなかったぜ。だったら嵐だけ置いて俺も一緒に
帰ってくりゃよかった。

「んで、真。準備が出来てるなら行きたいんだけど？」

「別にいいぜ。行くとするか。」

さて、本当なら早く行ってちょっと寝ようとしたんだけど…いいか。どっちにしろ暇は潰れるしな。

んで何事も無く生徒会室まで来たんだけど…

いつ来ても豪華な扉だよな…。

コンコン…

「一文字です。」

「水無月です。桂木さんを拉致…拉致して来ました。」

おい。言い直した意味あったのか？

「どうぞ入って下さい。」

中からは会長さんの声が聞こえた。もう居るって事は俺なんかより早く起きたんだろうな。

「」「失礼します。」「」

俺達は声を揃えて挨拶をして扉を開けて中に入った。

「水無月さん、一文字さん。ご苦勞様です。桂木さん、朝早くからお呼びだてしてしまい申し訳ございません。」

「別に構わないです。ただ後で部屋のドアを直してもらいたいだけなんです。」

俺の言葉に会長さんは桜と一文字さんを見た。

「：わかりました。手配しておきます。費用は水無月さんと一文字さんに払って頂きます。」

二人から「げっ!」とか「ヒドい。」とか聞こえたけど俺は気にしない。だって俺は悪くないし。

「立ち話もなんですからおかけ下さい。」

促されるまま近くの席に腰掛ける。

「桂木さん。おはようございます。」

「あ、甲野さん。おはよ。」

座るとほぼ同時に甲野さんがカップを俺の前に置いた。

中身は黒い液体、コーヒード。これで中身がめんつゆとかだったらビックリだけどな。

「しかしアレだね。真も専用のカップを置いた方がいいかもね。」

「確かに。」

同意しないでもらいたいな。俺は本来は生徒会室に呼ばれる事の無い生活をしたんだ。

「その件に関しては検討しましょう。：桂木さん、飲みながらも構いませんでお話を伺いたいのですが。」

「いいッスよ。一文字さんの事の話でいいんですか？」

「ええ。夜に一文字さんから連絡を頂いたのですが：。」

さて、どんな風に一文字さんが話してどんな事を聞かれるのやら。

「まずこちらを見て頂きたいのですが：。甲野さん、照明を：。」

会長さんがそう言うのと電気が消えて室内は暗くなった。

「こちらです。」

スクリーンにプロジェクターからの映像が映された。

映ってるのは二人の男。これはまた随分と懐かしいな。

「まず、水無月さんと一文字さん。この右側に映ってる人に見覚えはありますよね？」

「「はい：。」」

そりゃ見覚えはあるだろ。桜に関しては脇腹に蹴りをぶち込んでるしな。

「桂木さん。アナタはこの人に見覚えありますか？」

「そりゃあな。長い付き合いのヤツだしな。まあ、忘れたいとか関係を切りたいたいと思った事は数知れないけど。」

アイツが馬鹿な事するたびに考えた事だな。俺だけじゃなくて巴もそう考えてただろうな。

「では次に、お二人は左側の人に見覚えは？」

「無い。」

「昨日のって事なら無いわ。」

なんか桜の言い方がひっかかるな。会長さんもみたいけど。

「桂木さん。アナタは左側の人に見覚えは？」

「そうだな。半年くらい前なら結構見てたな。最近は見えないけど。」

「そうですか。では…。」

うん、ある事がわかった。回りくど過ぎだ。

「会長。遠回しに聞くのはやめよう？会長が…ってより4人が聞きたいのは『それが誰か？』って事じゃないのか？」

「はい、そうです。聞いてもよろしいですか？」

「構わない。左側に映ってんのは『桂木 真』だ。まあわかりやすく言えば俺だな。」

•
•
•
•
•
•
○

4人は何も喋らずに固まった。まあ、無理はないと思う。俺だってこんな話をされたら同じ反応をすると思うしな。

さて、誰が一番初めに復活するかな？俺はそんな事を考えながらコーヒーを飲んだ。…うん、うまい。

視線

結局、4人は固まったまま予鈴が鳴ったからその場はお開きになった。生徒会室をでる時に

「…桂木さん。お昼休みにお時間を頂いてもよろしいですか？」

なんて事を会長さんが言って来た。返事として

「昼休みよりも放課後の方がいいです。その方が時間に追われないし。」

って言ったら会長さんはあっさり納得した様で放課後に再度集まる事になった。

んで今は教室に向かって桜と歩いてんだけど…

「桜。あんまりジロジロ見るな。なんか怖いから。」

隣にいる桜がビームがでそうな目で穴が開きそうなほど見てくる。

「うん。」

了解と取れる返事をするなら見るのを止めろ。

歩きながら俺をガン見する桜。それでそんな桜を見るために集まっている他の人達。…予鈴はもうなってんだから教室に行けばいいのに。

ってより桜と歩いてるとホント人に囲まれるよな。しかもヒソヒソ

と小声で話してるし。俺をチラチラみながら：

多分『桜にまわりつく虫』みたいな感じに思われてんだろうな。
まったく困ったもんだ。

「あ、桜。前…。」

「うん。…み…っ！」

「壁が…って遅かったか。」

華麗に壁にぶつかった桜。ほら、言わんこっちゃない。ちよっと前を見て歩かないからだ。

「ほら、大丈夫か？」

俺が手を出すと桜はそれを握って立ち上がった。

「ボ…っとしてると危ないぞ。」

「わかってるけど…。頭がこんがらがってるのよ。」

まあ無理もないだろう。俺でも混乱するような事態だからな。

「詳しくは放課後な。とりあえず教室に入るぞ。」

「もう教室の前だったんだ…。」

やっぱり気付いてなかったのか。まあボ…っとしてたから無理もないわな。

「あ、真に桜。ごきげんよ…。」

教室に入ると椿がいた。しかも挨拶の途中で固まった。

「真？頭いかがなされたの？」

椿は頭に巻いてる包帯に目がいったみたいだ。ただこの発言は聞きようによつては『頭がバカになってる。』みたいな感じに聞こえるな。

「いえ、昨日転んでしましまして…。」

さすがに教室でいつもみたいに話す訳にはいかなからな。背筋に冷たいものを感じるような話し方にしないとな。

「転びましたの？真っぽくない失敗ですわね。」

「自分でもそう思います。今後は気をつけますわ」。

「そうした方がいいわね。」

椿は特に疑ってないみたいだな。単純なのか純真なのか…。

「あ、そろそろ時間ですわね。それではまた後で。」

ドリルに…椿に言われて時計を見ると確かにそろそろ先生がくる時間だな。

「桜。私達も席につきましょう。」

「あ、そうね。」

さっきから俺の事を上から下まで見てる桜に声をかける。

ってかそんな見ないでもらいたいな。あんたの取り巻きからの視線が非常に辛いから。

なんて考えてるうちに本鈴が鳴る。

ヤバイヤバイ。取りあえず座って置かないとな。

俺と桜が椅子に座ると同時に

「みんな。ごっきげんよう。」

底無し脳天気な声を上げながら小学生が教室に入ってきた。

『ごっきげんよう。』

教室の生徒達がその挨拶にたいして返事をする。もちろん俺は返してないけど。

「あつれ〜？桂木さん？頭にほ〜たい巻いてど〜したの〜？」

「あ、ちょっと転んでしまって…。」

「転んだの〜？桂木さんもドジだね〜。もっとしつかりしないとダメだよ〜？」

ぐはあ！ま、まさか姫ちゃんにそんな注意を受けるなんて…。く、屈辱だ。

「今日は〴〵連絡することないから〴〵次の授業の準備して待っててね〴〵。」

姫ちゃんはそういい残すと入って来たドアに向かい歩き出して…

転んだ。

・・・・・。

全員の視線が姫ちゃんに注がれる。今さっき転んだって言った人間を注意したばかりだから無理もないだろう。

こんな人にドジだと言われた俺はどうしたらいいんだろうか？

「…ひつく…。」

あ、こりゃあ泣くか？

誰もが姫ちゃんの動向に注意してるなか姫ちゃんが立ち上がった。

そして姫ちゃんはいきなり走り出して教室から出て行った。

教室の全員の視線が閉じられたらドアに集中したのは言うまでもないだろう。

そしてドアの向こうから泣き声と走る音が聞こえたのは気のせいじゃないんだろうな…

衝突（前書き）

ああ…なんでこんなはなしを…

衝突

さて、桜からの視線を浴びまくった授業がめでたく終わった訳だ。

まあ、なんて言うか首筋がすっげームズムズした。後ろから常に視線感じてたからな。

これから大説明会か。…まあ、なんとかなるかな？一応手は打ったし。

「真。行こう。」

後ろから肩に手を置かれる。これが誰かは考えなくてもわかるな。

「はいよ。行きますか。」

声をかけてきた桜に連れられるように席を立つ。

「あら、真。生徒会に呼ばれてますの？」

「ああ。ちょっとした野暮用でな。」

「そうなんですの。それにしても真はよく生徒会に呼ばれてましてね。」

むぐう…。よく見てるな。確かに呼ばれる回数が多いけどさ。

「俺はホントは生徒会とかに呼ばれる事の無い平和な生活がいいんだけどな。」

「あら、そうでしたの？」

「そうなの。地味いに平和に目立たないで生活したいわけ。」

こら、ドリル：じゃなくて椿！なんでそこで目を逸らす！なんだ、俺には平和な生活を送る権利が無いってのか！？

「真。それは無理よ。」

桜！お前までなにを言うんだ！

「二人は何を根拠にそんな事を言うんだ？」

二人はお互いの顔を見た後に今度は俺の顔を見て再びお互いの顔を見た。

「何でと言われましても…。」

「ねえ…。」

二人だけで納得してんじゃねえよ！全くわからないな。

「つたく…。桜、行くぞ。」

なんだか俺のわからない事を話してる事多いよな。この二人もそうだし、一文字さんとかあと桜のお姉さんとかさ…。

おそらくハブられるのがわかったから俺は桜を置いて先に教室を出る事にした。

ドンッ

「キャッ！」

あ、ヤベッ！

廊下に出たら中を見てた人にぶつかった。

ぶつかって転びそうな人を俺は慌てて支えた。その結果その人…多分桜か椿のファンの生徒は転ばずに支えられた。

ただ支える為に腰に手を回したのはまずったかもしれない。俺嫌われてるからな…。

「ごめんなさい。怪我は無い？」

目の前の女生徒は俺の顔を一瞬見た後下を向いてしまった。

こりゃ顔を見たくないってやつか…。参ったな…。

「どこか怪我でもなさいましたか？」

いつまで経ってもこの口調はなれないな。自分でいいながら背筋に冷たいものが走って齒が浮きそうだけ。

「はっ、はい！大丈夫です！すみませんでした！」

やっと俺の言葉に反応した女の子は俺に向かって頭を下げると走って行ってしまった。

うん：顔が真っ赤だったな。そんなに怒りたくなるほど嫌だったか。会話を自分から切ってどっか行っちゃうくらいだし…。

「あら。随分とわかりやすい反応してたわね。」

いつの間に來たのか桜と椿が俺の後ろにいた。

「そうだ…そうですね。ここまで嫌われてるとは…。」

やっぱり大人気の桜や椿の近くにいるのが悪いのかな？それとも得体の知れないやつが生徒会室に出入りしてるからな？

「ま、真。それ本気で言ってますの？」

「本気も何も目も合わせられなかったですし、顔を真っ赤にして怒ってましたし。」

これを嫌われてるって以外にどう解釈しろってんだ？

「（桜、これは重症なのではございませんこと？）」

「（うん…。まさか今のをそうとるとは思わなかった。）」

また二人でなんか話始めたぞ。ひょっとしてファンの子を傷付けたからその恨み返しの相談じゃないだろうな…。

これは何かされないうちに逃げとくべきかな。

「桜、先に行きますよ。椿、また明日。」

という訳でとっとと退散しよう。なによりも普通に話ができる状況に行きたい。寒気がする上に舌を噛みそうだ。

「あ、真。待ちなさいよ。椿、待たね。」

「ええ、真に桜。また明日。ごきげんよう。」

俺を追って来る桜と帰る為に反対に向かった椿。

さて、生徒会室に行きますか。

――

一人の女生徒が廊下を進んでいた。その後ろには数名の女生徒が後を追うように歩いていた。

やがて先を歩いていた女生徒は立ち止まり壁に手をついた。

後を追っていた女生徒も追いつき立ち止まった。

「ちょっと、大丈夫？」

「いきなり行くから驚いたわよ。」

「で、どうだったのよ。真様の腕の中は。」

追っていた女生徒が口々に質問を投げかける。質問されている女生徒は頬…いや、耳まで真っ赤にして目を輝かせていた。

「ま、真様は…暖かくて…柔らかくて…いい香りがして…はう…。」

ブシャーーーーーー！

廊下に赤い花が咲いた瞬間だった。

「え、衛生兵！衛生兵を！」

「違うわ！110番よ！」

「それも違うわ！まず保健室よ！」

鼻から血を出しながら恍惚の表情を浮かべる生徒とその周りで慌てる生徒。そして何事かと見に来る生徒。

廊下は騒然としていた…

証明

「さてと、それじゃあ朝の続きといきますか。」

生徒会室には朝と同じメンバーが揃っている。ちなみに俺と桜が来たらもうみんな居た。

「ええ。お願いいたします。」

みんな俺を凝視してる。まあ無理も無いよな。

「まあ続きっていつでももう結論は言っただけだな。」

だからここでするのは証明だな。まあ、なんとかなるかな。

「そうでしたね。あの写真に写っていたのは間違い無く桂木さんなのですね。」

「そうです。そういえば会長さんはなんで昨日の話からあの写真を出したんですか？」

それが疑問だったんだよな。昨日の話といまいち繋がらないんだよな。

「それは昨日の夜、一文字さんの話からある呼び名が出てきたからです。」

「呼び名ってのはアレか。」

「おそらく桂木さんが思っているものです。偽物を本物が…とおっしゃっていたので。」

ふむふむ。なるほど。

「それで調べて出てきたのがさっきの俺と嵐が写ってる写真だったんですね。」

「そうです。私だけでは理解しきれなかったので桂木さんにお見せしたのですが。」

「まあ普通は理解できないですね。でもあれに写ってたのは間違い無く俺ですよ。」

「ちょっと待って！」

大きな声を出して立ち上がったのは桜。どうでもいいけど机を叩く。コーヒーがこぼれるだろ。

「ズバリ聞くけど、真は男なの？女なの？」

「体は間違い無く女だな。思考に関しては変わってないから男だな。」

「マジで…？」

「困る。」

「二人は何にそんな反応してるのですか？」

会長さんの言葉に二人は一瞬顔を歪めてから口を開いた。

「私のスカートの中見た。」

「あれは一文字さんが見せてたんだろ！俺は見ないようにしてたし！」

あんなときは見ないように目を閉じてたじゃないか。

ってそんな事考えてたら思い出しちったじゃねえか！

「幸なんていいわよ！私なんてベットに入ったのよ！」

「それも俺は悪くねえ！俺の寝てる所に桜が入って来たんだろ！」

「そんなの真が気持ち良さそうに寝てるのが悪いのよ！」

ヒドッ！逆ギレかよ！

「桜。あなた何やってるの？」

「うるさいわよ、幸！」

うわゝ。こりゃあ止まりそうにないな…。

「水無月さん、静かにして下さい。」

そんな騒ぐ桜を止めたのは会長だった。

「今は桂木さんの話を聞く場です。あなたの話はまた後で聞きます。」

いいですね。」

「は…、はい。」

こんときの会長さんは凄い迫力だった。俺ですらビビったくらいだ。

「さて、桂木さん…。」

場が静まってから会長さんが再び口を開いた時だった。

『桂木さ〜ん。誰か来たよ〜。』

そんな放送が生徒会室内、いや、校内に響き渡った。

「今のは。」

「姫ちゃんよね…。」

『え〜、やり直し〜？ちゃんとできてたよ〜。あ〜！マイク入ってるよ〜！えっと〜『真！とにかくこっちに来なさい！この小学生じや話にならないから！』ふえ〜ん…小学生じゃないも〜ん！』

・・・。

か、カオスな校内放送だ…。

「か、会長さん。そういう事みたいなんでちよつと行って来ます。」

全員が言葉も無く呆然としてる中、俺は口を開いた。

「あ、はい。ただ行かずとも内線で連絡出来ますよ？」

「内線…ですか？」

なんでそんなもんまで付いてんだ？うちの学校にはそんなもんないぞ。

「ええ。先程の放送はおそらく職員室からですから。」

「真、内線はそこよ。」

桜が指差した方を見ると確かに電話っぽいものがあるな。

「あ、じゃあお借りします。」

えっと…職員室の番号は…あ、あった。

番号を押すと呼び出し音の後に声が聞こえた。

『はーい、もしもし。』

出たのは姫ちゃんだ。頼むから内線にもしもしで出ないで欲しい。

「あ、桂木です。」

『あ、桂木さーん。あのねー『真。私を呼び出すなんて随分偉くなつたのね。』

あ、この声の感じはヤバいな。怒ってるぞ。

「ゆ、ゆーちゃん。悪いとは思ってたけど緊急事態なんだ。」

『あんたの都合なんて私は知らないわよ。覚悟しなさいよ。』

や、ヤバいって！これマジでヤバいって！

俺は受話器を手で抑えて後ろを向いた。

「会長さん、この校内で話が出来る喫煙場所ってありますか？」

「それなら応接室ですね。職員室と校長室の間です。」

職員室の隣か。それならまだなんとかなるな。

「ゆーちゃん、詳しい話をするからその隣の応接室で待っていてくれ。」

『はあ？なんで移動しなきゃ行けないのよ。』

「そこは煙草吸えるらしい。」

『…5、いえ10分以内に来なさいよ。』

それだけ言う toward 向こうから電話を切った。

「えー、と言う訳ですぐに移動したいんですけど…。」

俺も受話器を戻して後ろを向いてみんなに提案をする。

「すぐにですか？」

「何で？」

「俺の事を知ってる人が来たんです。んですぐに移動しないと俺がヒドい目に遭わされます。」

「ヒドい目ですか？」

疑問たっぷりの表情の会長さん。うん、わからないよな。

「ヒドい目です。多分3日は学校休むくらいの。」

これは最低でもだからな。下手をするとこの学校にいれる期間をずっとベットで過ごす事になるかも知れない。

俺の必死さが伝わったんだろう。会長さんが席を立った。

「それは大変ですね。では今すぐに向かいましょう。」

会長さんがそういうとみんなが席を立った。助かる。これで最悪な状況は免れそうだ。

俺達は生徒会室を出てお嬢様らしく廊下を走る事なく許される限り早足で応接室を目指した。

走りてー！

出来るだけ急いでようやく応接室についた。電話から8分が経過し

た所だ。なんとか間に合ったぞ。

しかし、応接室のドアが木製装飾付きの両開きってのはどういう事だ？豪華すぎんだろ。

さて…。俺は大きく深呼吸をしてドアを開いた。

ドアを開けてまず目に入ったのは木刀を振り上げてるゆうちゃん。
…っておい！

「無刀取り！」

俺が両手を上に上ると突如、脇腹に痛みが！

「ぐっ！いってええええ〜！」

くっそ〜…面から胴に切り返してきやがった。アバラが折れたらどうするんだよ…。

「ま、まこっちゃん…大丈夫？」

「巴、居たならゆうちゃんを止めてくれ。」

「ムリムリ！そんな事したら優さんに殺されるよ。」

それは十分にわかってるけどそれでも止めて欲しかった…。

「そもそも俺はなんで殴られたんだ…？」

「来るのが遅いのよ。」

「時間内！時間内！ちゃんと10分以内に来たから！」

「うるさいわね。私を待たせてるだけで極刑よ。」

うわぁ…やっぱり暴君じゃねえか。

「それ以上に俺が先頭じゃなかったらどうするつもりだったんだよ…。」

「失礼ね。ちゃんと確認してから行ってるわよ。」

おいおい…確認してあの速さかよ…。相変わらず恐ろしいお方だな。

「桂木さん、そちらの方は？」

あ、忘れてた。会長さん達は会った事ないもんな。会った事あるのは桜だけだな。

「えっと俺を殴ったのは桂木 優。俺の担任でなおかつ姉。」

「桂木 優よ。いつも真がお世話になってます。」

ゆーちゃん、今更丁寧に挨拶してつくろっても無駄だぞ。

「んで、こっちが幼なじみの天城 巴。…って巴、お前はなんで来たんだ？」

連絡を取ったのはゆーちゃんだけだったはずなんだけどな。

「今更？まこっちゃんヒドい。優さんが話してるの聞いて来たの。あ、天城 巴です。よろしくお願いします。」

「正確には聞いてじゃなくて教えられてでしょ。榊原さんから。まったく…、あの子のアレには困ったものね。」

なるほど…。純のいつものヤツで俺がゆうちゃんに連絡したのを知ったのか。

「んで、こちらが宝華学園の生徒会長の冬野さん。」

「生徒会長の冬野 聖です。本日はようこそいらっしやいました。」

会長さんが招いた訳じゃないのに丁寧だよな。真面目だな。

「それでこっちが水無月さん。」

「よろしく。」

軽く頭を下げた水無月さん。まあ、いつも通りだな。ここで愛想がよくなったらビビるしな。

「そしてこちらが甲野さん。」

「よろしくお願いします。」

うん。実に丁寧だ。うちの姉にわざわざ頭下げなくていいのに。

「桜は一回会ってるからいいよな。」

「大丈夫よ。もの覚えはいいから。」

「私だって人の名前と顔を覚えるのは得意なのよ。」

知ってるよ。その変わり勉強の内容を全然覚えられないってのも知ってるよ。

「それで？なんで呼ばれたの？」

煙草に火を付けて一口吸ったゆ〜ちゃんが俺を見る。：いや、睨む。

「いや〜…実は元男ってバレちゃったんだよ。」

「はあ？アンタ何やってんのよ。ここの生徒に手を出したの？」

「まままままま、まこっちゃん！そそそそそ、それはダメだよ
！」

「出してねえよ！それと巴、落ち着け！」

この人を教師にしたの誰だよ！姫ちゃん以上に不適格だろ！

「ホントに出してないの？」

「出してねえよ！」

「なあ〜んだ。つまらないの。」

「つまり、つまらないの問題じゃないだろ！」

俺はなんで肩で息をしてんだ？それ以上に…この人を呼んだのは正解だったのか？

「まあいいわ。それで、その状況で私をわざわざ呼びつけた理由は？」

「ああ。写真の人物と俺が同一人物だって証言してほしくて。」

そう、これが本来の用件なんだよ。

「写真？どれよ、見せてみなさい。」

「はい。こちらです。」

会長さんは机の上にさっきの写真を置いた。

「真と赤井君ね。」

「まこっちゃんと馬鹿嵐だ。」

見た瞬間にゆくちゃんと巴は反応した。

「しかし珍しい写真ね。二人がちゃんと写ってるなんて。」

「そうですね。だいたいいつもまこっちゃんの所に嵐が強引にフレームインしてますからね。」

そうなんだよ。あいつは目立つのが好きだから隙あらば入ってくるんだよな。

「これが真だって証明するために私は呼ばれたの？」

「Yes. My sirter.」

ぐおおおおお...

頭蓋が軋む。指がめり込む。た、頼むから静かにアイアンクローを極めないでくれ。しかもこんな事しながら平然と煙草を吸わないでくれ。

「証明すればいいの？」

「は、はい。そうでございます、お姉さま。」

か、解放された。大丈夫か、俺。穴は空いてないか？うん、穴は空いてないし血もでてないな。

「それにしても証明ねえ。どうしたものやら。」

そこは確かに難問だろうな。

「えっと、桂木先生は真が女に変わってどう思いました？」

「たしか、最初に見たのは家の中だったわね。私の記憶ではジャーマンで投げた気がするわ。」

「「何故!？」」

おお。全員がキレイにハモった。それだけ聞いてれば疑問しか浮かばないよな。

「あれ？でもまこっちゃんあの日の朝は怪我とかしてなかったよね？」

「ああ。舞がクッションになったからな。」

あいつもよく無事だったもんだな。

「舞ちゃんが身をていしてかばったって事。」

「んにゃ、ゆうちゃんが扉蹴りやぶってそれに舞が巻き込まれてピクピクしてた上に投げられた。」

「うわあ…。」

その可哀想って目を俺に向けるな。悪いのはゆうちゃんなんだから。

「まあ、とりあえずどうやって証明したらいいか判らないけどコレは私の弟で桂木家の長男、現在は次女になった真よ。」

「それは違うだろ！俺は戸籍まで変えた覚えは無いぞ！」

「あれ？そうだったけ？確か父さんが…。」

あの馬鹿親父…。シメてやる…。

「よし、取りあえず殺りに行こう。馬鹿親父は今どこにいる。」

「知らないわよ。またどっか違う国に行ってるんじゃないの？」

チツ…。帰って来たらボッコボコにしてやる。クックック：

「真、怖いわよ…。」

おっと思わず顔に出ちまったか。

「まあ、医学的な証明が欲しいならDNA鑑定のを知らせる？ 当てはあるし。」

ゆうちゃんの言う当てってのは純なんだろうな。普通なら有り得ないけど純なら持ってそうだなあ…。

「いえ、そこまでして頂かなくても大丈夫です。桂木先生が嘘をおっしゃってるとは思えませんので。」

「ありがと。それで今後は真はどうするの？」

「私としてはこの後も期間中は引き続き通って頂きたいと思ってます。」

へえ…それは予想外だな。てっきりあっちに帰れて言われると思ってた。

「それには他の方々にも許可を頂かなければなりません…。」

桜、一文字さん、甲野さんを順に見る会長さん。

「私は構わないわよ。こんな面白い子を帰すの惜しいしね。」

「私も。」

「私입니다。もっと桂木さんと話をしたいですから。」

おお。満場一致だ。いや嬉しい限りだ。

「了解、了解。あなた達がそれでいいなら期間中、真の事を願うするわね。」

「まこっちゃん。頑張つてね。」

まあ取りあえずはこれで丸く収まったのかな？最初は不安だったけどゆーちゃんを呼んでよかったな。

「さて、無事に解決したし帰りますか。もう結構いい時間だしな。」

空はうつすら暗くなって来てる。もう帰らないとヤバイだろう。

「そうね。真、この借りは必ず返してもらおうわよ。」

「ゆーちゃん、そういう事は儲けの何割かを渡してから言ってくれ。それでチャラだろ？」

嵐から写真を売ってるのは聞いてんだ。チャラどころか金貰わないと割に合わないんだ。

「…知ってたの？しょうがないわね。チャラにしてあげるわよ。」

「望みとしては売らないでほしいんだけど…。」

「それは無理よ。いい稼ぎだし。…あ、あなた達も写真買わない？」

安くするわよ？」

こらく！ここでも売る気か！

「写真？私は男の頃の真が欲しいな。」

「おっ、いいわね。話のわかり子はお姉さん好きよ。」

さくらあああ！お前は何を言ってるんだ！

幕間の話（前書き）

なんでこんな事をしたのか…

なんかすいません…

幕間の話

――

霞ヶ崎高校

「大変だ！赤井が第三体育館に閉じこもった！」

「なんだと！それじゃあ女子新体操部が始まらないじゃないか！ふざけるな！」

「お前ら！赤井を引きずり出すぞ！」

「「「おう！」「」」

どうも、巴です。まこちゃんが宝華学園に行って静かになるかと思っただけそんな事は無く今日も騒がしいです。

しかも騒ぎの中心には嵐がいる事が多いです。：困ったものです。

「：また赤井君。」

「あ、純。そうみたいね。」

今教室内には女子生徒しかいないの。冒頭の会話でわかったとは思っただけみんな第三体育館に行っちゃった。

「しかし、うちのクラスの男子達の結束力はすごいわね。」

「：他のクラスも：。」

うん、訂正します。うちの学校の男子達の結束力はすごいわ。

ただ行動の元が女子新体操部っていうのは問題だと思うけど…

「天城さん、榊原さん。また赤井君が奇行に走っているのですけど。」

「あ、会長。ウチのクラスの馬鹿がどうもすいません。」

いつの間にやら会長が私の近くにやって来てた。

こんな事態だから来るだろうとは思ってたけど…。

「おーい、その生徒会長。今は授業中よ。」

そうなの。今はバリバリ授業中。しかも担当は優さん。

「申し訳ありません。あまりに授業が詰まらないので抜けて来てしまいました。それに男子達の大半が居なくなってしまう授業どころでは無いもので。」

あゝ…会長のクラスも第三体育館に行っちゃったんだ。

「うちのクラスも男子が居なくなってる授業どころじゃないし…それじゃあ体育館見に行く?」

教師自らボイコット宣言!?

「馬鹿達にお仕置きしなきゃいけないしね。はあ…またチョーク頼

まないと…。」

優さんのチョーク：凄いよね…。投げたチョークは当たると粉末化するスピードだしダメージは表面だけじゃなくて内部まで来る…。違うわね。内部を突き抜けてダメージが貫通するのよね。

男子達は何人生き残れるんだろう？まあ、私の知った事じゃあないけど。

さてさて、現在は第三体育館前。凄い人でいっぱいです。

「赤井！出てこい！」

「お前が閉じこもってると部活が始まらないんだ！」

「今なら間に合う！出て来い！」

確かな今なら間に合うのよね。授業中だから。

「2年C組の生徒は教室に戻りなさい。従わないとお仕置きするわよ。」

普通の会話の声で呼びかける優さん。…そのボリュームじゃ聞こえないですね？

「10秒以内に戻れば許してあげるわよ。10…9…8…0。」

飛ばした！今確実に数字飛ばしたよ！

優さんの右手が素早く動いた。

「ぎゃ！」

「ごっ！」

「ぐえ！」

「ぐあ！」

体育館を囲む男子達の中から短い叫び声が聞こえたかと思ったら4人の男子がその場に崩れた。

「さて、チョークはまだまだあるわよ。うちのクラスの男子を殺つて…やってもまだまだあまるくらいにね。」

優さん、ヤバいって！その笑顔怖すぎです！

「やべえ！桂木先生だ！」

「逃げろ！保健室…いや、病院送りにさせられるぞ！」

男子達が第三体育館から一気に逃げていく。うん、やっぱり優さんはスゴいや。それはもう色んな意味で。

数分後には残ったのは私と優さんと会長と純の4人だけになった。

「さて、赤井君を説得しましょう。」

こんな状況でも平然と進められる会長はスゴいと思う。

「赤井君、部活動の妨げになります。直ぐに開けて下さい。」

「嵐君。あんたがそんな事してると私の評価にかかわるのよ。とつとと出て来なさい。」

なんだろう、会長と優さんの差は…。そういう事は思っても言っちゃ行けないと思う。

二人の言葉は確実に嵐には聞こえてると思う。でも中からはなんの返事も無かった。

「無視するとはいい度胸ね。とにかくあけなさい！」

ガンッガンッ！

蹴ってる！体育館のドアを思いっきり蹴ってるよ！なんかドアが凹んできてるし！

そんな優さんを止める勇者が唐突に現れた。

「桂木先生、ここは僕に任せて貰えませんか？」

現れたのは生徒会副会長にして苦勞人と噂の神城先輩。

「神城君、開けられるの？」

蹴ってた足を戻して神城先輩を見る優さん。

「任せて下さい。ある言葉を言えば開きますよ。」

ある言葉？『開けゴマ』とかかな？

神城先輩は体育館のドアの前に立ち、ドアを3、4回叩いた。そして…

「私だ。開けて下さい。」

そう嵐に向かって言った。

……い、今がある言葉のかな？まさかそんなんで…

ガラガラガラガラ…

開いた！ドアがあっさりと開いちゃったよ。

「神城先輩……。」

先輩を見た嵐は小刻みに震えたかと思うと座り込んで両手を床に着いた。

「…彼女が欲しいです…。」

「あきらめたらそこで試合終了ですよ。」

神城先輩が嵐の肩にそっと手を置いた。

その後嵐は優さんにフルボツにされた事は言うまでも無いよね。

まさか某バスケット漫画みたいな事をするとは…神城先輩もノリがいい人なんだね。

お茶会？

「お茶会…ですか？」

「はい。お茶会です。」

今は授業の合間の休み時間。俺は次の授業の準備をしていた所だ。

そんな時にやって来たのは会長さん。自分の教室の様に入って来た会長さんはすれ違う子達に挨拶をしながら真っ直ぐ俺の所にやってきた。

そして言った事が『お茶会に出て頂けませんか？』だった。

「なんで私が？」

俺の問いに会長さんは言葉では無くもので答えを示した。俺の前に出されたのは紙の束。え…何々…。

『桂木様が参加出来るお茶会を開いて下さい。』

『桂木様とお茶をのみながらお話をする場を設けて下さい。』

『私達の開くお茶会に桂木様をお呼びしたいのでお願いいたします。』

等々…似たような内容の嘆願書だった。

ってかさあ…呼ぶのくらい自分でやりゃい…じゃんよ。これ

はあれが『アナタのような下衆な人間に私の^{わたくし}のような高貴な者が話かけるだなんてありえませんか！』って事かなあ？嫌われてるな。

「そういえば最近その手の多いわね。」

「これで全部じゃないんですか？」

「これは一部です。生徒会室にはこれの何倍もの嘆願書が届いてます。」

何倍もかよ！資源の無駄遣いだろ！

「なんかいつの間にか生徒会が真の窓口になってるのよね。」

「生徒会だけではありませんわよ。私にも10人単位で来てますわよ。」

ドリルの所にもか。それはそれはご迷惑をおかけします。

「なんでドリ：椿のところにまで？」

「なんて言おうとしたのかは今ではあえて聞かない事にしますわ。私の所に来るのは歓迎会を私が開いたからだとおもいますわ。」

怒っていないように見えるけど口元が若干引きつってるのがバレバレだぜ。まあ俺のせいなんだけど。

「それではますますお茶会を開かないといけませんね。」

うあゝ、めんどくせえゝ…。お茶会ってお嬢様方がお茶飲みながら

ウフフ、アハハ、ハハハンってお話するってアレだろ？

「私なんかが伺ってもご迷惑になるだけじゃないですか？」

歓迎会の時なんか誰も話かけて来なかったんだからな。どうせやつてもああなるのはわかってる事だ。

「桂木さん。この件は生徒会の威厳にかかわる事です。お茶会は開きます。桂木さんには参加して頂きます。」

げっ！この眼はマジだぞ。しかも引く気配もない。

「き、急に言われましても歓迎会の時の服はありませんし…あんな服は苦手なんです。ですから無理かと…」

あんときの服は家に送っちゃったし。まずなによりもスカートがまとわりついて動きにくいから嫌だ。

「だったら普段着でのにすればいいじゃない。」

「そうですわね。それでしたら準備も楽になりますわね。」

「水無月さんにしては名案です。そうしましょう。」

な、なんだ？逃げ道が無くなっていったる気がするぞ…。

「軽い準備でいいなら直ぐにでも準備できますね。」

「人手が必要なら私の方からも人を出しますわ。」

そしてなんだか着々と話が進んで行っていないか？

「あの…私の意見は…。」

「今回は取り入れません。」

今回『は』じゃなくて歓迎会に続き今回『も』なんだけどく！

「会長、場所はどようするの？」

「大ホールが開いてますのでそちらを使います。」

「ジイ、大ホールですわ。人を集めてお茶会の準備をしてちょうだい。」

だから進行が早いって！椿なんか携帯で人呼んでるし！

「会長。立ち入り許可は後で提出致しますわ。」

「そうですね。今は早さを優先しましょう。」

「ポスターできました。」

「…許可します。認印も今押しますので手分けして貼って下さい。」

「はい。わかりました！」

って一文字さん！それに甲野さん！いつの間に來たんだ！

ああ…わかったぞ…。こりゃあもう逃げられないや…。

こうして激動の休憩時間が過ぎて行った…

お茶会準備（前書き）

遅くなつてすいません

お茶会準備

やっぱお嬢様方の力は恐ろしいな。急な話だったのにホールにはしつかりとお茶会の準備ができてんだもんな。

お嬢様方ってよりは凄いのには準備をした人達か。

こりゃお礼言っておかないとな。

「椿。これの準備してくれた人ってどこにいるんだ？」

「今は厨房で休んでいますわ。この後はお茶をいれたりするはずですから。」

「厨房か。ありがとな。」

厨房…厨房…。あ、あのドアだな。ちょっと行ってくるかな。

「真。どこに行くのよ？」

「あ、桜か。ちょっとな。直ぐ戻る。」

桜に返事をしてから厨房だと思われるドアの所に向かう。

コンコン…

「失礼します。」

とりあえずノックをしてからドアを開ける。中ではメイドさんやら

シェフの方々や執事さん達が休んでいた。よし、合ってた。

「あ、桂木様。なにかご用でしょうか？」

近くにいたメイドさんが気付いて声をかけて来た。あ、このメイドさんは…

「確か歓迎会の時に声をかけて頂いた方ですね。」

「はい。覚えて頂いてたんですね。」

「それはもう。あの時は誰からも話しかけられなくて困ってましたから。」

あの時の寂しさだったらなかったな。歓迎会だぜ歓迎会。つまり俺をもてなしつチャホヤ…はいいや。とにかく俺がメインだったはずなのに、みんな遠巻きに見ててさ…ひどいよな…。

「それで桂木様はどうしてこちらに？」

おっとそうだった。危うく忘れる所だったぜ。

「いえ、皆様にお礼を言おうと思って。」

「お礼…ですか？」

お礼…ですけど。なんでそんな不思議そうな顔をしてんだ？

「はい。急な話だったのにこんな立派な会場を作って頂いたのでお礼が言いたくて…。」

メイドさん、メイドさん。どうしてそんなにポカーンとした顔をしてんだ？

「お礼だなんて…仕事ですから。」

まあ、そう言われたら『そうですよね』としか言えないんだけどさ…

「それでも言いたいんです。あんな立派な会場を作って頂いてありがとうございます。」

こうなりゃ向こうがなんか言う前にお礼言っただけで退散した方がいいな。休憩の邪魔になってるかもしれないし。

「あ、いえ…。」

下げてた頭を上げるとメイドさんがポカーンとしてた。

「休憩の邪魔してすいませんでした。じゃあ失礼します。」

とりあえず言いたい事は言ったから行こう。戻らないと何か言われそうだし…

俺は最後に一礼して部屋から出る事にした。

「あの人はなんなんでしょう…。」

閉じられたドアを見つめたまま、私は一人呟いた。

「おい。今の子はなんだったんだ？　なんか気に食わない所でもあったのか？」

そんな私に声をかけて来たのは料理長。今日の料理を受け持った人。

「参ったな…。料理にだったら急がないと間に合わなくなるな…。」

料理長は頭に巻いてたバンダナを外して頭をかいた。

「いえ、そうじゃありません…。」

私はようやく我に帰って後ろを向いた…。って！　みんなこっち見てるじゃないですか！

「あら、料理じゃないなら飾りかしら？」

って今度はメイド長ですか！

「いえいえ！　それも違います！」

飾りだったら私たちが悪いんだから後が怖いです…。

「じゃあなんなんだ？」

「じゃあなんなんですの？」

お二人とも怖いのです！　いえ、お二人だけではなく周りの皆さん全員

が怖いです！

「桂木様はお礼を言いに来られたんです！」

「そんな冗談はいいんだよ。早く言わないと準備が間に合わなくなるだろ。」

信じてもらえてないですよ！確かに信じがたい事ですけど…。

「本当なんですよ。」

料理長とメイド長の疑惑の眼差しが止まりません…。

「うーん…。そこまで言うって事は今の子は本当にお礼を言いに来たのか。」

「そうみたいです。俄に信じがたいですけど…。」

まあ確かにお二人の言うことも最もです。お嬢様達にとって私達はいて当然。働いてて普通の存在ですからね。

「そんなお嬢様が居るのは驚いたけどせっかくお礼言われたんだ。その気持ちを裏切らないようにしないと。」

「そうですね。」

…準備も佳境に入った中料理長とメイド長がメラメラと燃えていますよ。

ってより私も燃えてきました！

「よしっ！お前ら！もうひとふんばりいくぞ！」

「「おお！」」

「なんだか裏が盛り上がってますわね。」

「そうね。真、あんたさっきあっち行ってたけどなんかあったの？」

確かにさっき俺が入ってた所から異常な熱気を感じるけど…

「いや、なにもなかったぞ？椿の所の人達がしっかりしてる人達なだけじゃないか？」

「当然でしてよ。私の家の使用人ですから全てにおいて一流でしてよ。」

そんな事をいしつつ笑い出した。しかも『オッホッホッホッ！』って！ドリルヘアーの高飛車笑いだぜ？期待を裏切らないよな。

「はいはい。お家自慢はいいから。」

これをサラッと流せるのはすごいよな。俺なんて感動と笑いをこらえるのに泣きそうなのに。

「それで会長。席はどうするの？」

「そうですね。急なお茶会ですからギリギリまで人数もわからないでしょうから自由でいいのではないですか？」

確かに人数がわからない以上自由がいいんだろうな。…決して面倒だから適当じゃないと思う…思いたい…だったらいいな…。

なにはともあれ無事にお茶会は開けそうだな。果たして何人来るんだろう…。

まあ、生徒会と椿がいるから結構集まるんだろうけど…

お茶会

「本日は急なお招きにも関わらず御参加いただきありがとうございます。皆様、存分にお楽しみ下さい。」

会長のそんな挨拶と共にお茶会は始まった。

いやゝそれにしても集まったな。ホール内が人で埋まってるもんな。やっぱ生徒会と椿の名前があるとすごいな。

「それで真。あんたはそんな所で何をやってるのよ。」

そんな所つてのは椿の所の人達がいた部屋。いや、現在進行形でいる部屋だな。

「腹減っちゃって…。」

あんな場所じゃ思いっきり食べそうにないからな。こっちに来て

「お腹減っちゃったんですけど…。」

って言ったらあった材料で作ってくれたからありがたく頂いてるわけで…

それにしても邪魔になるの覚悟で入ったのにまさかあんなに歓迎されるとは…。

「状況はわかったんだけど…会長と幸が探してるわよ。」

おう…それはマズいな。形だけとは言え俺居ないとマズいだろうし…

「了解。すぐ行く。」

皿に残ってた料理を全部平らげて立ち上がる。

「御馳走様でした。お忙しいなかありがとうございます。とても美味しかったです。」

「いやいや、お嬢さんもいい食べっぷりだったぞ。見てて気持ち良かったよ。」

ペコリと頭を下げると料理を作ってくれた人がそんな事を言ってきた。そりゃあ思いつきり食うさ。すげー美味かったし。

「ほら、真、行くよ。」

桜に手を強引に引かれ部屋から出て行った。…もつとちゃんとお礼言いたかったな…。

「あ、桂木さん。どちらに？」

「ちょっと腹ごしらえを。ウマでした。」

引っ張られるままに進むと会長さんがいた。

「そうですか。桂木さんの席はあちらになってます。今回は桂木さ

んが主賓なので席は決めさせて頂きました。」

会長さんが指さしたのは会場のど真ん中のテーブル。ちなみに誰も座ってない。

「なんだろう…。すでにオチが予想できてきたな…。」

「とにかく座って下さい。桂木さんが居ないと始まりませんので。」

始まらないって…。すでに他のお嬢様方は各々が座ってハハハハンな会話してるじゃないか。

「まあいいか。あそこに座ればいいんですね。」

「はい。あとくれぐれも話し方には気をつけて下さい。」

へいへい。話す事があれば気をつけますよ。

俺は会長さんに指示された所に行って椅子に座った。

「何を飲みますか？」

座った瞬間に声をかけられた。…驚いたのは秘密だぞ。

「ではコーヒーを。ありますか？」

「はい。椿お嬢様から話は聞いておりますのでご用意してます。ご指定の豆などありますか？」

わお…何種類も用意してるのか。

「ブルーマウンテンは？」

「御座いますよ。お持ちしますので少々お待ち下さい。」

笑顔と共にお辞儀をしてメイドさんはどっかに行った。

そうなる俺は一人になるわけで……。周りのお嬢様方はそれぞれのグループで集まって話をしてる訳なんで…

ほら、俺いま、孤独だよ？

みんな視線は向けてくるんだけど寄ってくる気配は一切無し。あう

……

「お待たせいたしました。」

そんな考えをされていて俺が寂しさの海に沈もうとしているといい香りと共に声をかけられた。

香りは目の前に置かれたカップから漂ってる。

「あ、ありがとうございます。」

俺がお礼を言うとメイドさんはペコリとお辞儀をして離れて行った。

って行かないでー！マジでー！辛いんだって！孤独なんですー！

思わず叫びそうになった。でも結局声に出してないから気付かれずにメイドさんはどっかに行っちゃった。

声をかけてもよかったんだけどさ。ほら、あの人は今は仕事からだからな。仕事の邪魔しちゃ悪いし。……寂しいなあ、寂しいな。寂しいなったら寂しいな……

俺は動物園で檻にいれられてる動物じゃないんだからさ。見てるだけじゃなくてさあ……。はふう……………

いいや。コーヒー飲もう。温かいうちに飲まないと作ってもらった人に申し訳ないし……

あ……ウマイ……。

――――

会場の真ん中のテーブルには真が一人で座って飲み物を飲んでる。そして私……と言うより会長に幸、棗。それと椿は席から離れられない状況になってる。

「「桜様」。」」

声をかけてくれた人にニツコリ微笑みながら軽く手を振る。

隣にいる椿も同じ様な感じ。

「桜。真ん中だけ空いてますわね。」

「そうみたいね。」

今回のお茶会の趣旨は真がメインのはずなのに。

「桜（椿）様。お伺いしてもよろしいでしょうか？」

一緒にテーブルに居る子達から一斉に私と椿に質問が来た。

「な、なんですの？」

「な、なにか？」

さすがの椿もビックリしたみたい。声がすこし詰まった感じになった。まあ、私も人の事言えないんだけど。

「桂木様は何をお飲みになられてるのでしょうか？」

……そんなの本人に聞けばいいじゃない。

そう言いたいのを耐えた自分は頑張ったと思う。うん、頑張った。

「聞いてみますわ。」

椿は近くにいたメイドさんを捕まえて2、3質問した。

「あなた達。そんなに真が気になるなら話に行ってみたら？ 今なら誰も居ないから思う存分話せるわよ？」

私がそう言うともみんな一斉に首をブンブンと横に振った。

「む、無理です！」

無理って…。

「無理ってなんでよ？真の事嫌いなのか？」

「違います！ただ、桂木様は名画から抜け出した人のようで…。」

すごっ！信じられない誉め言葉よ。でも確かに…

真に視線を向けると…物思いにふけた表情でコーヒーを口に運ぶ姿が見えた。長いサラッサラな金髪が光を反射して輝いてるし…

確かに絵画みたいよね…

「つまりは近寄り難いみたいな感じなの？」

今度はみんな一斉に頷いた。

いや…これはやっぱりすごいわ。そりゃ1日でこれだけの人数集まる訳よ。

中身は中身で違う意味で現実離れしてるんだけどね。

「それであなた達は真と話をしてみたい？」

「それは…してみたいですけど…。」

ああ、物怖じしそうなのかな？

「私と椿も一緒に行くから。それなら大丈夫じゃない？」

真も一人で暇そうにしてるしね。

「そういう訳で、椿、行くよ。」

「こういうのはちゃんと本人の許可をとってからするものではなくて？」

とかなんとか言いつつも席を離れる準備をしてるじゃないの。

真も一人で暇そうにしてるから話相手欲しいだろうから丁度いいかもね。

お茶会【2】

「真。席、一緒にいい（よろしいかしら）？」

「もちろん。歓迎…します。」

危なっ！桜と椿だけだから普通に喋ろうとしたら後ろにゾロゾロと人が居るんじゃないか。

「よかった。それじゃあ座りましょ。」

「皆さ好きな席に座って下さいね。」

しかしなんなんだ？こんなに人を連れて来て…。ひょっとして自慢か？一人の俺を嘲笑う為に自分達のを連れて来たってのか？

うん、間違い無いな。だって好きな所に座るってのに俺から離れた席から座っていつてるもんな。これってイジメだよな？

「それで皆さんどうなさったのですか？」

これ重要。この返答が『一人寂しそうにしてる俺を嘲笑いに来た』だったら泣きながら暴れるよ？

「いや、この子達が真と話がしたいんだって。」

「話を？お…私と？」

「そうらしいのよ。人気者ね。」

話に来たならわざわざ離れた所から順々に座るなよ。普通に考えてそれじゃ話しくいだろ。

って言いたい所だけどここはグツと堪えよう。うん、偉いぞ、俺。

「そうだったのですか。私などでよければ喜んでお相手致します。」
やっぱ第一印象は大事だからな。やっぱ好印象を与えるのは笑顔だろ。

って訳で俺はお嬢様方に笑顔を向けたんだけどそれに対する反応が無いのは悲しいな。みんな俺の顔を見てるんだけどなにも言わないし。

「ほらほら、真の笑顔に見とれてないで何か話したら？真が寂しそうですね。」

桜。お前の言った事は前半はともかく後半は当たってるんだけど言われるとなんとなく辛いぞ。

「あ、あの…桂木様。よろしいですか？」

おっ。誰か話かけて来たぞ。あれ…この子見覚えが…確か…。

「浅井さん…ですよ？そんなに固くならないで下さい。」

そんなに緊張されるとどうしていいかわからなくなるだろ。

「えっ？どうして私の名前を？」

「それは同じクラスですから。さすがにクラスメイトの名前は覚えてますよ。」

いくら短い期間とはいえクラスメイトぐらいはしっかり覚えておきたいからな。

「ありがとうございます！凄く嬉しいです！」

なんかものスッゴく目をキラキラ輝かせながら俺を見てるんだけど…。

「いえ…それで何を話そうとされたのですか？」

「あ、はい。あの…桂木様は歌を学ばれてたのですか？」

歌…？学ぶ…？何を言ってんだ？

「いえ、歌を学んだのは学校の授業程度です。それ以外はカラオケで歌うくらいですけど…。逆にお聞きしたいのですけど歌は授業以外で学んだりするものなのですか？」

そんなんするのって歌手とかそんな仕事をしている人だけじゃないのか？

「ご存知なかったのですの？宝華学園にも選択で声楽がありましてよ？」

椿さん…それはマジですか？

「ちゃんと外部講師呼んでるしね。結構しっかりやってるんだけど。」

おお…マジなんだ。高校の授業でわざわざそこまでやるんだ。流石はお嬢様学校。恐るべし！

「私が学んだのは声楽とか別れてなくて音楽までですね。でもなんで私が歌を学んでると思われたのですか？」

「私、桂木様の歓迎会も参加しましたので…。」

あ、そうだったんだ。でも歓迎会の時ってアレだよな。拍手が一つも起きなかったんだよな。

「桂木様。私も質問していいですか？」

一段落して若干落ち込みながらコーヒーを飲んでたら再び声がかかった。

「はい。構いませんよ。」

「桂木様が在学してます霞ヶ崎学園とはどんな所なんですか？」

うちの学校がどんな所かね…。さてさてなんて答えようか。

「そうですね…。生徒の数が非常に多くて色んな人がいますね。」

色んな人が居すぎて嵐みたいなバカなヤツもいるけど。

「そして体育祭や文化祭などの催しはみんなで協力して盛り上げて

ますし。」

盛り上げようとして爆発とかしょっちゅう起きてるけど

「毎日何か起きて退屈の無い学校ですよ。」

その『何か』にかなりの確率で俺は巻き込まれてるけどな…。

「そうなんだ。随分と楽しそうな学校だね。行ってみちいかも。」

「それでしたら文化祭に来られたらどうですか？」

確かあっちに戻ってすぐにだったと思うし。

：そっかいえばうちのクラスは何をやるんだろうな。馬鹿な誰かは変な提案とかしてそうだし。

「えっ？ いいの？」

「ええ。外来は自由ですから。是非皆さんもいらして下さいね。」

ここでさっきは失敗したけど再びスマイル！これもダメだったら泣こう！

そして結果は……

うん、ちょっとトイレに行ってこよう。トイレに籠もって目から水を大量に流してくる事にしよう。うん、それがいい。そうしよう…

だってさっきと同じ様にみんな下向いちゃったしさ！なんだ？俺のスマイルは見るに耐えないってか？

「真。どこに行くのよ？」

「化粧室。笑顔について考えてくる。」

俺を止めるな。なんならこの場で目から水を放出するぞ？ダムから水が出る勢いでだすよ？それがダメなら『日本の滝100選』に選ばれる位の見せちゃうよ？

「真のは破壊力がありすぎなのよ。真だって人の目を見れなくなっただ事あるでしょ？」

人の目を見れなくなった事…？あれは確か中学の時…キレたゆーちやんが……

あれ？なんだか体が震えて来たぞ？

「ま、真？急に震え出してどうしましたの？顔も青くなってますわよ？」

「ナンデモ無いデスヨ？私ハイツモドリデスヨ？」

俺はいつも通りさ。さ、さて、コーヒーを飲むかな。

カチャカチャカチャカチャ…

「真。こぼれないのが不思議なくらい手が震えてるけど…。」

「ナンデモ無イデスヨ。イツモコンナ感じデス。」

俺が震えてる訳ないだろ？局地的な地震が来てるだけだ。震源地は俺。M5・5位で。

別にキレたゆーちゃんを思い出して震えてる訳じゃないぞ。そりゃあんときのゆーちゃんは怖かったさ。

目を見た瞬間に今までの記憶が頭をよぎったし、ゆーちゃんの後背に鬼神が見えたし…

「真！震えがさらに大きくなってますわよ！」

「会長！真がヤバいわ！」

ヤバく無いって。いつも通り。普通普通。

「どうしました水無月さん……桂木さん。目に光がありませんよ？」

「とりあえず裏に連れて行こう。みんなゴメンね。」

会長さん、桜。俺の手を引っ張ってどこに連れて行く気だ？

されるがままに手を引かれて裏に連れていかれた俺は1時間位の間ヤバかったらしい……

桜の考察

前までは全くもって謎だった事がある時から謎じゃなくなった。

「あ、次の授業、着替えですね。」

「そうね。着替えましょう。」

ガタッ：

「真。どこに行きますの？」

「ん？化粧室。厠。雪隠。」

「その3つの意味は同じですわ。」

真は着替える授業の時は必ず化粧室に行く。それでみんなが着替え終わるくらいに戻ってくる。

これってやっぱりアレだからよね…。

「桜？着替えませんか？」

「ん？着替えるわよ。」

ってボーっとしてたわ。私も着替えないと。

「そういえば椿。今日の体育って何やるか知ってる？」

「さあ？存じませんわ。知りたいのなら体育委員の方に聞いたらいかがです？」

「んー、別にそこまで知りたい訳じゃないからいいや。」

まあ何をやるにしてもそれなりに出来るから問題ないしね。

「体育に関しては桜が羨ましいですわ。」

「あんたは急に何を言ってるのよ。」

「桜は体育に関しては成績がいいから羨ましいのです。」

その『体育に関しては』ってのは余計よ。そりゃあ確かに他の科目の成績は芳しくないけどさ。

「それを言うなら真だって体育すごいじゃないの。」

「確かにそうですわね。二人が羨ましいですわ。」

こんな事言ってるけど椿だって体育の成績は悪い方じゃないわよ。平均よりちょっと上な感じね。

「あら、真。お帰りなさい。急ぎませんと時間ありませんわよ？」

あ、真が戻って来てる。教室内の子はもう着替え終わってるわね。着替えどころか教室に居ない子も結構居るわね。

「おっとそうだな。急がないと。」

周りを確認してから着替え出した真。その着替えの早いこと早いこと。

「つうか桜と椿はいいのか？教室にもう俺達しかいないぞ？」

わお！いつの間に！確かに教室に他に誰も居ないわ。

「それは真が着替えるのが遅いのが悪いのよ。早くしてくれないと私達まで遅刻しちゃうじゃないの。」

「そういう事なら行くか。着替え終わったし。」

あら、こんな話しながらもちゃんと着替えてるわ。

「そうね。それじゃあ行きま「お待ちなさい！」

何よ、椿。早く行かないと遅刻しちゃうじゃない。

「真。脱いだ服はしっかり畳まないとダメですわよ。」

服？あ、ホントだ。確かに脱いでそのまま机の上に置かれてるわ。

「そんなん別に大丈夫だって。どうせすぐに着替えるんだしさ。」

「駄目ですわ。そういう少しの緩みが駄目になって行くのですわ。」

あゝあゝ。こうなっちゃうと椿は止まらないのよねゝ。

「真。ここは素直に畳んだ方がいいわよ。こうなったらしつこいから。本当に遅刻しちゃうわよ。」

椿に聞こえないように真の耳元でこっそりとつぶやいて上げる私。
なんてやさしいんでしょう。

「マジで？しょうがねえな…。」

真はあっさり折れて素直に服をたたみ始めた。

「よし、今度こそOKだろ！いくぞ。マジで遅刻する！」

そう言うや否やいきなり走り出す真。って早っ！

「廊下を走ってはいけませんわ！」

「そうよ！校則によって罰するわよ！」

とか言うけど私も結構走ってるのよね。今のは真があんまりにも早いから追いつく為のやつよ。

「じゃあこれならいいんだな。」

ガラッ

「危なっ！」

「真！」

真はいきなり廊下の窓を開けると窓から身を投げ出した。

私と椿は窓に駆け寄り下を見た。ひょっとしたら見たくない光景を

見ちゃうかもしれないけど…

「…なんで平然としてるのよ。」

「ここ3階ですわよね…。」

下では何事もないかのように真が私達に向かって手を振ってた。

「先に行くから。」

それだけ言うと真は普通にグラウンドに向かって走って行った。

「…あの娘はどんな体してますの？」

「さあ？私も気になるわ。…とりあえず急ぎましょう。遅刻しちゃうから。」

私と椿は廊下を早歩きで進んで行った。ホントは走りたいんだけど椿が文句言うからね。

グラウンドに着いたのは授業が始まるギリギリだったわ。

担当の教師がグラウンドに入ってくるととクラスのみんなから小さな声があがった。

「今日、宮下先生なんですか？」

「大石先生お休み？」

とかね。まあ全体的に今日の担当教師を歓迎してない声よ。

「なあなあ桜。あいつ評判悪いのか？」

そんな声に混じって後ろから声をかけられた。考えるまでもなく誰だけはわかるけど。

「宮下先生よ。あの先生ちょっと異常なのよ。最初のランニングで一番遅い人をずっと走らせたりとか…。まあ真ならそれに引くかか
ること無いと思うけど。」

「ふん…。イヤなやつだな。」

表向きは生徒の不得手な部分を埋めるって名目らしいけどね。やられる方からすればそんな関係ないし。

「今日は大石先生が所要でお休みしてますので私が代わりに担当します。準備運動の後、各自のペースでグラウンドを3周して下さい。」

やっぱり開始のランニングやるのね。とつとと終わらよつと。

代表の号令の下みんな準備運動をしてる中、私はそんな事を考えてた。チラッと後ろを見たらかなり真面目に準備運動してるのが見えた。かなりやる気ね。

「それではランニング始めて下さい。」

宮下先生がそういうとみんな走り始めた。まあウォーミングアップがわりに軽く走ってっど…

私はそんな足遅くないから流し気味に走ってもビリッて事はないしね。

「桜。真はどこにいますの？」

走り始めて少ししたら椿が声をかけて来た。椿もいくらか余裕ありそうね。

「真？あの娘の事だから先頭グループにいるんじゃないの？」

「私もそうかと思ったのですけど前には見当たらないですわ。」

そう言われて私も前の人達を見たけど確かにあの目立つ金髪が無いわね。

「ホントだ。まあ真の事だから大丈夫でしょ。」

「そうですわね。真が最下位というのは考えられませんかものね。」

私と椿のこの考えは……………覆された。

「はい、3周終わりっど。さてさて、真はどこにいるかな？」

横で息を整えてる椿は放っておいて私は走ってる娘達を見て行った。

「桜…真は…居まして？」

前から順に見て行ってようやく真を見つけた。…って、あれ？

「居たけど…すごい位置よ。」

真は私達の予想に反して最下位の子の横を走っていた。

「なんで真があんな位置で走ってますの？」

「ひょっとしてさっき着地に失敗してたとか？」

そうじゃないとこれは説明がつかないんじゃないかな？

そんな話してるうちにもうすぐ真がゴールしそう。

「もう少しですよ。頑張りましょう。」

「はあ…はあ…はい…。」

なんて言うか励ましながら走ってるわね。

「はい。ゴールですよ。」

「はあ…はあ…はあ…。」

とりあえずゴールしたわね。最後真が背中押してたけど…。アレ？
背中押したって事は最下位は真なんじゃない？

「みんな走り終わりましたね。最後は…桂木さんですね。」

「はい、そうです。」

何のん気に返事してるのよ。ちゃんと説明したのに。

「では、桂木さんは今から更に10km走って下さい。後の人達は体育館に移動して下さい。」

10km!？今の時間を考えると授業中には間に合わないじゃないの。

「はい。わかりました。」

そしてアンタはなんで快諾してるのよ。

「真？大丈夫なの？」

「大丈夫だろ。授業中には体育館に行けると思うし。」

この余裕は一体なんなのかしら…。

「桂木さん、はじめますよ。皆さんは体育館に移動して下さい。」

先生に呼ばれると手をヒラヒラふりながらスタート位置に向かった。

私それを見ながら体育館に足に向けた。

「真は大丈夫でしょうか？」

「本人は大丈夫って行ってたけど…。」

体育館ではバスケットボールとバレーボールに別れてそれぞれ自由にやってる。私と椿はバスケットボールで今は休憩中。

体育館の壁に寄りかかってやってる試合を観戦中。

当然話題は今走ってる真の事。そして真の事を気にかけてそうな娘がもう一人。

それはチラチラと出入り口を見てる娘。ランニングで真と一緒に走ってた娘よ。

「そんなに心配しなくても大丈夫よ。真は真なりの考えがあったんだろうし。」

「そうですわよ。そうじゃなかったらあの位置を走る訳ありませんもの。」

とは言ってるけど授業時間いっぱいまで真は走らされるんだと思うけど…。

「桜。そろそろ私達の出番のようですわよ。」

「そうみたいね。さて、行きますか。」

「ちょっと疲れたけどまだまだ動けますからね。」

・・・あれ？

私と椿の話に加わってきたのは？

「うん、意外となんとかまりましたね。」

「「ま、真!？」」

そう。まだ走ってるはずの真が私達の後ろに立ってたの。

「しかしバスケットボールか。もう走りたくないんだけどな。」

そんな事言いながら足取り軽く真はバスケットのコートに入って行った。

…多少はわかったつもりだったけどあの娘は謎が多すぎるわ。

お顔拝借

時間の流れと慣れは恐ろしいもので、最近では周りから相手にされないのも慣れて来た今日この頃。

俺は朝から悩みに悩んでいた。きっかけは朝、教室に入って席に着くなり後ろの席からかけられた一言。

「真。放課後ちょっと顔貸して。」

残念ながら俺の顔は『正義のパン男』みたいに外せないって言おうとして後ろを見たら顔がマジだったもんだから

「ウイ、マドモアゼル。」

としか返せなかった。ヤバいって。ふざけられる眼光じゃ無いって！

そこからまあ当然のごとく授業には集中出来ない。出来る訳がない。

頭の中は『なんで桜はあんなマジなんだ？』とか『俺なんかやらかしたか？』とか『腹減った（昼休み前）』とか『パトラッシュ…なんだか疲れたよ（昼休み後）』とか授業がまったく頭に入らなかった。

「真。離れ茶室に。」

桜にそう言われたのは帰りのHRが終わった時だ。ちなみに離れ茶室ってのは来客をガチでおもてなしする茶室だったかな？

「き、拒否権は…」

「いいから。」

「今日、よう」

「用事が無いのはわかってるから。」

「お腹へっ」

「減ってるならちょっと我慢して。」

す、全てが読まれてる！

「行かせて頂きます。」

「私は準備してから行くから。先に行つてて。」

準備？な、なんの準備だよ！アレか？救急車のものか？それとも俺の遺書を偽造したりか？救急車なんか生ぬるいと！霊柩車だと言いたいのか！？

「なんで小刻みに震えてるのよ。それじゃあ茶室で待っててね。」

「あ、ああ。」

俺は恐怖を振り払いながら足を茶室に向けた。気がおもいなあ…

という訳で茶室だ。普通はここで『和』を知って心を落ち着かせる

もんなんだろうけど：

「落ち着かねえな…。」

壁に寄りかかって片膝を立てて座ってボーっと天井を眺めてる俺。
茶室じゃ正座じゃないかってのは無しだ。礼儀作法なんか知るか。

しかし手持ち無沙汰だ。どうすっかな…。霊柩車が来る前に遺書で
も書いて置くか？

な～んて考えてたら茶室の障子が音も無く開いた。

「桜？居まして？」

入って来たのは椿だった。…あのドリルなら障子にプスプスって穴
開けられるんだろうな。

「真。私と障子を交互に見てどうなさいましたの？」

「ん～？いや、障子じゃなくて襖でも貫けるんじゃないかってな。」

だって鋭角にいくから貫通力高そうだし。貫通力＋回転でそりゃ～
凄いパワーを発揮しそうだ。

「これは髪の毛なんですからそんな事出来ませんわよ！」

と本人は言ってるけど実際はどうだか怪しいもんだな。

「それよりもこんな所にどうしたんだ？」

「桜に呼ばれたのです。そう言う真はいかがなさいましたの？」

「俺も桜に呼ばれたんだよ。」

椿もか。・・・見届け人か？ってシヤレにならねえぞ！アイツは確実に殺る気だぞ！

「真？いきなり震えだしたりしてどうしましたの？」

「な、なんでも無い。ただちょっと寒いだけだ。」

とか言いつつ冷や汗が背中をツーーと伝ってるけど。

「そうかしら？私はそんな寒く感じませんけど。」

座ってジーツと俺を見る椿。そんなに見られてたら逃げられないだろうが。逃げたらドリルヘアーが伸びてうねって俺を捕まえそうな気がするし。

「それはそうと、真。その座り方はよろしくありませんわよ。」

「別に他に誰も居ないんだから気にすんなって。」

「気になりますわ。下着が見えてましてよ！」

ん？ああ、そりゃあ前から見てたら見えるか。

「いいじゃん。減るもんじゃ無いしよ。」

なんでわざわざそんなの気にするかね？見られてる本人は一切気に

して無いのに。

「私の神経がすり減りますわ。」

おお！なかなか上手い事言うじゃないか。

「あ、丁度二人とも来てたんだ。」

そんなやり取りの中茶室に入って来たのは…ってか一人しか居ないんだけどな。

「桜。話があるっていかがなさいましたの？」

まあ、呼び出した本人なわけだ。

「まあ、ちょっとね。ただ私としてはそこで身構えてる真の方が気になるんだけど。」

「…真、なにしてますの？」

何ってそりゃあ身構えるだろ！どんなタイミングで殺られるかわからないんだから。

「別になんでも無い。それより呼び出した相手を待たせるのはどうかと思うぞ。」

これはアレだな。かの有名な剣豪、宮本武蔵の『Ganyū-iland Operation』略してG・Oなのか？待たせてイライラした所を斬り捨て御免！みたいな。

大丈夫。対処法はバッチリだ。鞆だ。鞆を手放さなければいいんだ。鞆を捨てると

『小次郎、敗れたり〜!』

って言われるからな。って誰が小次郎だあ!それよりそもそも鞆ってなんだ!俺は刀なんて持ってないぞ!

「ちよっと、真。なんかブツブツ言い出してどうしたのよ?」

んなにいい?声に出てたのか?

「いや、なんでも無い。気にしないでくれ、武蔵。」

「誰が武蔵よ!誰が!」

「悪い、間違えた。んで、呼び出して置いてなんで遅れたんだ?」

「ちよっと準備してたのよ…。」

準備?刀を研いだりとかか?そりゃますますヤバイじゃないか。

「来たのでしたらその準備は出来たのでしょうか?それで話とはなんですか?」

なんでこのドリルお嬢様は冷静なんだ?今から俺が斬られるかも知れないのに。

「うん…ちよっと待ってね…。」

大きく吸って…吐いて…。大きく吸って…吐いて…。

その様子は明らかに深呼吸だな。

吸って…吐いて。吸って…吐いて…。

「ヒッヒッフ…。ヒッヒッフ…」

吸って、吸って、吐いて…。吸って、吸って、吐いて…。

「ってこれは違うでしょ！真、何やらせんのよ！」

「いや、ついなんとなく…。」

怒られちった。…なんか深呼吸してるヤツを見るとこの悪戯をしたくなるんだよねあ。

「とにかく用件を言え。事と次第によっては俺はそれなりの対応するから。」

例えば…刀を振り上げたら逃げるとか、銃を取り出したら逃げるとか。あとは…まあ…逃げるとか。

「よ、用件はこれよ！」

叫びながら繰り出されたのは…袈裟斬りチョップだと？

考える前に体がしっかり反応していた。桜の右の袈裟斬りチョップに対して俺は右腕でガード！

そして茶室に響き渡る鈍い音。

「なぐにしゃがってんだコンチキショー！」

しかしこれが刀だったら持ってたかな…。

「真、随分と鈍い音がしましたけど大丈夫ですよ？」

だいじよばない。腕の芯が地味に痛い。

「こ、これは違うのよ！これはそういうアレじゃなくて！」

そういうアレじゃ無かったらどういうアレで攻撃をしてくるんだろうか？

「コレよ！コレを見せたかったのよ！」

コレ？俺が見たのはチョップの速さと芯にズシンとくるダメージだけだぞ？

「コレとは桜が手に持っている物の事ですよ？」

手に持つてる？凶器か？素手だと思って油断してたぜ。

「とにかく、二人ともコレを見て。」

何故かチョップをしながら桜が見せてきたのは…写真だな。馬鹿なヤツがドアップでピースしてる。

「アレ？これって前に見せて貰った写真か？」

確か桜と買い物に行った時に桜のお姉さんが見せて来たんだよな。

「さ、桜！それを真に見せてどうするつもりですか？」

…なんでドリルなお嬢様が慌ててるかがわからないけど…。

「椿、いいから。コレの事は真に聞くのが早いだよ。」

「それは…どういう意味ですか？」

「それはこういう事よ。」

桜は俺と椿に見えるようにさらに写真を出した。

その写真はつい先日生徒会での査問会の時に出された俺と嵐の写真だ。

…でもさ、桜が好きなのは嵐だよな？俺のは関係無くてね？

「まず、真。あんたに言うわ。私と椿はこの写真に写ってる人が…
…その…、す、す、好き…なのよ…。」

顔を真っ赤にしながらかう言う桜。同じくボンって音と共に頭から蒸気を発して真っ赤になってるドリル椿。

そしてそんなかなんで俺は二人が嵐の事を好きだと言う告白を受けてんだろう？イジメ？

「さらに、真。この人はアナタと赤井さんで間違いないのね？」

桜が指さしたのは査問会の時の写真。…このタイミングで出されてもな…。椿はその事知らないんだし…。

「答える前に…、椿。お前は口は堅いか？秘密は守れる人間か？」

「言っている事と駄目な事の区別くらい付いてましてよ。」

なんだか解らんが凄い自信を持ってるな。お嬢様方は色々な話を聞いたりして大変なんかな？

「じゃあ、その言葉を信じる。桜が持ってる写真は嵐と男だった時の俺だ。」

「ど、どういう事ですか？」

「どういふものにも俺は前まで男だったんだ。別に手術をしたとかじゃなくて事故で体が女に変わったんだよ。」

目を見開いて俺をジーツと見る椿。まあ、その反応は当然だよな。

「で、でも真は女ですわよね？」

「今の体はな。なんなら脱いで確かめてみるか？」

首をブンブンと振ってるけど表情は疑惑の顔だ。

「椿、問題は真が男か女かじゃないの。私的な問題はコレが真って事なのよ。」

桜が指差すのは男の俺の写真。はて？何が問題なんだ？

「椿、この件に関してはお互い抜け駆けは無しって決めたわよね？」

「え、ええ。そう決めたわね。だからアナタは私にも写真をくれたわ。」

椿が出したのも馬鹿がドアップでピースしてる写真だ。

「なんだ？お前ら二人して嵐の事好きだったのか？」

「違うのよ。確かに私達はこの写真に写ってる人が……好き……なんだけど……。」

また深呼吸をする桜。なんだ？そんなに息苦しいのか？

「その写真に写ってるのもう一人いるでしょ！」

ビシッと指を突きつける桜。って近い近い！目に刺さるだろうが！

んで、写真にもう一人？さてさて、話からすると俺が関係してそうな感じだけど……

「嵐しか写って無い気がするけど……。」

写真を手に取って見ても見えるのは写真一面に写ってるピースしてる嵐だけだけどな……。他にはなんも写ってないぞ。

「あんたの手の下よ。」

おお！持つ手で隠れてたのか！どれどれ……

「こりゃ…俺か？」

写ってたのは背中越しに振り向いてる男。背中には大きく『霞ヶ崎』
って書いてあるな。うちの空手部に茶髪はいないからこれはほぼ間
違い無く俺だな。

「確かにこの茶髪は俺だけど…って…あれ？」

さっきの話だと…これには桜と椿の好きなヤツが…

「わかったでしょ！私はアンタの事が好きなのよ！文句ある！？」

「桜、抜け駆けは無しですよ。私もまだ頭が混乱していますけど
…この殿方が真でしたら……。真、私はアナタが好きですわ！」

ちよ…ちよっと待ってくれ！俺が全く理解出来ないんだけど！

かいそう（前書き）

なんだかすみません…。

かいそう

こ、この空気は…俺はどうしたらいいんだよ…。

「二人ともちょっと待て。俺に少し時間をくれ。」

クルッと反転して二人に背中を向けて壁を眺める。…壁は染みも無く真っ白だ。

って違うだろ！！

現状を理解しろ！

桜と椿は同じ人が好きだった、そこでどうやら桜と椿は俺の事が好きらしい…。

…や、やばい…。突然の事態に頭がついていかない…。

「な、なあ。二人に聞きたいんだけど…。なんで俺なんだ？」

そもそも俺が二人に会ったのはここに来たからなんだから…よくわからん。

「そ、それは、私と椿がアナタに助けてもらったからよ…。」

「俺が二人を？いつの話だ？」

「覚えてませんか？写真を撮った大会でしてよ。私は桜の応援に行っていましたの。」

大会……。確かあの大会は：

「覚えて無いなら話してあげるわ。あれは大会の閉会式の後よ……。」

閉会式……。確か俺の大会の結果は全引き分けだったな……。勝つ気無かったからな。

「真。あんた閉会式の後には会場の裏に来たわよね？」

裏に……。？ああ。ゆうちゃんに呼び出されたんだっけ。『なんで勝たないんだ！』って……

「私達二人も会場の裏に居たのよ。」

「桜の名前を出されて私が呼び出されたのが始まりですけどね。」

なんだと？じゃああの地獄の光景を二人に見られたのか？

「椿を呼び出した理由は私に負けた子が彼氏とかを使って私を痛めつける為だったのよ。」

なんだそりゃ？クソみたいな連中だな。

「椿が捕らわれてるって聞いて私は行くしか無かったから裏に行っただわ。」

「疑いもせずに行った私も愚かでしたわ。」

しかしその話に俺がどう関わってくるんだ？

「それで会場の裏に私が行ったら椿が捕まってて私は男達に囲まれたのよ。」

ヤバいな。そいつらマジで最低だな。

「そんな時に一人の男の方が上から降りてきたのですわ。」

「その男の人は金髪で手にバッグを持ってたの。」

ん…？なんだかちょっと思い出してきたかも…。

「その人は椿を捕まえていた人を一撃で眠らせたのよ。」

確かゆーちゃんから逃げるのに二階から飛び降りたら下に人が居たんだよね…。

「そしてその男性は私に鞆を預けましたわ。」

踏んだ人に謝ろうと思って鞆を持ち替えたら握り損ねて誰かの所に行ったような…。

「それでその人は私の所に来ると私を椿の方に逃がしたの。」

踏んだ人がピクリともしないからお友達っぽい人に声をかけようと近付いたらいきなり殴りかかって来たから思わず避けながら近くに居た人を押した記憶はあるな。

「それから私達二人は呆然と見とれてましたわ。その人は相手の攻撃をかすらせる事なく、むしろ同士討ちをさそうように動きだした

のですから。」

あんだけ人数多いのに一人を囲んでれば避けるだけで他の誰かに当たるんだよね。

「迂闊にも私も動けなかったわ。試合の疲れと椿が無事だったっていう安心感で力が抜けちゃて…。」

「それが暫く続くと相手の男の方々の人数が減って行きましたわ。」

「うん。それで不利を悟ったみたいで男達は逃げて行ったの。」

それは多分上の階から俺を見つけたゆーちゃんが凄い殺気を放ってたからだと思うな。

「で、私達がお礼を言おうとしたら…。」

「もう居なかったのですわ。」

そりゃ命の危機が迫ってたからな。ゆーちゃんから逃げなきゃいけなかったし。

「それで後日に私の姉さんが撮った写真を見てその人の学校を知ったのよ。」

これだけデカデカと背中に学校名書いてあるからな。そもそも学校名しか書いてないし。

「つまり、私達は助けてもらった人に一目惚れしたのよ!」

「今の話に出てきたのはアナタで間違いございませんこと？」

「ま、まあ…。話に出てきたのは多分俺で間違いはないと思う…。」

話の内容と俺の記憶で若干の差違はあるけど…。俺の記憶では事故だし…。

「それで？真、アンタの返事は？」

「返事って…。それは今言わなきゃ駄目なのか？」

いきなり告白されて『さあ！』ってのはキツいな。

「そうよ。私なのかそれとも椿なのか！返事を聞かせて！」

や、ヤバいぞ…。こんなマジな空気は俺には耐えらんねえぞ…。

桜と椿は二人して耳まで真っ赤になって俯いてるし。

「ち、ちょっと待ってくれ…。俺に5…いや、3分時間をくれ。」

「そ、そうですわね。急に言われましても答えにくいですわよね。」

「うん、待つ…。因みに私も椿も覚悟は出来てるから…。」

「ええ。同じ方を好きになって二人が幸せになれるはずありませんから。」

そこまで考えてんのかよ…。なんて二人だ。

俺は二人を前にしてじっくり考えた。こんな事今まで無かったからそれはもうじっくりと…。

考えた結果…俺は答えを出した。

「よし、俺の答えを言うぞ。いいか？」

「ええ。」

「いいですわ。」

一つ…二つ…深呼吸をして気持ちを落ち着かせる…。

「二人の気持ちに対する答えは……………」

解答

「二人の気持ちは凄く嬉しい。でも…俺は二人の気持ちに答える事は出来ない…。」

俺がそう言うのと茶室内は静寂に包まれた。

「……………」

桜と椿は依然俯いたままだ。俺はそんな二人の前でただ立っている。

「…ま、真…。理由を聞いてもいい…？」

俯いたまま桜からそんな声が聞こえた。

「誰か…好きな人…いるの…？」

ああ…そっか…。ここで断るとそんな発想になるのか…。

「いや？別に居ないぞ？」

「では…私達の事が嫌いなのですか？」

今度は椿だ。こっちも下を向いたままだ。

「嫌いじゃねえよ。」

「「じゃあなんで？（ですの？）」「」

二人は同時に顔を上げた。二人は……泣いていた。

「頼むから泣かないでくれよ。」

なんだか悪い事をしてるみたいだ…。

「俺から二人に聞きたいんだけど……。二人は同性愛者か？」

「そんな訳ないでしょ！」

危なっ！叫びながらいきなり殴ってくるんじゃないやねえよ！

「アナタは私をどういった目で見てますの？」

こっちも怖っ！笑顔なんだけど…その笑顔が黒い！

「違う！違う！そういう意味じゃ無くて！」

「違うって！いや…違うのか？まあ、とにかく違うんだって！」

なんで俺はこんなに慌ててんだ？

「じゃあどういう意味よ！返事によってはここの入り口に黒と黄色のテープが貼られるわよ！」

さて、桜！それは確実な事件だ！殺人か？殺人現場になるのか？

「この若さで死にたくないぞ！だからそういう意味じゃなくてだな
…。」

桜の…違う、二人の目が怖い…。桜は実力行使で…椿は…

「返答によっては私は如何なる手を用いまして…ふふふ…。」

いかなる手をとか言ってるし！おかしいって！二人共さっきまで泣いてたんだぜ？

「二人とも落ち着け！そんで落ち着いて考えろ！今の俺と付き合うってのはお前ら二人は同性愛者になるんだぞ？」

二人が呆然としてる間に深呼吸して…

「そもそもこの状況で交際どうこうは考えらんねえんだよ！」

「この状況ってなによ！」

な、桜！お前はまだわからないと言うのか？

「今、俺の中じゃ最優先…違う、大事なのは元に戻る方法なんだよ！それ以外の事は考えらんねえんだよ！」

「そう…でしたわね。確かに今の状況を客観的に見ましたら私と桜は同性愛者になりますわね。」

よし、椿は理解してくれたみたいだ。さて、桜は？

「そっか…。私達が好きなのは男の真だもんね。あ、別に女の真が嫌いな訳じゃないからね。」

そこで訂正を入れなくてもいい。逆になんかツライ…。

「とりあえず二人とも理解してくれたな。正直、二人みたいな可愛い子に告白されて嬉しいんだ。だからこそちゃんとした返事出したい。だからまずは返事を出来る状況にならなきゃいけないんだ。」

「「えっ……。」」

二人ともなんで目を逸らす！俺なんか変な事言ったか？

（っ、椿。今、何て言われたか聞こえた？）

（聞きましたわ。確実に可愛いと言いましたわ。）

（そうよね。ヤバッ凄い嬉しいんだけど。）

（今、手元に録音機器が無かった事が悔やまれますわ。）

なんで二人でチラチラと俺を見ながらないしょ話をしてんだ？そんなに変な事を俺は言ったか？

「と、とにかく、理解しましたわ。では返事は保留という形と受け取ってよろしいのですの？」

「そうだな。悪いけどそういうった形になるな。」

だよな。今返事出来ない以上は保留なんだよな。

「ただ今の所戻れる目処は一切無いってのが現状だ。だからいい相手がいたら俺は応援するぞ？」

宙ぶらりんの状態でいつまでも待たせる訳にはいかないからな。

「手がかりは一切無いのですの？」

「無いなあ。作った人は偶然出来たものだって言ってたしな。」

そう言われてその後の記憶が曖昧だけだな。気付いたら病院だったし…。

「椿は真が戻るまで待てないの？だったら他に探せばいいわ。校門の所にいる人から選べば選り取り見取りだし。そしたら真は私ともうから。」

「そんな事は言ってますんわ！他の方など考えられませんか！」

校門……、ああ…他の学校の男連中か。確かに椿が声をかけたら大喜びだろうな。

「私はただ早く真を元に戻したいだけですわ。それで手がかりなどがあれば家の者に調べてもらおうとしただけですわ。」

…椿の家ってどれだけのもんなんだ？なんだか恐ろしいほどの力を持ってそうなんだけど

「早く戻したいってのは私も一緒ね。」

ありがたい事だ。普通、『今は女だけど元々男です。』とか言ったら頭がやられてるって思われる所だぞ？

「まあなんか手がかりあったら教えるよ。」

「ええ。そうして頂ければ私の方でも調べますわ。」

「ありがとな。さて…だいぶいい時間だし…帰るか？」

気付いたら7時とかになってるし。

「ホントだ。急がないと夕食がなくなっちゃうわね。」

「私も連絡せずに居たので急がないとマズいですわね。」

二人もあっさり同意してくれバタバタと身支度を整えだした。

「しかし…二人とも変わり者だな。みんなから無視されるような俺を好きなんて。」

「いいでしょ！好きなのは好きなんだから！」

「そうですわ。それにアナタは人気ありましたよ？」

まさかあ！俺に人気あるわけないだろ！みんな近付いて来ないし目は反らされてんだぜ？

「その顔は『そんな事ない』って顔ね。…まったくアンタってヤツは…。」

「ですわね。まあ構いませんわ。それも真の個性の一つですから。」

「『そんな真が好きなんだけどね（なんですわ）』」

ありがたいな。そんなハッキリ言われると結構照れるな…。

「さ、さて：行くぞ。準備は出来たかった？」

チッ！ 噛んじまったじゃねえか。

「大丈夫よ。行きましょう。」

「そうですわね。行きましょう。」

なんか少し笑ってるし。チクショウ…

外に出ると辺りは暗く月と星が見えてた。

そんな中俺達は帰宅していった。

ガサッ…

「いゝ情報をゲットよ。まさかあの二人がね。さゝ今から忙しくなるわ。」

草影からカメラ、ボイスレコーダーを持って出て来た一人の人に気

付
か
ず
に
：

号外

いつも通りの朝だった。

朝からやかましく鳴る目覚ましを手探りで探して止めて二度寝。

5分後になった携帯のアラームで渋々起床。

もぞもぞとベッドから降りて台所へ。

お湯を沸かしながら目玉焼きを作り皿に盛る。

パンを焼きながらお湯を注いで珈琲をドリップ。

冷蔵庫からヨーグルトとジャムを取り出し座ると丁度パンが焼ける。

毎度の事ながらジャストのタイミングだな。トーストをかじりながらテレビを付けてニュースを見る。

食事を終えると台所に皿を置いて洗面所に。顔を洗って歯を磨いて頭をスツキリさせる。化粧なんて当然しないから洗面所はこれで終わり。

トイレ行って着替えて準備完了。さて、今日も学校に行くかな。

おっと…携帯忘れてた。

寮から外に出ると今日もいい天気だ。こんな日は屋上とかでゴロゴロするの理想なんだけどなあ…。

寮には結構な人数暮らしてるから学校に向かう道は当然ながら他の人と同じだ。みんな仲のいい人と話しながら登校してる。

ちなみに俺の近くには…誰も居ませんよ。相変わらずだな。誰も話しかけてはくれないし。…落ち込んじゃうぞ。

でもずっとこんなんだからな。まあ慣れたっちゃあ慣れたな。

そんな事を考えてると学校が見えて来た。校門の近くには他校の男共がわんさか。

毎回思うんだけどコイツ等遅刻しないのかな？まあ見知らぬ人が怒られようが俺の知ったこっちゃないんだが。

男共の前を通過するときに

「行けよ。」

「お前が行けばいいだろ。」

「近寄れるオーラじゃ無いんだよ。」

とか聞きたけど…話しかけないならわざわざ来なければいいのにな。時間の無駄だろ。

校門を過ぎて玄関に向かうと…

「なんだ、ありゃ…。」

掲示板付近に人が大量に居た。なんだ？重要な連絡事項が？

「ごうがうい！ごうがうい！今朝出来たばかりの新聞よ。」

そんな声と共に紙が空を待っていた。近くを飛んでいた紙を掴み内容に目をと…お…………

よし、帰ろう。

そう判断した俺は180度体を回転させて再び校門を目指して歩き出した。

しかし、校門に着く前に俺は動きを止められた。

「真？なに外に行こうとしてんのよ？」

「そうですわ。HR始まりましてよ？」

俺の前に立ち、俺の進行を止めたのは、桜とドリル椿だった。…今、会っちゃいけない二人だ。

「帰る。帰ってニートになる。」

俺は1分1秒でも早くここから離れたいんだ。掲示板付近に集まっている人達が俺達に気付く前に！

「ダメに決まってるでしょ。ほら、行くわよ。」

桜はガシッと俺の腕を掴むと玄関の方に向かい出す。

「いや、親戚の叔父さんの友達の妹のクラスメートのペットの元飼い主の通う医者の子供が倒れるって虫の知らせがあったから帰る！」

「それはどう考えても他人ですわ。ほら、行きましてよ？」

少しは考えてー！桜なんか理解出来ずに考えてんだからー！

そんな願いも虚しく椿は桜とは逆の腕を掴んで俺を引きずりだす。

ダメだー！今アソコに行ったらヤバい事になるんだよ！

こうなったらコレを見せるしか無いな！

「桜！椿！これを見ろ…って腕！桜！腕極まってるから！」

ひねったらビキッと来たぞ！まさか掴んでるだけじゃなくて関節を極めてると思わなかった…。

「なによ？」

「なんですの？」

二人は俺が痛みに耐えながら出した号外に目を落とした。

ジックリ読む必要はないんだ。チラッとでも見れば内容はわかるんだから。

「今日は帰ろう。」

「そうですわね。家で大人しくするといたしましょう。」

よし！二人がちゃんと理解してくれた！掴んでた腕も放してくれたし！

「よし、帰るぞ！バレないうちにこっそりと。」

二人は無言で頷いて俺の後に続いて校門に向かって歩き出した。

バックに某彗星から地球を守る宇宙飛行士の曲がかかりそうだ。

しかし、そんな壮大な行進はあっさりと終わりを告げた。

「お三方、どうしました？校舎は反対ですよ？」

静かに退却しだした俺達の前に現れたのは生徒会長様でございました。

「ちょっと体調がすぐれないもので…寮に戻って休もうかと…」

「あ、私も。」

「同じくですわ。」

俺の意見に乗っかる二人。…って乗っかったらバレバレだろ……。

「わかりました。とにかく教室に向かって下さい。遅刻してしまいますよ？」

案の定あっさりバレたぞ…。

教室に向かえますか…。教室に行くにはあの人だかりを超えなきゃならないんですね…。

「あの人だかりはなんですか？あれでは中に入れないではないですか。」

俺がチラッと見たのに気付いたのか会長も人だかりに目を向けて歩き出した。

なぜか桜の手を引きながら。

よし、このスキに桜を犠牲にして逃げるとするか。

俺が一步を踏み出すと体が後ろに引っ張られた。

「真。逃がさないわ。」

「離せっ。お前を犠牲にして俺は助かるんだ。自分を犠牲にして人を助ける。美談じゃないか。」

「自ら犠牲になると生け贄とじゃ違うから。真も一緒にね。」

ぐおおおおっ！手がっ！手が痛い！ミシミシ行ってるから！

そんな激闘の中、俺の視界の隅にドリルが揺れたのが見えた。とっさに俺は空いてる手を伸ばしてドリルの肩を掴んだ。

「椿い。この状況でお前だけを逃がすと思うか？」

「お離しなさい。私は最後の一人になっても無事生還してみせますわ。」

「一人になんかしないさ。さあ、一緒に行こう。」

「そうよ、椿。私達は仲間じゃない。あなたを一人にしないから。」

「さわやかに言ってますけど騙されませんわよ。手をお離しなさい。」

チッ！今の流れなら『わかりましたわ。』とか言ってくれると思っただけだな…。

現状は会長が桜の手を引き、桜は俺の手を握りつぶそうとしてて、俺は椿の肩をガッチリ掴んでる。

つまりはほぼ一列になってるって訳だ。朝の登校時間に校門付近でこんなことしてたら……まあ目立つよなあ。

「桜様！」

「椿様！」

「聖様！」

と、まあ人気者は声をかけられる訳なんだよ。

声をかけられるって事はその人がそこにいるってのがバレるわけだ。チラッと見ると人だからから人が少しずつこっちに向かって来てるのが確認できた。

こりゃあやばいんじゃないか？

「桜様。これは本当なのですか？」

「椿様。お答え下さい。」

迫り来る方々が手に持つてるのは号外新聞。あっちゃ…最悪だ。

「皆様が手にもたれてるのはなんですか？」

当然、会長はそれに目が行くよな…

「えっと…、『噂のお嬢様に熱愛発覚！…短期留学中の桂木真嬢が告白される現場に本誌記者が遭遇した。』…あら、随分衝撃的な現場に…。」

全然人がいるような感じはしなかったんだけどな…。

「『お相手は同じクラスの水無月桜嬢と崎島椿嬢。この大人気カップルはどうなるのか？』どうなるんですか？」

ここで保留って事実ひ言ったらどうなるかな。桜と椿のファンから罵詈雑言を浴びせられるかな？それとも物理的にくるかな？

「そもそもその新聞は間違ってるんですって。大人気なのは桜と椿だし…。」

人気なのはカップルじゃないじゃん！

「問題点はそこでは無いと思いますが…。それに間違いでも無いと

思いますが。」

「まずはこの囲みの中から私達がどうやって抜け出すかが一番重要なんじゃないかな？」

桜、お前はいい事を言った。確かにこの人垣をどう抜けるかが問題だ。

手を出す訳には行かないしなあ…

逃亡

「キツいな…。」

「さすがに…疲れるわね…。」

「……………」

上から俺、桜、椿だ。

まあ休み時間の度に追われてればこうなるよな。

椿なんかは喋れないくらい疲れてるし。

「問題は…次だな。」

そう。追われるものとして次が最大の山場だ。この授業で午前中は終わり…つまりは昼休みになるんだ。

その時間まで後10分ほどになっている。

授業など耳に入らずただどう逃げるかだけを考えていた。

窓の外は雲一つない天気で俺の心の中とは正反対だった。

…窓かあ。

ある事が俺の頭に閃いた。こんな状況なんだ今更お嬢様らしくもないか。

俺は窓に手をかけてゆっくりと窓を開けた。

外から入る空気が俺の体を撫でて気持ちいいな。

窓の外はベランダ（テラス）になっていて人がいられるようになっている。

落下防止に柵が設置されている普通のものだ。

窓を開けた俺はペンケースからボールペンを一本取り出して一息ついた。

「よし。」

手にもったボールペンを俺の席とは反対側…つまり廊下側の扉に向かって投げた。

ペンは真っ直ぐ飛んで行き、カッという乾いた音を立てて壁に刺さった。

「キャッ！」

近くのクラスメイトが悲鳴を上げた。

教師を含む俺以外のクラス全員の意識がそちらに向いた。

その瞬間に俺は窓枠を飛び越えてベランダ（テラス）に出た。

そして柵の上に立ち天井…上の階の柵の一番下を掴む。

落下防止の柵の高さが高いのが幸いして手は楽に届いた。

その状況になってから窓の中……教室内を見るとまだ騒然としていた。

そんな中、桜と目が合った。

まあ、桜は俺の後ろの席だから俺の動きはバッチリ見えてたんだろ
うな。

俺は桜にバイバイの意味で手を振ってからその手を上に上げて上の
階の柵を掴んだ。

「よつと……。」

腕に力を入れて体を上に上げる。

顔が上がって上の階の教室の様子を見た。

流石は真面目なお嬢様学校。みんな熱心に授業を受けていた。

これなら外を見る人は居なさそうだな。

俺は柵を乗り越えて一息ついてからさっきと同じように上へと登った。

目指すのは立ち入り禁止になってる屋上だ。

「よっこいしょ。」

最後の柵を乗り越えて無事に屋上の地面に足を付けて一息つく。

天気は快晴。風は少しふいていて暑さはない。しいて言えば快適だ。

「とりあえず昼休みはここですごすか。」

大体追われるのは3人でも追うのは不特定多数なんだ。

そんな分の悪い鬼ごっこを長時間やるのはごめんだ。

2人には悪いが俺はここで昼を過ごす！

時間をみると後5分くらいで昼休みになるくらいだ。

俺は階段のドアの横の壁に背中を預けて座った。

とりあえず寝て過ごすでしょう。それ以外にする事ないし。

俺は静かに目を閉じた…

お昼休みに入ると普段とは違う騒がしさに学園内は包まれた。騒がしさの内容は今日の朝に配られていた号外のせいだと思う。

そのせいで私の所にも何人も生徒が来たから。

「一文字さん。真様はどちらを選ばれたのですか？」

「真様と桜様…。お似合いですわ。」

「いえ、椿様と真様がピッタリですよ。」

そんな言葉に私は特に返事を返さなかった。

何故なら状況もわからずに答えるのは間違ってると思うから。

まあ：確かにどうなってるのかは気になるけど…。

そんな事を考えてると私の携帯が震えた。

画面を見ると『冬野会長』と映し出されていた。

「はい。一文字です。」

『冬野です。今、大丈夫ですか？』

「はい。大丈夫です。」

昼食はもう食べたし他にすることもないし。

『でしたら手を貸して頂きたいのですが。』

「わかりました。どこに行けば？」

会長が指示したのは階段の踊場。：なんでここを踊場って言うのかしら？こんな所で踊ったら足を踏み外して落ちてしまいそうなのに。

「一文字さん。お待たせしてすみません。」

階段を眺めていたらそちらから会長がやって来た。手にはなにやら袋を持っているけど。

「いえ。それでなにを？」

呼ばれて来たけど何をするのかは全く聞いていなかった。ただみんなからの質問から逃れられるから来たのだ。

「屋上の柵に数カ所緩みと塗料の剥がれがあるとの事なのでその確認です。」

屋上は立ち入り禁止だから普段は確認出来ないから確かにそうなっている部分もあるでしょう。

「なぜ「一人でやるよる二人の方が楽しいと思いませんか？」

私の言葉を遮るように会長はそう言った。会長が言ったのは私が聞こうとした事の答えでした。私が聞こうとしたのは

「なぜ私が呼ばれたのか？」

だったのだから。

「今日は天気もいいですから屋上は気持ちいいでしょうね。」

会長はポケットから鍵を取り出すと私の前を通り階段を登っていった。

確かに教室にいるよりは何倍も気持ちよさそう。

私は会長に続いて階段を登った。

会長は鍵を開けてドアを開けた。

風がスーッと入って来て気持ちいい。これなら屋上はホントに気持ちよさそう。

「あら。」

なんだろう…。会長が何か見つけたみたい。

「何か？」

会長の背中に追い付き声をかけると会長はドアのすぐ横を指差した。

そこには壁に寄りかかって寝ている渦中の人、桂木さんがいた。

秋の日差しを浴びてキラキラと輝く髪。そして整った顔立ち。なにかの絵か写真のように見えた。

「騒ぎに疲れてお休みみたいです。…今の桂木さんを写真にとったら欲しい子が多そうですね。」

全くもって会長の言う通りだと思う。今や桂木さんは学園の人気者だし、憧れを持っている子も多い。

「どこから入ったの？」

私の口から出てきたのはそんな言葉だった。

会長が鍵を開けるまでここには入れないはずなのに彼女（彼かな？）はここで寝てる。これで寝てるんじゃないやなくて死んでたら屋外ながら密室的な感じなのよね。

「一文字さん、カメラ持ってますか？うまくいけば雑費が増やせますよ？」

会長はどうやら本気みたいだった。…たまにこの人の考えがわからないわ。

私は当然カメラを持っていないので首を横にふると会長は残念そうな顔をした。

「そうですか。では起こすと悪いですから静かに作業をはじめましょう。」

今度は首を縦に振り私は時計回りに、会長は反時計回りに屋上の柵の点検をはじめた。

点検中に校庭を見ると人の集団が元気に走ってるのが見えた。

あれは桜かな？当人の一人はここで寝てるのに大変ね。

屋上

「……ぎ……。」

「…らぎさ…。」

ん…なんだ…？

「桂木さん。」

肩を揺すられ声をかけられて俺は目を開けた。

視界に入ったのは俺の顔を覗きこんでいる会長さんとハリセンを振りかぶっている一文字さん。

「ダウト！なんでハリセンを振りかぶってんだ！」

そう言った瞬間に一文字さんはハリセンを背中に隠して首を横に振った。

「気のせい。」

「いやいや、気のせいじゃないから！肩からちょっと見えてるし！」

「それは幻覚。」

「それで、そっかあとか言わないからな！」

この子は平然と何を言ってるんだ…。

「桂木さん。そろそろ昼休みが終わりますよ?」

そんなやりとりの中、平然として居られる会長さんにも驚くけどな。会長に言われて時計を見ると昼休み終了5分前になっていた。

「随分と寝てたな…。しょうがない、教室戻るかな。」

戻ると逃げる所を目撃してた誰かさんがうるさそうだけど…。

「桂木さん。ここにはどうやって来たのですか?」

「そういう会長さん達はどやって?そして何をしてんですか?」

ここは立ち入り禁止のはずだからな。だからこそ屋上に逃げたんだし。

「私と一文字さんは生徒会の用事で、です。ちゃんと鍵を借りて入ってきましたよ?」

横では一文字さんが無言で頷いてる。へえ、昼休みなのに大変だなあ。

俺は立ち上がると屋上の落下防止のフェンスまで行った。

「俺は授業中に窓から教室を抜け出してここから上がってきたんですけど。」

フェンスから腕を出して下をチョンと指差す。

「そこから？」

「危ないですよ？」

まあ確かになれてない人なら危ないだろうな。かと言ってこんな事に慣れてる俺もどうなんだかな。

「霞ヶ崎では結構やってみましたよ？部活の勧誘とか意味の分からない事で追われたりするの多かったから。」

「勧誘？」

一文字さん、そんな首を軽く傾けながら聞いてくるなよ。

「そう。霞ヶ崎って人数多いから部活の数も多くてね。そんな部活連中から大会に出てくられて勧誘されてたんだよ。」

主に朝の登校時に勧誘されてたんだけど昼休みとかでも結構来てたからな。

「まあ、大体断ってたけどな。」

「それは何故ですか？」

おっと、今度は会長か。

「他の学校の真面目に練習してる人達にろくに練習もしないヤツが挑むのは申し訳ないから。大会ってのは日頃の成果を出す場だから。」

だから俺にはそういった方々と対峙する資格は無いと思ってるからな。

たまに出ても団体戦とかで負けないとか目立たないでやってたし。

そのせいでゆーちゃんに怒られた事もあったな…。

「そんな話をしてるより…昼休みもう終わりだろ？ 戻らないとな。」

ここで開始のチャイムが鳴ったらさすがに間に合わないからな。

「そうですね。私と一文字さんの仕事も終わってますし、戻りましょう。」

「来たルート戻るの？」

「なんだ？それはイジメか？普通に帰れるなら普通に教室に行くぞ？」

なんで自ら進んで苦勞をせないかんのだ。

「ではお二人共中に戻って下さい。鍵を閉めますよ？」

会長がドアを開けた状態のまま俺達を見てる。これは申し訳ないな。

いそいそと屋上から校内に戻ると会長はドアの鍵を閉めた。

「あ、桂木さん。2つほどよろしいですか？」

「はい？」

会長の声により階段に向かって出していた足を戻して後ろを向いて会長を見る。

「まず一つは、リボンを着けて下さい。リボン無しでボタンを開けるのは校則違反になりますので。」

ああ……。確か初日に姫ちゃんにも言われたな。懐かしいな。

確かにこっち来てから一度もリボンしてないな。

「取り締まられるならします。ただ不慣れなんでしたく無いのが本音ですけど。」

「それじゃあ校則の意味が無い。」

だよなあ……。守るのが校則だもんな。

ちなみに

『廊下の窓から飛び降りては行けない。』

『ベランダ（テラス）の手すりを使って屋上に上がっては行けない。』

』

は校則でやっちゃ行けないって書いて無いのは知ってる。

だけど

『屋上は危険の為立ち入りを禁ず。用事がある際はその旨を教師に伝え許可が下りた際には鍵を貸し出し立ち入りを認める』

って書いてあるからやっぱり違反か？

ドアから入らなければ違反にはならないのか？

「そして2つ目ですが…。」

そうだ、2つって言ってたな。

「来週の金曜日の午後は全校で授業は中止になります。」

授業中止！？それは願っても無い朗報じゃないか。

「ちなみに桂木さん。来週の金曜日は何の日だかご存知ですか？」

はて…？来週の金曜日？なんかあったか？

「その様子ではわからないようですね。」

はい。全くもってわかりません。

「来週の金曜日で…桂木さん。あなたの交換留学が終了します。」

……………は？

「そのため来週の金曜日の午後は集会が開かれます。」

終了…？もうそんなになるのか？

「どうしたの？」

「あ…いや…。そっか…交換留学だったんだな。」

なんか色々あったからここに居るのが普通になってた…。

そっか…戻るのか。

「その集会の際に桂木さんから一言頂きますので…そのつもりで居て下さい。」

会長はニツコリ笑って締めくくった。そして俺を追い越して歩いて行った。

会長の後ろには一文字さんが続いて俺は二人の後をただついていく様に歩いた。

何も考えずに歩いたけど気付いたら自分の教室の前に居た。

ちゃんと教室の位置を把握してるって事だな。

「…ま、真…。あんた…どこに…行って…た…のよ…。」

突如後ろからハアハアって荒い呼吸と共に両肩に手が押かれた。

恐る恐る振り返ると、肩で息をしながら俺を見てガツチリ俺の肩を掴む桜と喋れないくらいに疲労して俺の肩に手を置く椿がいた。

あ、あの…指めり込んでますよ？

ってか痛い痛い痛い痛い！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0139i/>

桂木さんと女子校

2011年9月16日00時35分発行